

289-Y76-2㊦



1200500732663



始



エ9A5



28
Y76
2

楠小井横

著郎三庄田上



246
21

序

政治家として、また勤皇の志士としての横井小楠の名は、かなり知られてゐるが教育家としての小楠については、まだあまり研究されてゐないやうである。しかし、小楠の本領はどこにあるかと云へば、その全生涯を、概観してみてもやはり、教育家としてもつとも卓越した人物であつたやうに思はれる。その性格にもまた教師として優れた點が多かつた。小楠堂の塾教育にしても、沼山津の閑居時代にしても、その生活の中心は廣い意味の教育であつた。そればかりか、福井でも江戸でもまたその旅行中でも、いつも彼の周囲にはその門下生が、影の形に従ふごとくつきまとうてゐた。小楠は、ひとり百姓町人の教育者であるばかりか、大名の教育者であり、或る意味では將軍の教師でもあつた。「帝王の師」といはれた所以である。

その教育家としての業績に於ても、文豪徳富蘇峰や蘆花の父萬熊をはじめ、五箇條の御誓文の立案に参劃した由利公正、明治教學の元勳たる元田永孚などの大人物を鍊成したといふことだけでも、日本教育史に不滅の光輝をのこしてゐる。

本書は小楠の全生涯をできるだけ教育的に評傳したもので、これによつて、昭和維新といはれる現代のわが若き教師諸賢に、明治維新時代の教育日本の先覺に對する關心を昂めようとした。それがため教育的に意義のある遺稿はできるだけ多く收載した。

なほ、本書は、横井時敬の「小楠遺稿」、山崎正董博士の「横井小楠」、赤尾藤市氏の「横井小楠」などを参考としたが、特に赤尾藤市氏には、本書のために種々の便宜を與へられたことを附記して、深く感謝の意を表する次第である。

昭和十七年九月

著者識す

目次

第一章	概観	一
第二章	家學	一〇
第三章	秀才	二三
第四章	遊學	三六
第五章	私塾	五四
第六章	開國論	七二
第七章	賓師	一三六
第八章	幕政	一六一

第九章 閑居……………	一八〇
第十章 最後……………	二〇〇
第十一章 教育觀……………	二三〇

第一章 概観



徳川十一代將軍家齊の時代、文化六年に生れて、明治二年まで、六十一年にわたる小楠の生涯は、時代的に観て決して短いものではない。徳川幕府の衰亡、封建時代の末期的現象を身をもつて體驗し、遂に明治新政府の成立まで、わが國史の上に最も多事多端であつた明治維新前後にかけの政治的中樞に參割してゐるのである。この間に、上には、光格、仁孝、孝明、明治の御五代の天皇を戴き、家齊、家慶、家定、家茂、慶喜の五將軍を経て、明治の新政府に及んでゐるのである。しかしながら、かく短からぬ生涯ではあつたが、横井小楠の一生は、決して華やかなものではなかつた。むしろ明治維新の椽の下力持といつた生涯である。華々しく政治の舞臺に立つといふことは、少く、生涯を通じて、政治の樂屋裏にあつて、新政治の旋轉軸を動かしてゐた觀

がある。そこに小楠の偉大さがあり政治家としての新味があると云へるであらう。

従つて、その生涯は、いはゆる波瀾萬丈といふものではなく、あくまで艶消しのものであり、そこにある起伏もまたむしろ陰性のものであり内面的のものである。かくて小楠の眞價を探索しようがためには、いたづらに傳記の表面を概観するばかりではなく、この華やかならぬ生涯を通じて示現された人間小楠の精神生活の轉化に着眼すべきである。經歷の底に潜んで、眞人の内生活の把握しなければならぬ。

今、この偉人を評傳するにあつて、あらかじめ、その生涯を大觀するため、大正七年、小楠五十年祭記念事業として企劃され、大正九年十一月沼山津に建設された頌德碑にある徳富蘇峰の碑文を次にかけて置かう。

小楠横井先生頌德之碑

皇政維新は帝國有史以來大和民族の精神的最高調に達したる一時なり。是の時に際し雲興風動龍驤虎變此の宏業を翼賛したる英邁奇傑の士前後其の人に乏しからず、然も其の識見高遠氣宇濶大一代の木鐸百世の師表と爲り、東亞の偉人と稱すべきは實に我が小楠横井先生を推さざるを得

ず。先生は文化六年八月を以て熊本城下に生る。少にして經國の志を立て、郷友として長岡是容、下津休也、荻昌國、元田永孚諸君子と切磋砥礪し、上國に遊びては藤田東湖、川路聖謨の俊傑と其の議論を上下し、歸來門を杜ぢ客を謝し潛心精思之を久うし、一旦豁然として得る所あり、茲に始めて自家の天地を開拓したり。

先生の學程朱より出づ、然も以爲らく宋儒は體有りて用無しと。乃ち致知格物、治國平天下の道に於て最も功夫を竭す。世の先生を目して實學派の泰斗と做す所以蓋し茲に存す。然も先生尙ほ自ら足れりとせず、直に洙泗の眞源に溯り更に進みて堯舜を祖述し、蕩々たる王道を闡明するを以て己が任と爲し、百尺竿頭更に一步を轉じて唯だ天を説く。先生詩ありて曰く、神知靈覺湧如泉不用作爲付自然、前世當世更後世、貫通三世對皇天。曰く、帝生萬物靈、使之亮天功、所以志趣大神飛六合中。曰く、道既無形體、心何有拘泥、達人能明了、渾順天地勢。と亦以て先生の造詣する所を見るに足るなり。

先生の門下郷國に多きも、所謂、豫言者故郷に容れられず、其の崇論卓說却て世俗の嫉視を招き、殆ど其の抱負を伸ぶるの地なし。然も吉田松陰、橋本景岳其の他の志士概ね先生を推して先覺者と爲さざるはなし、越前侯松平春嶽夙に先生の徳を慕ひ賓師の禮を執る。一藩其の風に化し

治教大に行はる。其の起て幕府總裁職となるや延て顧問となし機務に参ぜしむ。而して其の進言する所に皇室を尊崇し、格式門閥の舊習を打破し人材を登用し言路を開き、天下と與に天下の政を爲し、富國強兵の實を擧げ以て開國進取の國是を建てるにあり。然も先生の志漸く成らんと欲して、幕議變更遂に果さずして止みぬ。

先生胸襟灑脱心地光明、恒に衆難群謗の叢裡に坐し、危地逆境の中心に在るも夷然として意に介せず。其の所謂開國論の如きも尋常功利の見地より打算し來らず、直に天人一致四海兄弟の大主旨に基き、我より進みて國を開き我が王道を以て世界を化せんとするにあり。嘗て曰く苟も我を用ふる者あらば、將に使命を奉じ先づ米國に説き一和協同し、而して之を列國に説き以て四海の戰爭を弭めしめんとすと。乃ち現時の國際聯盟の如き先生既に六、七年前に於て之を洞見道破したり。先生が所謂天下經綸の道は富國強兵に止まらず、大義を四海に布くにありと爲したるも其れ茲に在る歟。先生の論甚だ高きも其の策する所毫も空疎ならず、利用厚生治國安民の術に於て皆な其の要を提げ其の玄を鈎せり。其の學技を興し物産を隆にし鑛業を開き海軍を擴張するが如き、一として今日の時節に適せざるものなし、而して明治大帝の維新の當初天地神明に誓はせ給ひ、帝國臣民が千載不磨の寶典として仰ぐ五條誓文の如き、亦た先生の暗籌冥贊に由るもの

あるは識者の夙に認知する所なり。

先生其の兄に悌に、其の母に孝に、人を誨へて倦まず。其の門人皆な其の器に随つて之を玉成す。人一たび先生に接す、八面玲瓏表裏透徹頓に自ら志氣の啓發を覺ゆ。晩年に追ひ尊王愛國の至誠惻々として彌々人を動かし、爲す可からざるの時なく化す可からざるの人なき概あり。明治の初期徴されて朝廷に出るや、愈々徳邵く道倍々熟し重きを廟堂に爲し、所謂帝王の師として啓沃の誠を竭さんとするに際し不幸凶刃に斃る。勝げて嘆ぜざる可ん也。先生の親友元田永孚曰く、先生は道學中の俊傑也。先生の知己勝海舟曰く、先生の胸五州を呑み眼一世を空らすと。俱に天の公論たるに庶幾し。

今や先生逝きて五十餘年、有志の士胥議し先生の爲に頌德碑を建てんとす。事九重に達し、聖旨を以て若干金を賜はる。寔に曠世の盛事也。嗟乎先生の崇貴なる人格と彌高の丰標と而して、其の汪洋として、垠なき神知靈覺とに至りては、固より區々文字の其の萬一を髣髴する所にあらず。今唯其の梗概を叙して之を天下後世に諗ぐと云ふ。

文豪の名文は、横井小楠の生涯を簡潔に叙して偉人の全貌を遺憾なく描き出してゐる。徳富蘇

峰の父、徳富萬熊は小楠の第一の門弟であつたことを思へば、これは單なる頌徳表といふことはできない。

この碑文によつても知られる通り、小楠の生涯は、まだ幕府の勢威の旺盛であつた頃から、漸く外交問題の壓力に堪へかねて幕府が崩壊し、明治新政府の成立するまでの日本の動きと一體となつて動いてゐる。そして、蘇峰はこれを「東亞の偉人」と頌してゐる。その初期に於ては小楠もまたいはゆる攘夷論者であり尊王論者であつたが、時勢を達觀して、開國論者となり、遂に反動的な攘夷論の亞流の兇刃に斃れたのである。勝海舟が「先生の胸五州を呑み眼一世を空うす」と評し、また小楠が「苟も我を用ふるものあらば、將に使命を奉じ、先づ米國に説き一和協同し、而して列國に説き以て四海の戦争を弭めしめんとす」と喝破するまでの思想的發展は、「熊本の偉人」から「日本の偉人」となり、更に「東亞の偉人」から「世界の偉人」にまで飛躍したものであつて、この間、「恒に衆難群謗の叢裡に坐し、危地逆境の中心に在るも、夷然として意に介せず」といふ生活態度の逞しさこそ、この世界的偉人の不羈の性格を物語るであらう。

われわれが今日、まさに求めてゐるところの「東亞の偉人」もまた、「恒に衆難群謗の叢裡に坐し、危地逆境の中心に在るも、夷然として意に介せず」といふやうな逞しい性格の人でなければ

ならない。もし、いはゆるA B C Dの日本包圍陣のなかにあつて東亞新秩序を呼號し、これを實現すべき今日の「東亞の偉人」に、かかる強烈な毅然たる性格がなかつたとしたら、それこそ、いふところの東亞新秩序の建設のためには、さして價値なき偶像にすぎないであらう。「知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」といふ五ヶ條の御誓文も、かかる熱烈な小楠精神の冥贊のあつたことを思ふて再讀する時、そこにまた世界をして皇道に歸一せしめんとする昭和維新の指導精神として、新なる感激をおぼへるであらう。

等しく明治維新の英雄といつても、大西郷や勝海舟にくらべて、横井小楠の比重を過小視するものは、まだ明治維新史の思想的底流を見遁したものと云はなければならぬ。勝海舟が「俺は今まで天下に恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲だ」といつたのも、幕末のまだ世人が鎖國の夢を脱せず海外の事情に暗い時にあつて、東に佐久間象山、西に横井小楠、この二人を五大洲を觀る兩眼球だと云はれたのも、當然である。

かかる開國の眼球といはれた小楠が、何故に「恒に衆難群謗の叢裡に坐し、危地逆境の中心」に在ることを餘儀なくされたかは、これはただ今より百年前の日本國民が、あまりに世界的眼識が遅れてゐたといふだけに歸することはできない。

もとよりそこには小楠個人の性格にもとづくものもあつたであらうが、より多くわれわれが反省せねばならない點は、今なほ東亞新秩序建設の國內的阻害とされてゐる日本國民の島國的性格である。

朝鮮海峽にトンネルを穿つといふことは、日本の持つ世界的技術をもつてすれば、難事ではないであらうが、この日本的性格の島國性を大陸と地續きのものとして、鍊成し直すといふことは、けだし、朝鮮海峽のトンネル工事に百倍する難事であり、かつ、東亞新秩序建設のためには、どうしても實現せねばならぬ一面である。

この意味に於て「東亞の偉人」といはれる小楠の生涯を概観して、その六十年の足跡を辿るといふことは、興亞教育の中堅たる青年教師にとつて、驚異的な收穫を約束するものであらう。そして、小楠の生涯のなかには、善い意味にも悪い意味にもとられる青年教師の性格鍊成に、最も深い示唆を與へるものが少くない。

「小楠遺稿」の「小楠先生小傳」には小楠の青年的性格を次のやうに述べてゐる。

「先生身材中人に及ばずと雖も、容貌魁岸眼光炯々一見して其偉丈夫たるを知るべし。性質聰明にして思想に富む。加ふるに非凡の識見を以てす。氣宇豁達神氣爽快、困迫の中に在りと雖

も憂色無し、人に接するに矜域を設けず。曠昔曾て我を敵視する者と雖も來れば則ち釋然たり、音吐朗々として談論風を生ず、人を教るや繩墨に流れず、燕談閉話の中能く其の情を盡くし、其蘊を吐しめ、其の悉さざる所を導き、足らざる所を釋ぬるの端緒を得せしむ。其怒るときは霹靂一聲心膽をして冷やかならしむると雖も一霎雨過て青天を瞻るが如く、一毫も迹を留めず、又事を他に爲さしむるや人をして其指示に出るを忘れ、其自ら思慮し得たる所を爲すが如き感あらしむ、又平素親に事ふること尤も謹み、人を憫れむこと尤も厚し、然れども議論操行、一世潮流の外に出るを以て合すもの稀れにして生涯殆んど坎坷の間に在り。晩年家人子弟を戒めて曰く、吾常に世と趣向を異にし、他の指目する所となる。其免れて今日有るは蓋し天幸のみ、假令吾今日非命に終るとも敢て或は復仇を謀る勿れと、言遂に讎を爲す。」

第一章 家系

★「小楠横井先生、名は存、字は子操、通稱平四郎、時存は其の實名なり、小楠は其號なり、又沼山と號す（一時畏齋の號あり、後用ひず）遠祖は北條氏に出づ、尾張に住す（尾州横井氏あり

其宗なり)後細川忠興侯(豊前)に仕ふ、相繼て世々肥後熊本藩主細川氏の臣たり、父諱は大平、藩の奉行職たり、剛直を以て稱せらる、先生は其第二子なり、文化六年八月、熊本市内坪井街の家に生る、母永嶺氏稟性厚重にして嚴なり、能く兒子を教育す、先生幼にして聰穎往々機敏人を驚かすの言行有り」

(小傳)

これは「小楠遺稿」にある「小楠先生小傳」の冒頭の一句である、(以下「小傳」とあるはこれを示す)

この小傳にある通り、日本精神の體現者であり、東西の偉人といはれる横井小楠は「遠祖は北條氏に出づ」であつて、その家系が「奇偉」と呼ばれる小楠の異色ある家系である。もとより北條高時にせよ時頼にせよ、徹頭徹尾、悪人であつた譯でも、全然日本精神の缺如した人物でもなかつたであらうし、また此の家系のために小楠が、常に世の非難の的となつた譯でもない。

しかし、小楠の唯一の肖像にも、北條氏の「三つ鱗」の紋があり、小楠の父は時直(太平)小楠の兄は時明(左平吉)であり小楠の實名も時存(トキヒロ、又はトキアリ)で、すべて遠祖北條時行以來、「時」の字が用ひられてゐる。しかもその遠祖は北條高時の第二子相模二郎時行で

ある。北條高時が、新田、足利のために鎌倉で滅亡の悲運にあつた時、その第二子時行は家來の諏訪三郎盛高に擁せられて信濃に逃れたが、盛高が足利尊氏のために敗れてから辛うじて行衛を晦まして逃れ、後、吉野朝に前罪を謝して免されてからは、或は北畠顯家に従つて足利詮勝を鎌倉に討ち、後には新田義興に従つて足利基氏を討つて義興とともに鎌倉に入つた。幾何もなくして義興も敗れ時行も遂に正平八年、足利氏のために捕へられて鎌倉龍口に斬られたのである。

時行の子、時満は母とともに民間に流落し、姓氏を秘して尾張國に土着したが、時満から三代目の時永に到つて横井姓を名乗り、それから代々この姓を用ひるやうになつた。時永は尾張國で二郡を領して城を築きその後横井家は、戰國時代の間に、織田、豊臣、徳川の家臣として重く用ひられ、祿高も多くなつたので、多くの支家ができたのである。その一族が尾張から遠く九州の熊本に分かれて行つたのが、小楠の祖先である。即ち寛永年間、横井時次が弟時助とともに、豊前藩主細川忠利侯に召抱へられて豊前小倉に下り、その後、細川家の熊本移封に従つて横井家は熊本に土着するに至つたものである。

熊本に土着してからの横井家は、時次の二男時國の次から三家に分れて三横井と呼ばれたが、小楠は、時國の二男時昭の流れで家系は次の通りである。

時次——時國——時昭——時秀——時元——時直(父)——時持(足)——時存(小楠)

以上のやうに小楠は、國史上に評判のよくない北條高時から出てゐる。しかしながら高時の祖父時宗は、元寇撃退の執權であり、泰時、時頼などの仁政も史上に有名である。

祖先崇拜といふことはもとより我が國の美風であり祖先の遺訓を生かすといふことは、子孫の義務である。家系といふものが、尊重されなければならないのも、また當然である。しかし祖先崇拜の本義、家系尊重の實踐となると、かならずしも單純なものではない。今日に於ても、源氏の末流を誇るものもあり、藤原氏を祖先とするものがあると同じやうに、平家の末流もあれば北條氏の血を受繼いでゐるものもあるであらう。日本國民のすべてが、忠臣義士の家系を持ち、全一億が楠木正成の子孫であるといふやうなことは、系圖的には正しいといふことはできないであらう。

また徒らに忠臣義士を祖先に持つといふだけで、現實的に忠誠を怠るものがあればこれは祖先の名を辱しめるものであると同時に、平家の子孫であるからと云つて、忠誠を遠慮したり、またいかに忠烈な行があつても、それが足利、北條の子孫であるといふことのために、その功績を抹殺するが如きことも、もとより日本精神の純正な發動とは云はれない。

山田孝雄の「國體の本義」のなかに次のやうな一節がある。

「我々國民の大多數は、皇室の支流分派よりなりてあるなり。或は國民の中には然らずして外國より日本に渡來したる種族なきにあらず。されどもわが民族は頗る同化力の旺んなる民族にして外國より渡來せる民族を日本人に同化せずばやまずといふ一の偉大なる特色あるなり、それ故に明かに外國人の子孫なりと思はれてある人にして日本の國民の最も優れたる花と見られてある人歴史上に多く見けるなり。二三の例をいはむ。坂上田村麿は文武の達人として古來名高き人なるが、この人は支那の後漢の靈帝の子孫なり。かの後醍醐天皇に櫻花の詩を賦して忠魂を捧げ奉りし兒島高德は新羅の王子天槍の子孫なり。又戰國時代に尊王の魁をなしたりし大内義隆は百濟王の子孫なり。又米澤藩の有名なる上杉鷹山は九州の秋月家より養子に行きし人にして、その秋月家はこれ亦、後漢の靈帝の子孫なり。如何なる事情によるか、古より支那朝鮮にて王室の代る度に其の王族が難を避けて安位の地を日本に求め、その子孫日本人に化せり。かの徳川光圀の師たりし朱舜水の如きも明の王族にして明の亡びたる後わが國に來りしものなり。又武士道の花と唱へらるゝ赤穂四十七士の一人たる武林唯七は淺野幸長が朝鮮より捕虜として携へ來りしものゝ子孫にしてその本姓孟氏なれば、俗に孟子の子孫なりといへり。か

くの如く、わが日本の歴史に於いて偉大なる人格者なりと思惟されてある者の中には外國人の子孫少からずあり。彼らはその源は外國人の子孫なりといふべきならむが、わが國に入りてわが民俗に同化して日本國民の模範となりてあるにあらずや。」

ここに例としてあげられた人々のみでなく、國史を學んだものは、いかに我が國に支那や朝鮮からの歸化人の子孫の多いかと想像することができるであらう。いはんや、朝鮮や臺灣が我が國家の一部となり、滿洲國を盟邦として、日滿華相携へて生命がけの東亞新秩序建設に邁進してゐる今日においては、北條氏の子孫である横井小楠の忠誠の生涯こそ、新しく見直さるべきものである。

祖先崇拜、家系尊重を單に表皮的に形式的にのみ解することは、決して全一億の總力戦に望む現代の日本人に通用する理論ではない。より新しい日本人の道を開いたところに、わが小楠の創造的な生活があつた。

われわれは、正成の子孫と誇稱する人物が眼前にあらはれたとしても、ただそれだけでは、眞の子孫とは認めないであらう。むしろ正成を祖先に持ちながら、それ以來數百年の連綿たる發展的な努力のあまりに貧弱なことに驚されることもあらう。われは楠公の末流なりと大聲で名乗る前に、それに匹敵するだけの實踐を要望したのである。この意味で、北條高時の末流である横井小楠の滅私奉公の生涯こそ、その家系的發展の努力に對してだけでも頭を下げないものはあるまい。そして小楠こそ、日本人としての北條氏を、眞に生かきつたものであり、祖先の汚名を雪いだものである。

小楠は、その家系が北條氏から出てゐると云つて、祖先の名に甘へて、北條氏の非道をまで辯護するといふやうな小さい人間ではなかつた。

彼はその「南朝史稿」といふ未完成の南朝史のなかで、北條氏の不忠不臣を責めまた時行の史實についても苛責するところなく論述し、あくまで楠木、新田、北畠、菊池などの吉野朝の忠臣を讚美して居るのである。のみならず北條氏の子孫にもあらざる北畠親房や徳川光圀でさへ、「神皇正統記」や「大日本史」のなかで、泰時の政治的功績を認め、承久の亂における不臣の行動をも止むを得ざるものとしてゐるのに、小楠はその「泰時論」のなかで、これを論破してかう述べてゐる。

「源義公の史を脩むるに迫んでも亦、謂く、王師に抗し乘輿を指斥せしは、泰時の本心に非

ず、誠に已むを得ざるなり。後世遂に泰時の心事を知る者罕なりと。蓋し賊臣顯に其逆を行ふ者は見易く、隱に其志を行ふ者は知り難し。彼の泰時は兇逆、義時に浮き、而して隱賊も亦是より深き者あるなり。」

小楠は北條氏を斷するに假借するところはなかつた。同じ論稿には更に、「泰時は大奸隱賊神人の容れざる所」と斷じ「嗟乎、泰時は奸賊の尤なる者、以て天下の愚夫を欺き以て名公巨儒を欺くは則ち夫の操と昭との如きも未だ以て其の兇逆隱賊を比するに足らざるを知るなり」と、結んでゐるのである。

小楠の號がその小楠公崇拜に基くものであるといふのは、小楠研究家の略一致するところである。小楠は、大楠公、小楠公を崇拜したが特に楠正行の忠孝に私淑したことは事實である。その「楠正行論」の中には、世上の俗論が正行の四條畷に於ける死を、「多病速死」と觀るを歎じてその「深心苦行」を闡明し、「余嘗て謂へらく、正成兵を用ふること奇正變化、固より古今一人なりと。神率堅を摧き疾風機に乗ずるが如きは、正行特に乃父より優れり。之を他人に求むれば太だ源廷尉に類せり」と評してゐる。

小楠は、嘉永四年、東上の途中、吉野朝の遺迹をたづね、後醍醐天皇の御陵を拜し、正行にゆかり深い如意輪寺に詣でてゐるが、その四月十六日録には、かう書いてある。

「早朝時の宿出立。橋本の驛より、紀伊と大和の境なる「まつち」「五條」「うの」「ひかゐ」「本へちだ」「こしべ」などを過ぎ六田にて渡船。これまでは芳野川に沿ひて來り、これよりは山に登る。一藏王堂あり、村上義光の塚を過ぎ、やがて一目千本に到る、左右の櫻木多く唐金の鳥井ある途の右手なるさとや平左衛門に宿を定め置き、吉水院に詣づ。太閤花見の時の遺物たる屏風、義經居間の跡、皇居の址などあり。それより如意輪寺に向ひ、寺の上なる御陵を拜す。玉垣などいと新しく陵には松、杉、檜の類多し、實に寂寥を極めてそぞろに意を催す。恐れながら一杯の酒を瀉ぎ、退て一杯を呑み奉弔。石など戴きて引返す。路に如意輪寺に立寄れば寺僧いとまめくしき者にて、種々取出せる寶物の中には勅作の御像をはじめ武重の筆とて天皇の御像ありて拜觀す、正行の銚も彫りし和歌の拓本を貰ひ受け此方より正成及び菊池正觀公の像や先生の詩を奉納する約束をなして薄暮宿に歸る。」

この時、如意輪寺の僧と約束の菊池武光の畫像は、嘉永六年四月に到つて奉納したのである。

また小楠は、翌十七日は千早村に宿り、十八日には千早城址に登つたが、この時、千早城址にあつた石と竹とを携へて歸り、この竹を軸とした筆と石とを知人に贈つたといふことである。

以上のやうな事實は、小楠の小楠公に對する崇拜のなみなならぬものであつたことを立證するものであつて、ここにわれわれは、北條氏の流れを酌む小楠の尊王憂國の生涯に對して特殊の思慕を寄せるのである。小楠といふ號や、小楠堂といふ名稱は、單に忠臣孝子にあやかつた命名ではなく、むしろ不忠不孝の徒をして純日本精神に生きぬかせるための教育的な意味さへ含まれてゐるであらう。

要するに小楠が、北條泰時や高時の非道を攻撃し、新田、楠の忠誠を讚美したといふことが、小楠の眞の祖先崇拜であり忠孝の道であつた。しかし、小楠は決して、これがために我が横井家の祖先を輕んずるやうなことはなかつた。彼は無二の家系尊重家である。嘉永四年には自ら名古屋を訪ね、同姓横井家の家譜を半ヶ月間も滞在して調査し、その家譜を謄寫し、菩提寺にも詣で祖先の遺物を觀て祖先の徳事をしのんだ。この時、去るに及んで僅か十六才の横井家宗家の主人に對して與へた詩には、

「祖先百戰の勞を以て僅かに其の家を起すも、子孫安然として其の業を有つ、之を思ふ毎に眞に悚然として内に起らずんばあらず。而るに或は祭事を怠り、或は職分を荒みて、逸樂以て其の生を送る、罪を神明に取らざるは幸なり。」

と述べて祖先への務めを勵ましてゐる。また彼は常に、「皇天を敬し祖先に事ふるは本に報ずるの大孝なり」として、大孝を重んじたのである。

小楠の沼山といふ別號は、四十歳以後に用いたもので、これは居を沼山津に移してから地名によつて名づけたものである。もつとも小楠もやはり楠町といふ地名によつて名づけたといふ説もある。

小楠の生れたのは熊本市の北、熊本城址の北東にある内坪井といふ町で、時は嘉永六年八月十三日、かの英船が長崎に來て民家を掠奪し長崎奉行松平康英が責を負ふて自殺したといふ大事件のあつたのは、小楠生誕の前年であつた。ペリーの浦賀に來たのは小楠が四十五歳の時であるから、天は恰も外艦渡來の風雲の中に活躍させるためでもあるかのやうに、外艦の風當りの荒い九州の一角に、この東亞の偉人を生誕させたのであつた。

父の時直は、小傳に「藩の奉行職たり剛直を以て稱せらる」とあるが、僅か十五歳で小楠の祖

父時元（左平太）の跡をつぎ、はやくから武術學問に出精のゆえを以て藩侯から幾度も賞せられ、役も次第に昇進して、目付から郡代、奉行職などの要職に任ぜられ、在勤中も功勞顯著をもつて賞賜された人物であつた。そして小傳に名の如く「剛直」とあるは、やはり小楠の父たる性格があつたものと思はれる。小楠の生れたのは父時直二十七歳の時であつた。

母かす子は藩の勘定頭や算用頭を勤めてゐた永嶺仁右衛門の女で、婦人には珍らしく聰明で數學的頭腦の優れた人であつた。小傳にも「稟性厚重にして嚴なり、能く兒子を教育す」とあるやうに、母はむしろ父よりも強い男勝りの性格の人で、後に小楠が天下の名士となつた後も、來客や門弟の前で頭から叱言をいふ母には、さすがの小楠も閉口したといふほどであつた。

しかしこの母の性格は、小楠の性格のなかにも繼承されたやうである。この母の教育を受けた小楠は、やはり幼少の頃から、異色ある少年であつた。

小傳には「先生幼にして、聰穎、往々機敏人を驚かすの言行あり」とあるが、幼少にして小楠は相當の腕白で、ために附近の子供は生創の絶えまはなかつたと云はれた。また他家の犬や猫を河に投込んだりして、母を困らせたことも一度や二度ではなかつた。

善く云へば幼少の時から悪戯をするやうなものにして、はじめて普通線以上に傑出する人材た

ることができるのである。小楠もまたこれであつた。

或る時、あまり悪戯がひどいので、母は小楠を押し入れの中に閉ぢこめて置いた。暫くしてすると、中から「大便々々」と呼ぶので、母が押し入れの中で大便をされては大變と思つて襖を開けた途端に彼は戸外に飛び出した。母が押し入れの中を見るときとより大便のあとはなかつたといふ話が傳はつてゐるが、彼は幼少の頃からすでに奇智をもつて人を驚かしたのである。

また、十歳頃のこと、小楠は友達と争論の結果、相手に小便をひつかけて歸つた。すると間もなくその友達が、小便をひつかけて、この儘黙つてゐては、武士道が廢るから仇討に來たと怒鳴り込んで來た。これには小楠も驚くかと思ふと、彼は、そんな馬鹿なことがあるか、武士たる者が小便をひつかけられた時に、すでに君の武士道は廢れてゐるではないかと、やり返したので、相手もこれには開いた口がふさがらなかつたといふことがある。

これらの逸話のなかにも、小楠が、單なる悪戯者といふだけではなく、そこには何か一つの理論といふか機智といふか、すでに幼少より不敗の氣概があつたやうである。

小楠の生立について、注意されることは、家系はとにかく系圖の正しい武人の家に生れたのであつたが、たかだか百五十石位の貧乏侍の家の二男坊であつて、その少年時代から、何不自由

なき坊ちやんとして育つたのではなく、生れながらにして困苦缺乏のうちの人となつたといふことである。これは偉人の少年時代の環境としては、殆ど定石のやうなものであるが、現代人のなかには、これとは全く反対に、やはり裕福な家庭に育つたものが、洗練された豊かな性格が出来あがるやうに考へられるのが普通である。しかし、これは教育的に大いに反省さるべき通念である。逞しい性格は、やはり困難缺乏にたゆる環境から生れるのであつて、これが大成された時、はじめて眞に洗練された、豊潤な人間性が形成されるのである。國家の場合にも、もしも物質的に裕福な國家が世界の指導者となるものとすれば、世界秩序の建設者は、米國の外にはあり得ないのである。東亞の偉人としての小楠の強靱な性格は、やはり少年時代の苦闘から鍛へあげられたものであるといふことは、ヒットラーやムツソリニーの場合と同様である。

第三章 秀才

★「熊本城外部に騎射場あり、先生年十三騎射を此處に習ふ、一日同年の友下津休也（始め久馬と云ふ家祿千石を領し藩の舊家たり）と、馬を駢べて射場より歸る途に、談偶々時事に涉る、

慨然として澄清の志を吐き、他日相共に國事を振興せんことを期す、是れ則ち經國の志を起せし始めなり。

藩の學校を時習館と稱へ、寶曆年間に創立し爾來繼續して衰へず、先生蚤歳より入校業を受く、長ずるに従つて業大に進む、藩主屢章服及金幣を賞賜す、校内に寄宿舎有り、居寮と云ふ、俊秀を撰拔し人材を育成す先生も亦其撰に中る、遺稿中漢文の存するもの多くは當時の作なり。（先生後來文章を作る甚だ稀なり）然れども其志す所文字章句の間に非ず、而して史書を涉獵し好て古今の治亂興亡の迹を見る、身實際に遭逢する者の如く、議論人意の表に出づ、天保九年居寮長となる、長岡是容（細川三家老の一にして家祿一萬五千石を領し世々藩の執政たり）人と爲り溫厚にして識見有り能く士に下る先生と布衣の交りを爲す」（小傳）

幼少にしてすでに人を驚かすほどの腕白少僧であつた少年小楠は、十三歳にしてはやくも偉人の生涯を豫報するやうな逸話があつた。即ち前記のやうに舊藩の僅か一歳年長の友、下津久也と城南の騎射場からの歸途、馬上で盛んに國事を論じ、將來は共に天下の事に當らうと盟つたといふのである。十三歳にて天下に志すといふのは、今日の青少年と思ひ較べてまことに驚異すべき

ことである。これは社會や學校における教育的雰圍氣の相異から來たものであらう。當時の教育は、立志教育といふか、はやくから、人生の目的について考へさせるやうであつた。學問とは單に就職や自己の安樂な生活の手段としてではなく、ただちに、國家社會のためであり治國平天下の道と考へられてゐたやうである。かの頼山陽が十四歳にしてはやくも一詩を作り、「千歳、青史に列するを得ん」と大志を抱いてゐたやうに學問武藝に志すものは、その出發點たる目的の確立を重大視したものである。特に武士の教育に於ては天下國家を動かし經國の目標に着眼して、立志を重視した。しかし、それにしても僅か十三四歳にして、はやくも經國の計を堅く盟ふといふのは、小楠の非凡にして早熟な天性を物語るものである。

當時、肥後藩の教育機關としては、時習館と東西の兩榭があつた。時習館は寶曆四年に藩の文武藝の講習所として熊本城内二の丸に建設したもので東西兩榭は講武場であつて、時習館に附屬して設けられたものである。藩士の子弟は十歳前後から時習館に入つて漢學、習字、古實禮式、數學、音樂などを學び、十五歳前後からは東西兩榭に入つて劍、馬、射、槍、砲、泳等の武術を學ぶのである。時習館は、一日と十五日の定休日以外は毎日、授業があるが、兩榭の稽古日は月幾回かと定められてゐた。しかし、この他に、各地方に藩から命ぜられた句讀師や習書師や武術

の師範があつたので、時習館の初等科の子弟は、時習館での修學の傍、各自の希望に應じて、句讀師や習書師の自宅へ通學し、また兩榭の稽古日以外にも、各師範の道場に行つて武藝に勵むのであつた。また時習館では、十歳前後から初等科として句讀、習書の二齋に、十五六歳より蒙養齋に入り、ここで試験を受けて轉且を許されると講堂に出席して十八歳から高等の學科を學ぶのである。その後は何時まで在學とも限つてはゐないが、この講堂の中で特に秀才と認められて將來の藩の指導的人材たるべきもの二十五名を選抜して居寮生とし、藩費で館中の寄宿舎に收容して更に教育するのである。

かうして肥後藩士の青少年は、極めて組織的系統的な教育機關によつて、誰でも文武兩道を修練することとなつてゐた。

小楠はもとより、小祿子から藩士の子弟として十歳頃から時習館に入學したが、果然、文武兩道とも群を抜き、十五歳の時は修學の出精を賞されて金二百疋を受け、十六歳の時ははじめて藩侯に見參をゆるされ、二十一歳の時は犬追物等の武藝が上達したといふので賞詞をたまはり、また學藝進歩の賞詞をも受けたのである。さうして二十五歳の時は居寮生に選抜されるに到つた。

小楠は居寮生の在寮期間と定められてゐた三年目の二十八歳の時は、講堂世話役から更に居寮

世話役に擧げられ、その翌年、遂に居寮長即ち塾長を命ぜられ心附として毎年米十俵を下賜されることとなつた。これには小楠自身も自己の才能に對して十分の自信を得たことであらうか、また當時の門閥や格式の重視される時代に、僅か百五十石の小祿の家の、二男即ち冷飯の自分に生れた小楠が、藩内の秀才を集めた居寮の寮長にまで、拔擢されたといふことは、まったく當人の實力の然らしめるところであつて、藩當局や藩士をも驚かしたことであらう。

ただ、父時直が、小楠二十三歳の天保二年急逝したため、小楠の居寮長にあげられたことを知らなかつたのは残念である。

凡そ當時の塾長の地位は、單に文武の道に上達してゐるだけでは勤まるものではなかつた。そこにはいづれ劣らぬ秀才ばかり居寮生の信望を集めこれを指導するだけの人物でなければならぬ。いはゆる長たる器でなければならぬ。十三歳にして早くも天下國家を動かさうといふ大志を立て、遂には五大洲を呑むと云はれた小楠は、青年時代から既に十分の政治的力量があつたものと考へられる。

當時の學生は、今日の青年學徒のやうな從順なものではなかつた。殊に熊本城下の藩士の子弟は、各その文武兩道の達成のため、坪井連とか水道町連とかいふやうに、地域別に團結して郷黨

連を結成し、それが凡そ十一二連もあつた。さうしてこの各連中は内は大いに團結を固くし、お互に制裁し合つて、切磋琢磨するかはりに、他の連中との間には相當猛烈な競争意識があり、反目軋轢の結果は喧嘩口論となり叩合、毆打から遂に抜刀して争ふことも珍らしからず、父兄の中には却つてこの争鬪に應援し勝つて歸れば我が子を賞め負けて歸れば叱つて激勵するといふやうなものもあり、少年の癖に刃傷や割腹も頻々と行はれたのである。これはまた一面には當時の武士教育の眞剣さを語るものでもあるが、もとより弊害の伴ふことは明らかであつた。當時、居寮長としてかかる暴虎のやうな青少年の間に睨みをきかせることは、蓋し容易のことではなかつたであらう。

小楠は當時のかかる刃傷沙汰に對してかう述べてゐる。

「吾が目撃せし所の相殺刃せし者に藪田若次の河井清十郎に於ける、塚本久之亢の鎌田某に於ける、澤山の禿本某に於ける、青木某の笈田平八に於ける及び崎村の事有り。甚しいかな相殺するの多きや。青木の刃は崎村の事と同日なり。是れ又人事の至變なる事、焉んぞ天の今日の大弊を戒しむる所以に非ざるを知らんや、(是れ士以上の相殺する者、夫の輕士以下の如きは枚擧して之を書する違あらず、憚々焉たり。)

かくの如く小楠もまたこの弊害を指摘してゐるので、恐らくかかる弊風の改善のために努力したものだと思はれる。いづれにしてもかかる學徒間の武士道をはき違へた弊風は、明治時代まで各地に残存したやうであるから、當時、いかに、これが根強いものであつたかを察することができ。かうした弊風に溺れることなく超然として眞摯な學徒の道を歩み、遂に藩士の子弟中の第一の地位を得た小楠の修學について、小楠研究の權威たる山崎正董博士は、その大著「横井小楠」のなかで、「何が彼を奮勵せしめたか」を説いて、「二男に生れた小楠は文武に拔群の上達を見れば一生兄の厄介者とならねばならぬ運命に置かれてゐた」ことを指摘し、「人一倍明敏な頭腦の持主たる小楠が自己の現在の境遇立場を省察し、將來の立身出世につき考慮せぬ譯はない。彼は時習館や東西兩樹などに學び、二つ違ひの兄時明と俱に火の如く競ひ、血みどろになつて勵んだので彼の文武藝はめきめきと進歩したと述べてゐる。

小楠の時習館居寮長時代に、やはり選ばれて居寮生となつたものに、元田永孚がある。元田永孚は後には明治天皇の侍講となり、樞密顧問官となつた明治の功臣で、かの「幼學綱要」の著者として、また文部大臣井上毅とともに教育勅語の立案に當つた人として、日本教育界に永遠に忘

れられぬ「教學の父」であるが、その當時から元田は終生、小楠を師と仰いでゐるのである。しかし、當時の元田家は横井家よりは其の祿高も多かつたが、それでも當時は、夜も家にただ一燈があるだけで、それに元田が小さい机を出して勉強すれば、その傍では、祖母、母、妻、下婢二人の五人が、その燈光を借りて木綿車で綿糸を挽くといふ状態で、米を賣つては作る一家の一月の費用は後の金壹圓五十錢であつたといふ。これは元田の回顧録たる「還曆之記」に記すところであるが、更に「家屋の陋弊は尤甚し」といふに見れば、元田家の家屋そのものも貧弱なものであつたであらう。

元田家にして既に然り、それより遙かに微祿な横井家の貧困は更に甚しいものがあつたであらう。小楠が、文武上達をもつて、幾回となく金子や、米や章服を賞賜されたといふのは、餘計な賜物ではなくて、直ちに生計の足しになるのであつた。そこは今日の學生の優勝カップや文學賞とは、およそ趣きの違つたものであり、貧乏侍の子弟の學問や武藝の修練の眞劍さも、ただに身分や生活の向上と國家の革新と一體であつた。彼等にとつては、學問とは有閑人の閑つぷしではなかつたのである。

もとより小楠の實力は、門閥や家祿や家庭の貧富を超へて輝いてゐた。

元田の「小楠遺稿」によせた、後考には、

「先生は道學中の俊傑なり。少にして志天下を振起するにあり。餘年二十、初めて先生に見ゆ、先生曰く、學を爲すには須らく古今に通じ大義を明らかにし、活見を開きてこれを世務に施すべきのみ。かの詩文の若きも亦忠孝の天性より發す。かれ章句に拘々たる者は俗儒にしてともに論するに足らざるなりと。先生時に二十九、余は師兄を以て之に事へ而して先生は余を待つに心友を以てせり」

とあるが、小楠の學問の目的は、「古今に通じ大義を明かにし、活見を開きてこれを世務に施す」にあつたのである。

聖賢の言葉を暗誦したり捧讀みするだけが、學問の使命ではなかつた。

これをきいて當時、青年元田がいかに感激したことであらう。元田は當時を回顧して、
「余先生に遇ふは此日を始めとす、其論鋒氣慨識見の雄大非常たることを知り大に敬慕する所あり。是より専ら先生に就て講學し、自ら謂らく經書は人道の軌範忠孝仁義は吾心の素定する所、其の事實に運用し家國に達する識眼を歴史に注ぐにあり。詩は性情を言ふ既に好む所、文を學んで以て吾蘊する所を發揚すべし。之を以て居寮三年の學と決し必ず成す所有らんと。因

て専ら歴史を讀み文章を學ぶ、歴史は先生と會讀し、一文を作れば必ず先生の批閱を受く。先生亦余が志行文才を稱して居寮中の巨擘と爲す。」
と述べてゐる。

元田にとつては良師を、そして小楠にとつても、門弟中の巨擘を獲たわけである。元田永孚がわが「教學の友」とすれば、小楠もまた日本教育の師父といはなければならぬ。

時習館時代に、小楠に師事したものはひとり青年元田のみではなかつたが、ここに小楠にとつて特記すべきは、小楠と布衣の交りを結んだ米田是容（長岡監物）を得たことである。小楠は米田より四歳の年長で秀才とは云へ、米田家は壹萬五千石の國家老であつて、横井家はその百分の一、しかも小楠はその二男であるから門地の上では雲泥の差がある。しかし二人はまったく肝膽相照す盟友となつたのである。小楠がこの門閥米田を得たことは、青年學徒の意見を政治的に反映させる上に好都合であり、そこに小楠の學問の目的たる「大義を明かにして世務に施す」ための有力な手がかりを得た。はやくも小楠の政治的手腕を見ることができぬ。

秀才として藩當局に認められ、また元田永孚や米田是容を門弟や同志とした時習館時代の小楠は、いはゆる藩校の模範青年學徒であり、これをそのままに藩の出世街道を直進すれば、必ずや

肥後藩の重職となり藩の有爲な人材となるべき運命にある。

しかしながら、小楠の前途は決して藩の要職でも、郷土の有志でもなかつた。思ふに青年小楠の秀才といふ意味は、藩の人材を養成するといふその教育目標と必ずしも合致する程度のもではなかつたからである。

すでに述べたやうに、彼は幼少にして剛氣の母を手古すらせるほどのあばれん坊であつた。單純な意味における「良い子供」ではなかつたのである。そして、世界の大人物といはれる程の人物の少年時代が、ただ單に、素直なよくいふことを聴く良い子供でなかつたといふことは、これは教育上、かなり大きな問題を投げかけるものである。我が國の偉人の場合に於ても、その實例は少くない。

また國家を動かし世界を動かす程の人材は、ただ單に、消極的な意味における「よい子供」の成長したものであり得ない。この世界的烈風のなかに、強固な一つの意志を表示しなければならぬ世界的英雄が、その幼少の時代に、細瑾をかまはぬ腕白小僧であつたとしても、それはその將來における拔群の發展力を培ふために必要な活動であつたといふことができるであらう。

小楠もただ藩の教育當局に、誦へ向きに出來た學徒ではなかつた。少くもそれ以上の秀才であ

つた。

小傳にも「然れども其志す所文字章句の間に非ず而して史書を涉獵し好て古今の治亂興亡の迹を見る、身其際に遭逢する者の如く議論人の意表に出づ」とあるのは、それである。ここには小楠のいかなる意味における秀才であつたかを表してゐる。即ち、小楠はただに文章を作り古典を讀むだけでは満足せず、歴史書を好んで讀みしかも、治亂興亡の迹に興味を持ちその史實の中に身を置いて研究したものである。そしてその議論はただ單に、人の意中にはまるに止まらず、時にその意表に出たのである。ここに新しい幕末史を作らうとする小楠の大志があつた。そして、彼が元田永孚に訓へて學問の要を説いたのもそこにあり、また門閥の米田是容が同志の盟を小楠にもとめたのも、實にそこにあつた。

彼が時習館で學んだものは、四書、五經をはじめ孝經、小學、近思錄、傳習錄などの經書であつたが、特に、左傳、史記、漢書、通鑑、綱目などの支那の史書及び、大鏡、増鏡、神皇正統記、太平記などの我が國史に關するものを愛讀した。

従つて當時は盛んに漢文を以て史論を書いたらしく、小楠遺稿の中にある「明太祖論」「尊氏論」「石田三成論」など、みな時習館時代のものである。彼は何事に於ても青年時代から一つの

識見をもつて研究するのであつた。國史や古典を學ぶにしてもそれを自家藥籠中のものとせねば止まない旺盛な知識慾があつた。小楠は後に「唯だ書に就て理會す、是れ古人の學ぶ處を學ぶに非ずして、所謂古人の奴隸と云ふものなり。今朱子を學ばんと思ひなば、朱子の學ぶ處如何と思ふべし、左はなくして朱子の書に就きては全く朱子の奴隸なり」と述べてゐる。小傳にいはゆる「古今の治亂興亡の迹を見る身其の際に遭逢する者の如く」とあるのも同じ意味である。彼は好んで程朱の學を學んだが、しかし決してその奴隸たるに甘んずるものではなかつた。従つて、彼の文章もその書もまたただ迫力そのものやうなものであつて、いはゆる文法や書法にのみ捕はれたものではなかつた。

肥後藩の碩儒であり小楠の親友であつた木下韓村は小楠の文章を批評して「君の文章は例へば猛將悍卒が戰陣に望む時、一途に隊伍を整へ、敵將を殺して前進するやうなもので、ただ敵の鋭鋒を衝き寇賊を殺敗させるのを以て軍功となして敵兵の首級を獲ることなど氣にも留めない。これもとより全勝の軍法ではあるが、一撃手を負はせたままでまだ首を斷たない者が進軍の後に累累と残されてゐるのは軍制の完備したものとは言はれない。(山崎博士に凭る)」と述べてゐるが、これは小楠の文章の批評であるとともに、またその人間批評といふべきであらう。

小楠が居寮長として居寮生であつた元田等に對して教へた言葉にも、文章を學ぶのは決して章句の末に拘々として記誦詞章のみに捕はれることなく、自己の識見を陳べ、その志を天下に呼號するにあるから、文を草するには自己の胸中にあるところを自在に發揚せよといふ意味を述べて、勵ましてゐる。そこに文章の士としての青年小楠の非凡の見識があつたのである。

なほ、これに關して小楠研究家、山崎博士の小楠の文章觀にはかう述べてゐる。

「小楠の文章は彼が夙に國家經綸の志を抱き自ら天下の士を以て任じてゐただけに、世の所謂文士等のそれとは全く撰を異にしてゐる。即ち殊更文を飾りて辭采を銜ふが如き小我を弄せず飽くまでも意を主として一氣呵成に筆を下したので、其の文自ら滔々として一瀉千里の概がある。これ畢竟其の懷撫する所の志操が博大で、其の識見が高邁であるからだ。つまり彼の文章は作らながために「考へて書く」のでなく、傳へんがために「考を書く」のである。されば彼の文章は其所高所に向ひ一直線に筆を進める所に其の特長があるので、決して世の所謂模範文にあらざるは勿論、木下の評せる如く文章の形迹上には幾多殘された點があり、加之誤字や宛字も随分多く時には脱字すらありて目で見るとべきでなく、心で讀むべく朗々口に誦すべきものではなく、黙々として心に味ふべきものである。」

けだしこれらの文章批評は小楠の文章を知り小楠の人間をふかく知り得た結果の評言であらう。古來、「文は人なり」といはれるやうに、小楠の文は小楠の人の表現であり分身であつた。小楠が秀才であつたといふ意味は、文章に於けると同様に、超俗的なところがあり、進んで時風を指導せねば止まない逞しさにあつた。

小楠の文章が多少の缺點や誤字にかかはらず時代をリードする迫力があつたやうに、彼の人物にも細瑾にかかはらず當時の青年を指導する魅力があつた。小楠の文章は決して模範文ではなく、小楠の居寮長は單なる模範生ではなかつた。少くも世俗のいはゆる模範生以上の高い志操と理念を抱く青年居寮長であつたであらう。

かくて不世出の秀才小楠は、居寮長にあること二年にして、遂に藩命によつて江戸に遊學することとなつた。これは藩の學徒としては最高の榮譽であつて、いかに藩が小楠の前途に囑望してゐたかが察せられる。彼が、一藩内の秀才から、日本的な飛躍の時機は到來したのである。

第四章 遊學

★「天保十年三月藩主の命を以て江戸に遊學す（東游章は此時の詩稿なり）當時文學旺盛府下碩儒と稱せらるるもの者少からず、天下大名の士も亦多く集まれり、先生此の間に交遊す、而して、水戸藩藤田東湖、幕士永野永淑、川路某等と最も親交、名聲漸く諸名士の間に藉々たり、時に壯齡英氣人を壓す、或は時俗に觸るるものあり、藩廳遽に歸國を命ず、先生命を得て特に程に上らんとす、水戸烈公其才名を聞き之れを收用せんと欲す、乃ち侍臣藤田東湖をして來て内諭を傳へしむ、是より先き先生水戸藩の慷慨自ら負み、局量相争ふの非なるを嘆し、屢東湖に語る（藤田氏の宴會に望み席上賦贈の詩參看す可し）東湖も亦強て辯せず、是に至り先生噴然として曰く、出處進退自ら道有りと、遂に辭して就かず、十一年四月、國に歸る、其の江戸に在ること僅かに一歳なり」（小傳）

天保十年の春三月、三十一歳の小楠は、いよいよ熊本を發足して、江戸に遊學することとなつた。鎖國、鎖藩の風の強いこの時代に、藩から江戸へ遊學させるといふことは、異數の拔擢であり、藩に於ける青年學徒の羨望の的となつた小楠の得意はいふまでもない。秀才小楠の名は、この藩命によつて確認されたのである。

出發の日取ははつきりわからないが、三月半ばのことであらう。學友に送られて熊本を出發し、大津に一泊してここで學友と訣を別ち、阿蘇、内牧を経て、豊後路に入り、兄時明が郡代を勤めてゐる鶴崎港に暫く滞在して、三月十七日鶴崎港を出帆し、海路大阪に向つた。そして大阪からは東海道を江戸に急いだのである。小楠にとつても最初の長旅であり、しかも大望を抱いての得意の旅行であつたから、見るもの聞くもの感慨ふかく、時は春、詩情ゆたかな三百里の旅の記録は「東游小稿」の詩集となつて残つてゐる。

「東游小稿」のはじめに「熊府を發す」として遊學解放の歡喜を歌つた詩がある。

將に十歳檢繩の身を脱し、一笑飄然たり東海の雲。

白水の灘聲は耳を侵して冷かに、龍山の花氣は衣を撲つて薫る。

觀風聊か吳兒の志を抱く、講學何ぞ商也の文を求めんや。

目送す飛鷹の萬里を搏ちて、雙翼を拂披して已に群を離るを。

これは詩であるから若干の誇張はあるとしても、小楠の江戸遊學が單なる遊學ではなく胸臆に

は天下になすあらんとする大志を秘めてゐたことは明かである。

またこの詩の次には、大津驛で見送りの學友と夜を徹して小酌し別れに臨んで作つた詩や、弟仁二郎との別れに臨んで友情を吐露した詩などがあり、熱情の詩人小楠の面目を表はしてゐるが特に、大阪から伏見、大津を経て桑名へ向ふ途中、石部の宿で亡き父時直を追憶した詩は、多感な孝子小楠を物語るものである。

疾痛誰か呼ばん久しく愁を抱くを、孤兒豈計らんや東に向つて遊ぶ。

偶然旅舎に名札を拜し、涙衣襟を滴して收むべからず。

唯夢に時に嚴顔に接するあり、毎に遺物を看て涙潜潜。

十年旅舎に名札新なり、堂上眞に驚頭を叱するが如し。

これは小楠の父時直が、十數年前、江戸詰となつて、江戸にゆく途中、同じ宿に泊つて記念のために貼つてあつた名札があつたのを見ての詩である。亡父の筆跡を見て、「眞に驚頭を叱するが如し」とは、孝心の發露であり修道の旅情といふべきであらう。

この他、途上の風物を詠じたものが多いが、それも單に風景を敘するといふよりは、必ず山水

風物に關聯して史上の忠臣義士を詠じてゐる。殊に、鶴崎から大阪への舟路に於ては「兵庫伊丹
看るく過ぐる時湊川は何れの處ぞ、水の涯、舟行偏に恨む意の如くならざるを、遙かに拜す楠
公八字の碑」と「嗚呼忠臣楠氏之墓」を遙拜して居り、大阪にあつては仁徳天皇の御仁政を歌ひ
豊公の雄圖を詠じ、伏見にあつては鳥居忠元を、大津では、源義仲を、その他、北條氏康、上杉
謙信、武田信玄、毛利元就、小早川隆景、柴田勝家、大石良金、北畠親房などの忠臣名將を詠じ
てゐる。これは青年小楠の詩作が、ただに花鳥風月の叙景のためではなく、國士的性格のもので
あることを表はしてゐる。

しかしもとよりさうした史蹟を歌ふのみではなく自然詩人らしい詩も少くない。例へば「舟中
雜詩」のなかには次のやうなものがある。

生を煙水に寄せて沙鷗に狎る、蟹女可憐にして巧みに羞を含む、婚婦高く颯りて良女定り、海
鼠を贈將して隣舟に嫁す。

沙明らかに樹碧なり播州の路、點々たる布帆浪を破りて奔る。一望すれば淡河天水に接し、萬
雷吼ゆる處是れ鳴門。

大望を抱いてゆく青年小楠が、陽春の旅上に觀るものは悉く詩であり悉く畫であつた。

かうして約一ヶ月の後に江戸に到着した小楠は、木挽町の肥後藩士の住宅に長途の草鞋をぬい
だが、五月十一日にはそこから其愛宕山下に居を移した。小楠の江戸遊學はいはゆる青年が笈を
負ふて遊學するといふやうなものではなく、もはや藩内で十分に學問の修業を終へた志士が、大
江戸に出て學問の武者修業によつて更に志操を練磨するがためであつた。それで彼もまた當時の
通例となつてゐるやうに、林大學頭に謁して入門の禮をとり林家の代表たる佐藤一齋やその子幸
助などに對面したが、もとより毎日そこに通學する譯ではなく、廣く、天下の大儒を訪ねて、文
武兩道の教を受け、江戸から更に各藩をめぐるつて當時の人材に交はるのが目的であつた。小楠が
江戸にあつての收穫を録した「遊學雜志」には彼が多くくの學者を訪ね、その人物を觀察し批判
し、そこで得た新知識を書き留めてあるが、それによると前記の林大學頭、佐藤一齋の外、藤田
東湖、松崎慊堂、川路聖謨などを訪問してゐる。かうして諸學者を訪問するのはその學問を學ぶ
のはいふまでもないが、何よりも彼はその人物を學び、人間を知らうと努めてゐる。「遊學雜志」
のなかの彼の人物批評によれば多くはその長所美點に學ぼうとしてゐる。これは彼がやがては天
下の大人物たらしとする必然の修業であつた。

例へば、佐藤一齋は「當年七十に成る由、壯健なる老人、言語しほらしく物憤たる容子言外に見るなり」とあり、松崎懺堂を訪ねては「學問博大胸中幾萬卷の貯有る事を知らず、……人と爲り霽然春風の如く、胸中少の城郭無し。當時大儒、一齋、懺堂と唱れども、其の實は一齋中々懺堂に及ばず。唯一齋人物聰敏世事に練通す。是れ二家名を齊する所以なり」と述べてゐる。また川路聖謨は此人其名を聞こと久し。果して、非常の英物なり。當時御勘定吟味役に其繁用也。朝五ツ半（九時）より登場、歸は七ツ半（五時）或は暮に及び、且朝夕諸役人應待書附のしらべ休まれるは必九鼓（十二時）に及よし噂なり。……繁勸の中に學問武藝を好まれ、朝啓明に起き鎗素づき貳百づつは課業なり。讀書の暇は無ければ登城往來駕中にて致さるるなり。近來小學近思錄を好み大に心得に成ること有と咄なり。如何なる事柄たることは知らされども流石の英物、今日の實用に當られたる人なれば會心のこと有る可きと知らるるなり。」とその人物を推稱してゐる。

更に小楠が、江戸滞府中、もつともその人物に傾倒したのは水戸の藤田東湖であつた。「遊學雜誌」の東湖訪問記には次のやうに述べてゐる。

「水藩藤田虎之助を訪。此の人久しく名を聞、當時しらべ方元締と云役也（しらべ方元締と云

ふは本藩にて御奉行より側近習御取次を兼ねたる様の役也）其、人辯舌爽に議論甚密、學意は熊澤蕃山、湯淺常山杯にて、程朱流の實現を嫌ひ専ら事實に心懸たる様子なり。……我が訪し時は未だ退公せずして暫待し内に歸り、直に應對極神速なり。布の肩衣、奈良の古帷子、葛の袴、脇差は鐵金貝にて木綿糸を太刀巻に巻き、櫛は皮包なり。當年三十七歳、色黒の大男、中見事なり。都下花奢の風を嫌ひ専ら武事に心懸け公務の暇には藩中の子弟を引立、尤鎗劍に達したる由なり。中納言様思召格別にて此春の頃百石の増加へられ席も進められたるなり。當時諸藩中にて虎之助程の男は少かるべし。」

なほ「農政の事を虎之助尋しに、我此事不案内なれば辭退せしに、是非々々尋ねるに因り簡免受免の替り一通咄たれば大に感心にて、流石は感公以來の御政事届かれたりと挨拶致せしなりとあるを観れば、東湖もまた、初對面から小楠の人物を買つてゐたことがわかる。かくして東湖と小楠との交情は漸く深くなり、小楠はその後屢々東湖を訪ねた。その年の十二月末、東湖が水戸に歸ることとなつたので、知友を招いて小宴を開いたが、その席上、小楠は一詩を作つて東湖を勵ました。それには「一點の忠愛魂魄に發すれば、其の容霽然として春風の如く、其の福凝然として金石の如し、治亂に只是我が心を盡くし、群小と黑白を争はず、聖賢の教此くの如きの

み、萬古臣道易ふ可からず」とある。これは、當時水戸藩に改革派と保守派との黨争が甚しく藩主も兩派の主張の取捨に迷つてゐたので、小楠はこれを詩に託して諷し東湖を激勵したものである。なほその詩は「諸君應に各思ふ所有るべし。試みに肝膽を披きて座に向つて擲て」と結んでゐるので、東湖も、これに和して一詩を小楠に贈つた。しかるにその後三日、東湖から小楠への書翰には「扱て高韻御示し下され候に付き、醉中、筆に任せて次韻仕り候處、翌朝に相成り、尋思候へ共、七八句は夢の如く覺え居り候處、前後如何様の事を認め候哉慚愧至極に御座候、尤も何程醉中にも黑白邪正を取違へ候積りは御座なく候へども右の通り忘却仕り候仕合ゆへ頑鈍迂僻の病別して甚しく、過激の句を吐き候へば安心仕らず、文字間未熟は勿論に御座候、何卒長者河海の寛恕下され一ト先づ御返し下さるべく候。頻りに醜を掩候様にて如何はしく候へども、源判官軟弓を恥ち候意御洞察下され必ず御祕し下され速からず御返し下さるべく候」とある。ここに至つてはその交情もまさに深過ぎるの域に達したものであらう。なほその忘年會の席で、東湖が小楠に、「旅の空では金に困ることもあらうが、何とかしようか」といふと、小楠は醉にまかせて「何、それ位の金はもつてゐるぞ」とばかり、財布を出して底をはたいて見せびらかした。その時落したものであらう翌朝、東湖が室を掃除すると金二錢があつたのでこれをこの手紙に添

へて小楠に返してゐる。ここにもまた兩雄の交りの純真無邪氣さがあらはれてゐるではないか。およそ「人を得る」といふことは、英雄の重要な資格であるが、小楠は江戸に入つてから一年足らずに東湖のやうな人物を得てゐるのである。英雄といひ偉人といふはその時代の金銀財寶の富者を云ふのではなく、その時代の人物を最も多く收穫してゐる人間の富者である。小楠の江戸の見聞録ともいふべき「遊學雜志」には人を訪問しては得た新知識を悉く収録してゐるが、その中に、江戸と世界の都城とを比較した興味ある記事がある。

「江戸都城の廣大なる西洋人世界第一と唱る由承しに、志筑忠雄が翻譯せし（忠雄享和年間人）鎖國論を讀むに（西洋人エンゲルトケンフルと云人の著）世界の都城江戸より大なる者有り。亞夫利加都兒格の地厄日多國該祿外郭より中央迄一日半路。是城十二重の門有り、中なるは鐵を以て造れり。市に生たる獅子及鬮龍の類を賣り、是天下第一の大都城なり、其次は北亞墨利加の墨是哥城周圍弗郎斯國道法にて三十里。（我が二十六里餘に當る）支那國北京周圍都逸國道法にて二十四里（我が三十四里八合に當る）其外魯親亞國都莫斯戈城寬文の比迄は周圍我が九里に當る程なりしに、漸々と興大に成り今は世界一二の大國なれば都城亦必ず廣大なる可し。是等江戸より大なる者にて、歐羅巴州の大都城と稱する者總て江戸より小なるなり。意多

利亞國都羅媽、拂郎斯國都把理斯、羅尼亞國都、三城大都城と稱す。然も羅媽城周圍意多利亞の道法にて十三四里（我が四里七合餘に當る）把理斯、ロンドン共に羅媽城の類なり、ウエーネン諸城の中最大なるは伯爾齊亞國のイスハンなり、其周圍我十里四合に當るときは此れを圓形の算にすれば全經三里三合斗なり。江都の全經四里なれば右の數城何も江戸の大なるに及ばぬなり。是を以て云へば亞夫利加の馬邏可城、弗沙城の類大都と稱れども江戸より大なる者は得難こと必定なり。然らば泰西人の京江戸を以て天下最大城の中に在らしむる元よりの當の論なり」

これは小楠が讀んだ「鎖國論」（西洋人エンゲルトケンフルと云ふ人の著、志筑忠雄の譯）によつて得た知識であるが、なほこれを讀んで我が邦が吉利支丹教を禁じた理由を明かに知ることができたと云つて、西洋人の東方侵略の意圖を述べてゐる。人は今頃になつて「東亞共榮圈」を叫び、植民地文化を排除しようと呼んでゐるが、小楠の文章は當時その「植民」の害を次のやうに表現してゐる。

「波爾杜瓦爾人千五百四十三年（我が天文十三年なり）偶然と日本に漂着し大に交易の利を得たり。（歐羅巴人我邦を知りしことは北條氏代の事なり。勿搦祭亞王のマルキユスボーリスコと云人十八歳にて本國を出（後宇多天皇建治元年なり）韃靼國に行きキユフライと云ふ王に事え（是元太祖忽必烈なり）其王支那を併するの時に逢ひ支那に行、前後十七年の間稍重く用ひられ其後印度を経て歸國せり。此の人の話にて歐羅巴人始て我邦を知れり）程なく人を渡し植民し（人を植るは彼の國の習なり。）使僧を遣し耶蘇教を説法し、新化の者と婚を通暫時の間に大なる富を致し、又深く國人の信心を得たり。諸事意の如に矜り國の政事を變革する所あるに至り大に民の野心を誘ひ日本の大害となりぬ。（大友、小西等の如き政事を番人に委るに至る。此類を指なる可し）「ケイツル」殊に驚けるは（ケイツルは歐羅巴人帝王を指すの辭我大將軍を云ふなり）二通の書に奸計充滿したるに在り。其の一通は和蘭人が取戻したるなり。（洋中にて波爾杜瓦爾の船を奪により得たるなり。）又其一通は廣東より日本人が得て歸りしなり。（何れも此方の賊徒が彼國につかはす密通の書なり）又執政家の諸侯路次にて一人の耶蘇の官僧に遇しに彼僧不遜にして恭敬の禮を盡さず、平生國人に準ぜず執政家大に憤り頻に朝廷に訴たる在り。是に如くに吉利支丹教盛に行はれ九州は殆ど波爾杜瓦爾人の教化に歸し、其國の神佛及び教法を忌嫌い其法の爲に他を禦ぎ自を護するの勢に成り、國家の憂不安の基既に明白な

れば太閤深く慮り、漸く波爾杜瓦爾貨利増長、吉利支丹信心弘通の際限を立てたり。」

後年、小楠を目して「夷賊に同心し天主教を海内に蔓延せしめんとす」と斷じ、彼に奸賊の名を附けようとするものも現はれたが、少くも「遊學雜誌」のこれらの感想を讀めば、小楠が夙に西洋諸國の東洋侵略に對する認識の深さを疑ふことはできないであらう。

更に、吉利支丹教の大害は二つありとして、次のやうに小楠の意見をも明記してゐる。

「波爾杜瓦爾と我國交易の事ケンフルが全書に詳に記し、其交易前後盛衰有しと雖も大抵年々運輸し去る所の金三百トンに過たるを以て其大利ありしを知る可しと云えり。一トン各今の文銀にして大約四百貫目也三百にては拾貳貫目なり。其利の最小なるも運來運去の貨物各一倍となりて其四双倍の利あり。千六百三十六年（寛永十三年）船四艘にて銀二萬三千五百貫目を輸し去る。諸人私の利は此外に在り。翌年六船にて二萬四千四百二十三貫六百五十四匁一分、又其翌年小船二艘にて、一萬二千五百九十貫貳百三十七匁三分を輸す、委しく彼方の事を記したるものにてケンフル現に見たりと云り。ケンフル又云右の三年は彼が交易衰微の極なり。其全盛の時の如く頻に二十年の年を経ば日本より亞媽港（アマカワ）は波爾杜瓦爾諸國に通行の窠穴

なり）に輸す財寶の積、彼の古撒刺滿大王（三千年前の某國の王にて稀なる富有賢にも引ものなり）の時に如德亞城中に在し金銀に適しかなえる可し。以上雄志がケンフル全書を見て譯したるものにて、波爾杜瓦爾人の我邦に大害あること知るべきなり。去れば吉利支丹を嚴禁のこととは甚深遠の慮にて第一は吾が愚民を誑し信心弘通せしめ禍亂の基に成り、第二は我が財を輸り去り虚乏空耗なさしむるに至り、國家の大害此の教に如くものなし。」

青年小楠は吉利支丹教の大害ある所以を明白に斷じてゐる。

およそ「遊學雜誌」はかうした見聞録であり感想録であるから、以上のやうな引例によつて、小楠が江戸在府中の修業の態度もこれによつて、推しはかることができるであらう。

要するに江戸遊學中の小楠の生活は、江戸を去るに臨んで客舎の壁に題した別離の詩によく云ひ盡してゐる。即ち「汝に謝す年來の事來事俗と違ふ、或時は夜更に坐し、讀書思ふ所有り、心に會すれば之を文に編し、情に觸るれば之を詩に屬す、或は大いに朋友を會し、議論肝膈を披く、慨然たる天下の事、悲歌交々扨を把る、淋漓として意氣揚れば、醉語四隣に馳す、會する者俗客無く、多くは是天下の奇、奇才豈得易からん、心を彈くして新知に接す、究竟是學士、交遊

遣れざらんと欲す」といふのである。

かうして天下の名士と深く交はり、時事を談する間には小楠の名も名士の間に認められ「名聲漸く諸名士の間に藉々たり」（小傳）といふやうになつたが、しかし、好事魔多し、順境こそ戒心すべきの時である。遂に翌年二月には「時に壯齡英氣人を壓す或は俗に觸るるものあり、藩廳遽に歸國を命ず」（小傳）といふ時が來たのである。

總じて英雄や天才の爲すところは、「俗に觸るるものあり」といふのは當然のことではある。何故なれば英雄といひ天才といふは、それ自身が反俗的であり超凡、非凡のものであるからである。殊に藩と藩とが、鎖國的傾向の強い當時にあつては、藩外の志士の間にあまりに深く交際し、他藩に藩の祕密の洩れるやうなことはもつとも藩廳の忌むところであつた。しかも小楠の酒癖と喋舌とは、その危険が多分にあつたのである。これが藩廳の歸國命令となつた理由であり、それはまた英雄小楠をより大成せしめるために、當然通過せねばならぬ試練でもあつた。

小楠が歸國を命ぜられた理由としては、小楠研究家の間で、彼の酒失のためであるとされてゐる。もとより直接の原因はそれであつた。前述の東湖に招かれた忘年会の後でも、第二次會の席他藩のものと問題を起したといふことである。彼が江戸に着いた直後、熊本にある長岡監物に送

つた書翰に對する監物の返書には「酒之方は何程に候哉、愈々以嚴禁を祈申候、此儀而已は御氣遣申候、御千笑々々。下津は辭職後禁盃之約束に候處、近日は毎夜程に酒宴の物音相聞申候、笑ふべき事に御座候」とある。肥後藩から江戸詰の藩主に送つた書面にも、「横井平四郎儀過酒に及び外向にて申分之れある由に付て先使太兵衛より極密御奉行中之申越候趣承知致し候。何とも詰らぬ事にて笑止なる儀に御座候。太兵衛見込にては禁酒の處も覺束無く」とあり、これに對する返書の中にも「同人儀御本文の外にも追々所々に於て過酒に及び、當春に至り候ても猶又申分之れ有り、逆も長く禁酒の見込之れ無く」とある。

それよりも最も明白なのは、本人がこれを認めてゐることである。歸國前後の作であらうといはれる詩に「予性酒を愛して而して亂に及ぶ者屢々なり。嘗て一たび飲を斷ちしも月ならずして弛めり。此の春遂に小坂九郎を約し意を決して嚴禁す。此の約に背かざることは江河の若くならん」と云ひ、「阿母は神明に祈り、阿兄は飛鴻に託す、千里何の憂ふる所ぞ、唯酒斯の躬を誤るを、生平忠孝の志、一事何ぞそれ蒙なる、之を思へば醉の醒めたるが若し、萬箭胸に向つて叢が、泣血天地に謝す、不孝の罪窮り無し、今より嚴に禁制し、誓つて既に始終を保たん」と詠じてゐるところに歴然たるものがある。

かくて、歸國命令を受けた直接の原因は、いふまでもなく過酒の悪癖であつた。小楠の酒癖について山崎博士は「始は時勢の慷慨談から追々悲憤の情禁する能はざる状態となり、天下の廓清は吾出でずんば能はずといきり立ち其の權幕は當られず、時には猛然家を飛出すなど手の附けられぬ狂態にも陥つたらしい。斯かる場合に氣に入りの門生などの取持によりて工合よく靜まる事もあるが、餘りに甚だしき時は窮餘の策として小楠を仆して其の上に蒲團を掩ひ、力強き者をして其の四隅を押へて出さぬといふ方法を講ずるの已むを得ぬこともあり、福井では小楠の酒狂に備へるために特に力士が雇つてあつたといふ遺話さへもある。」とあるによつてほぼその程度を察することができる。藤田東湖が「第一に女、第二に酒、第三に讀書」と云つたといふ如く、當時の志士は酒を飲んで國事を論ずることが多かつたので、小楠もまた飲む機会が多く、且つ飲まれる機会が多かつたのであらう。

ただ酒失は小楠が歸國せざるを得なかつた表面的理由であり外的原因にすぎなかつた。もつとも表面と云つても表向きは二月九日付の御奉行中の書に「其方儀遊學として御當地へ被差越置候處内意之趣に付、此節御國元被指下旨候條可被得其意候」とあつて、自ら歸國を願出た形になつてゐるが、それは形式的なものであつて眞の原因はむしろ小傳のいはゆる「英氣人を壓す或は俗

に觸るるものあり」といふところにあり、これは小楠の全生活を通じて「天才郷里に入れられず」とでもいふやうな宿命的なものである。

かうした命令に接しようとは知らず、小楠は天保十一年の春は、江戸を出發して東北の遊歴の計畫を立て在郷の諸友に宛てた書にその詳細なプランを記してゐる。それによると當時天下の志士の聖地とされてゐた水戸は勿論、宇都宮、日光、米澤、高田、新潟、秋田、津輕等の東北諸藩を歴訪し、更に津輕海峽を渡つて松前即ち北海道にも渡り北邊の實情を探り滿洲シベリヤ地方の形勢もうかがひ歸路には南部、仙臺、二本松などを視察したいといふのであつた。この計畫はもとより突然の歸國命令によつて畫餅に歸した譯である。

これらの計畫のうちでも水戸遊歴のできなかつたのは東湖との友情もあり特に心残りであつたであらう。いよいよ江戸を退去することとなつた時、東湖は水戸齊昭の意を體して小楠を水戸藩に登用のことを傳へて來たが、小楠は何故かこれを辭して受けなかつた。

かくて江戸滞府はわづか一年で、失意の小楠は天保十一年三月三日江戸を退去して歸路についた。「但是人世の事去留何ぞ必ずしも期せん、譬へば雲の變態の集散定時無きが如し」とは彼が別離の感懷であつた。「東遊小稿」に江戸の諸友に送られて新宿驛に到つての詩がある。

「一片の孤雲西に向つて去る。斜陽山色、餘凄あり、多情何ぞ止めん郭門の別、滿地の東風馬蹄を送る」

歸路は新宿から甲州街道を西に進み、甲府から中仙道に出て木曾路の難を踏破し、關ヶ原、京都、伏見を経て大阪へ出た。大阪から海路をとつて鶴崎に上陸して四月熊本に歸着した。大望を抱いて昨年江戸に向つたとは順路も心境もおよそ逆であつた。學友の羨望の的となつて送られた秀才は、僅か一年にして錦を着てではなく酒失の汚名を着せられて悄然と郷里の土を踏んだのである。しかし逆境こそ秀才小楠の試金石と云ふべきである。歸路關ヶ原の古戰場で敗軍の將石田三成の心境を歌ひ「銚子を交へて一敗空しく虜となる、笑つて戰場に向つて舊營を按ず」とあるは、まさに三成に託して自己の胸臆を詠じたのであらうか。

[54]

第五章 私塾

★「先生既に國に販り門を閉ぢ客を謝し、堅苦刻勵心正經傳に専らにす、家素より貧、其居室僅

に六疊の葺壞壁破障竹を編みて椽と爲す、而して晨夕水を汲み飯を炊き、一家の勞を助く、其勤勉人の堪へざる所なり、然れども先生厭色無く亂帙の間に起臥し、年の移るを知らざる者の如し、此の如きもの殆ど四年、一日慨然として云、吾之れを得たりと。此後子弟を教る、其大要に曰く、道德は經國安民の本にして而して知識に由て進む、是故に孔門大學の教、格物致知を以て先きとす、己を修め人を治る、内外二途別なし、和漢の儒者、或は小廉曲謨を以て道德とし、或は博覽強記を以て知識とす、苟も事實に當れば漠然として糊塗す、以て俗儒と爲る所以なりと。而して忠君愛國は先生の天性に出づ。是を以て風勵するに義烈節操を以てす、故に若し君長を蔑如し廉節を誤り利祿を眷戀し寵辱に役せらるる者は、門下に遊ぶこと能はず、又訓話詞章は棄るに非れども必要とせず、故に之れを重んじ之れに従事する者門下に來ること稀なり。又當時人を導く頗る嚴正なり、是容素より先生と交り厚し、而して或は其の嚴正を憚る事有り。然れども先生才を愛し善を容れ一の嘉言善行あるも喜て措かず、是故に俊拔の士、着實の人、樂て其門に遊ぶ。弘化三年家兄に従て居を相模街に移し、翌年家塾を開く、是に於て横井の門漸く熾なり」(小傳)

[55]

江戸から歸つた小楠は、急轉直下、七十日の逼塞を命ぜられた。「右者江戸へ遊學被仰付置候内間々及過酒候内には、於外向不都合之振擲をもいたし、其外追々不慎の儀も有之たる様子相聞、爲遊學被差越候身分別て不埒之至に付、七十日逼塞被仰付候事」といふ處分であるから酒失はここで表向きとなつてゐる。

これからの數年間は小楠にとつては黒幕の時代であり、文字通り貧苦の底に陥没した。しかし「艱難汝を玉にす」と云ふやうにこの數年間に小楠は、自己の三十年の過去を反省し人生觀の再建に努め、「小傳」にある通り、つぶさに臥薪嘗膽の勞苦を厭はなかつた。

當時の心境を歌つた詩には「大途何ぞ紛々たる、門を閉ぢて吾が拙を養ふ、親朋星より少く、轉た相愛の切なるを覺ゆ、榮利浮雲の如く、意志世と別なり、只典籍の樂しみあり、道味誰に向つて説かん。」とか、「吾が輩道に志す當に鞭つべし百怠惰、食は餓えされば足り、衣は寒えされば是可なり、名利の心を猛省し、事を處する我無きを欲す、豈學を爲すの地に非ずや、」と歌ひ、また、「士、道に志して惡衣惡食を耻づるものは、未だ輿に議るに足らざるなり」といふ孔子の言を信條として徹底的に名利に超越した行の生活に入つた。

小楠が後に人に教へた言葉に「一通りの人にして時に用ゐられざるを慍らすとも、未だ君子と

稱するに足らず、勞力の積りて信從するもの多く、一代の碩儒とも云ふ可きほどの人材にして世に用ゐられず逆境に遇ふ時、少しも慍らざるこそ眞の君子と云ふ可きなれ」とあるが、恐らくかかる信念を體得したのはこの當時のことであらう。この間に小楠は徳富蘆花の云ふやうに「學問の仕直し、人生觀の建直し」に努力した。

「昨の是は今の非、孔子の所謂「古之學者爲己今之學者爲人」今から思へばまだまだ人の爲の學問であつたので、三十二歳の彼は、今己の學問に打はまつたわけであります。葉は孔孟を祖述する宋の程子朱子でした。程明道の「道就於用不是」といふ句を行燈や障子、襖などに書いて、三年考へたのも此の際の事であります。「道就於用不是」とは平たく云へば、眞理は第一義、御都合でお茶を濁してはならぬ。と謂ふ意味です。横井平四郎は此時自己統一をはじめたのであります。」(徳富蘆花)

かうして小楠は苦闘四年にして「一日慨然として云、吾之れを得たりと」(小傳)の境地に到達したのである。

この小楠の到達した思想は、天人一體の信仰であつた。それに到達するまでの道程について、

山崎博士は「小楠は自己の學問の仕直し、人生觀の建直しに取掛り、専ら程子、朱子を葉として心を経傳に注ぎ、致知格物の功を強調して重きを實踐躬行に置き、修身齊家治國平天下の道に於て工夫を竭くしてゐるが、決して此の境域を以て満足しなかつた。彼は愈々學び倍々究めるに従ひ遂には程朱より更に洙泗の眞源即ち孔孟に溯り、なほ進みては蕩々たる王道を闡明するを以て自己の任務と爲し、百尺竿頭一步を轉じては只天を説くに至つた。」と述べてゐる。

「小傳」に曰く、

「始め先生江戸より販り大塚退野（寶暴年間同藩の人）の遺稿に因て得る所多しとす。退野の學、朝鮮李退溪に出づ、退溪の學、伊洛を宗とす。先生亦伊洛の學を信ず。後、伊洛の諸賢經綸に乏しきを疑ふ。而後、遡つて孔孟を信じ、直ちに堯舜を祖述す。終に大に發明する所有りて、後來、只天と説くのみ。」

ここに、小楠が、退野から伊洛、更に孔孟、堯舜と、朱子學を源流に遡つた經路が明かに示されてゐる。

大塚退野といふのは、小楠が、「眞儒とも可申人物に御座候……拙子本意專此人を慕ひ學び候

事に御座候」と或る書簡で述べてゐるほど尊敬した人物で、初めは陽明學者で、二十八歳の時、朝鮮の朱子學者「自省錄」を讀んで感奮してから朱子學に入つた人であるが、後年は肥後國玉名郡に隠れて門弟を教へた不遇の學者であつた。

しからば小楠が到達した「天」とは何であるか。小楠自身が、その「沼山閑話」のなかで語るところによつてこれを窺ひ知ることができる。曰く、

「宋の大儒天人一體の理を發明し其説論を持す。然れども専ら性命道理の上に説て天人現在の形體上に就て思惟を缺くに似たり。其天と云ふも多く理を云、天を敬すると云も此心を持するを云ふ。格物は物に在るの理を知るを云て總て理の上のみ専らにして堯舜三代の工夫とは意味自然に別なるに似たり。堯舜三代の心を用ふるを見るに其天を畏るる事現在天帝の上に在せる如く、目に視耳に聞く動搖周旋總て天帝の命を受けるが如く自然に敬畏なり、別に敬と言ひて、此の心を持するに非ず。故に其物に及ぶも現在天帝の命を受けて天工を廣むるの心得にて、山川草木鳥獸貨物に至るまで、格別の用を盡して、地を開き野を經し、厚生利用至らざる事なく、水火木金土穀、各々其功用を盡して、天地の土漏るることなし。是現在此天帝を敬ひ、現在此天工を亮く、經綸の大なるかくの如し。」

これに依つて觀れば小楠は、「學は飽くまで源頭に溯るべし」といふ立場から、堯舜の心を以て天に事へることを主張したのである。されば「全く三代治道の格物と宋儒の格物とは意味合の至らざる處有る可し。一草一木皆有理須格之とは聞えたれども是れも草木生殖を遂げて民生の用を達する様の格物とは思はれず、何にも理をつとめて見ての格物と聞えたり。大儒を批議するに非ず、後學のもの徒に理學の說話にのみ奔りて現在天人一體の合點なければ大源頭に狂ひありて事實の上に於て道を得ざる事多く、能々合點致す可き事なり。」と述べてゐる。これはもとよりその後二十餘年を経てからの思想ではあるが、恐らく當時から體得したものと思はれる。小楠にとつては「天工を亮く」が人生の目的であり、天の命に従つて生きることが人の道である。西洋の功利思想とは違つて天命の實現が東洋道德の神髓である。

なほ「沼山閑話」のなかには次のやうに「天」の實現の道を教へてゐる。

「人は三段階有ると知る可し。總て天は往古來今不易の一天なり。人は天中の一小天にて、我より以上の前人、我以後の後人と此三段の人を合せて初て一天の全體を成すなり。故に我より前人は我前世の天工を亮けて我に譲れり。我之を繼で我後人に譲る。後人は是を繼で其又後人に

譲れり。前生、今生、後生の三段あれども皆我一天中の子にして此三人有りて天常の命を任課するなり。仲尼祖述堯舜繼前聖開來學、是孔子のみに限らず。人と生れては人々天に事ふる職分なり。身形は我一生の假托、身形は變々生々して此道は往古來今一致なり。故に天に事ふるよりの外何ぞ利害禍福榮辱死生の欲に迷ふことあらん。」

かうした不動の天人一體の理念を體得した小楠は、逆境に處しても光風霽月のやうな心境を持つることができた。此に於て小楠の周圍には自然にその學徳を敬慕する者が集り、或は同志として或は子弟として教を受けるやうになつた。最初の入門者は徳富萬熊と矢島源助であつたが、後に矢島源助の妹婿、竹崎健次郎も入門し、その後は次第に門弟の數も多くなりおのづから塾をなしてきた。これは天保十四年頃からと云はれてゐる。塾と云つても、小楠の居間の破れ疊の一角が教室であり、最初の入門者は、三疊の下男部屋に下男と同居するといふ有様であつた。徳富萬熊は、徳富蘆花や蘇峰の父で佐敷郷の惣庄屋の嗣子で、矢島源助は中山郷の惣庄屋の嗣子である。しかし後には藩士の子弟の入門者があつた。いづれにしても、熊本には藩學の時習館があり、むしろ藩の異端者とされてゐる小楠の陋屋に入門者が多くなつたといふことは、小楠の教育

がいかに當時の青年子弟に魅力のあるものであつたかを推知するに足るものである。中には謝禮として、米三四俵も納れるものもあり、塾を開いてからは貧しい兄の厄介者となつてゐた小楠も物質的にも大いに助かつたのである。

そればかりか、小楠歸國の頃から病氣のため依願免職となつてゐた兄時明も、天保十四年四月から再び官途についたので、横井家も漸く家運開け、弘化三年（小楠三十八歳）には、一家が相模町に移轉した。この新しい邸内には十二疊の一室を新築して小楠の居間と道場に宛てられたが、翌年は門弟の出費で家塾を新築し、これを「小楠堂」と名づけて、二十餘人の門生が寄宿した。かうなると青年教育者としての横井小楠の名聲はいよいよ四隣に聞えわたり、肥後藩のみが他藩からもはるばる小楠堂に入門する者もできた。後に「我より前人は我前世の天工を亮けて我に譲れり、我之を繼で我後人に譲る。」と云ふ小楠の思想からすれば、教育こそ小楠にとつて天職中の天職と云はねばならない。小楠堂に掲げられた小楠自筆の掟は「禮儀を正し高聲雜談致すまじく事、師範引廻しの申圖違背致すまじく事、酒禁制の事」と實用的な三ヶ條を定めた。

「小傳」にも「當時人を導く頗る嚴正なり、是容素より先生と交り厚し、而して或は其嚴正を憚ると有り」とあつて學友米田是容でさへ憚るほど嚴正ではあつた。しかしこの嚴正の意味は決

して小さい規則にこだはつて難かしくいふの意ではなかつた。「小廉曲謹を以て道德となす」が如きは腐儒として小楠のとらないところであつた。右の三ヶ條の中の「酒禁制の事」なども別にこれにこだはつて喧しく云つたのではなく、禁酒中でありながら小楠自身も、兄嫁の注いで置く神酒徳利の酒をそつと飲んだ位であり、また「講義がすむと雜談、それがすむと夜の更けるまで酒宴」といふやうなことは小楠の塾では珍らしくはなかつた。

嚴正にすべきことはあくまで嚴正に、寛容にすべきことはあくまで寛容にするのが小楠の教育方針であつた。「小傳」にも、「忠君愛國は先生の天性に出づ、是を以て風勵するに義烈節操を以てす、故に若し君長を蔑如し廉節を誤り利祿を眷戀し寵辱に役せらるる者は門下に遊ぶこと能はず」とあるやうに嚴正であつたが、また一方には、「先生才を愛し善を容れ一の嘉言善行あるも喜で措かず、是故に俊拔の士着實の人樂て其門に遊ぶ」とあつて、門弟を愛し門弟をして「樂で其門に遊」ばせたのである。

天人一體の理想に生きる小楠の教育は、眞に師弟一體の教學であつて門弟をして楽しんで學ばせた點に一大特色がある。山崎博士に依れば、「小楠は既記の如く門弟に對しては嚴格ではあつたが、一面極めて隔てなく親しみ深い所があつた。例へば彼はよく弟子とも碁を圍んだが待つた

待つたで手を取合はんばかりに争ふことがあり、又撃劔もやつたが恰も同輩の如くに遠慮會釋無しに猛烈に敲合ふといふ鹽梅であつた。……なほ小楠は人並以上の癩癩持であつたので時には弟子に對して口許りでなく手も出たらしいが、それは詰り門弟を思ふ熱情からで後にはさつぱりして何も残らなかつたから、それを恨むやうな者は一人も無く、寧ろ師の眞劔な指導啓發に心明く尊敬の念を深めるのみであつた。」といふ。これだけでも小楠の青年教師としての魅力がある。

その上小楠の門下生は、皆門弟といはんよりは同志といふほどの教養のあるものばかりで、塾も今日の青年學校といふよりは高等學校乃至大學程度のものであつたにもかかはらず。一度入門すれば小楠の師としての神祕的な魅力に引きつけられ悉く神のやうに師を崇拜し、生涯その心酔者となつたのである。ここに教育の法悦境がある。山崎博士はこれについて「小楠の門生教導振は以上述ぶる通りで門弟の心に強く響く何物かがあつたから、其の啓發に逢ふは肉躍り血湧き時々刻々に精神の向上を覚える處があつたさうで、其の師の家に近づくや、自づと踏む足も軽くなり、師の門を辭するや一種の法悦に浸つて手の舞ひ足の踏む所を知らざるの歡喜を禁じ得なかつたとは門人の總べての噂さする所であつた。」とあるに見ても彼が、いかに卓拔な教育者であつたかが知られる。今日、皇民鍊成の教育再興期にあつて、わが教育界の風潮ははたして如何。

日本の性格の名によつて、教育の「靈活」性を喪失してゐるものが少くないではないか。日本的師弟愛の枯渴はやがて日本教育の貧困化となる憂があり、教育は生きた力として鞭刺と子弟の胸奥に燃ゆるものでなければならぬ。

小楠のいはゆる人を牽引する神祕的魅力については、むしろ天成といふべきものがあつた。

「小傳」に「先生氣宇豁達、神氣爽快、困迫の中にありて憂色なし。人に接するに畦域を設けず。曾て我を敵視するものと雖も、來れば即ち釋然たり。音吐朗々として談論風を生ず」とある如く、敵視するものさへも釋然たらしめる性格は、教師としての第一條件である。「人を教ふるや繩墨に流れず。燕談閑話の中より其情を費し其蘊を吐しめ其の悉さざる所をみちびき、足らざる所を釋ぬるの端緒を得しむ。又事を他に爲さしむるや人をして其の指示に出るを忘れ、其の自ら思慮し得たる所を差すが如き感あらしむ」とあるは、これが門人の書いた文章であるとしても、教育するものが教育であるといふことを忘れ、被教育者が教へられたことを忘れさせるやうなこの教育法は、眞に天人一體の妙境といふべきである。いたづらに教へた効果を表明し教へた分量を報告することを重んずるやうな現代の功利的教育は、小楠の教育によつて猛省されなければならぬ。小楠にとつては「天」が教育するのである。作爲を極力排して「天工を亮くる」の

が小楠の教育法である。殊に繩墨をもつて天意を閉塞させるときは、彼の天道教育のとらないところであつた。

されば小楠は子弟の個性を發揮させることを重視した。小傳に曰く、

「門人の教育も亦、一變して只其性質の長する所に従ひ、循々として道に入らしむ。規則儀文を以て之を拘束せず。而して、自立自行、敢て規矩の外に出でざらしむ。常に曰く、規則は死物のみ。死物は以て活人を御す。或は之を外國に行はしむべし。以て隱微の間に行はしむべし。或は之を門内に行はしむべし。以て門外に行はしむべからず。」

教育を天の作用とみる小楠は、子弟の天性の長するところに従つて、循々として道に入らしめるのであり、規則儀文をもつて之を拘束することを戒めてゐる。さればこそ小楠の教育は生きた力となつて發動することができたのである。小楠にとつては人の長所も短所もこれは天の賦與したものであつて、長所と短所とは渾然一體となつて區別することはできない。火は燃えることが長所であつてこれは又同時に短所である。孔子の教育そのものが個性によつて法を説くものであつたやうに小楠もまた適材によつて大器を作らうとしいかなる人材にも長所あるものと観たのである。長所をその人の天と観たのである。小楠にとつては天の作用を活かすのが教育であり、天

與の長所を人工の規則儀文をもつて拘束すべきではなく、規則儀文こそ天に従ふべきである。だから自立自營を尊重して「規則は死物のみ。」と云つてゐる。そして死物は外面だけで人に行はせることはできても、隱微の間に行はせることはできず、門内だけでは行はせることはできるけれども、門外までも行はせることはできないと説いてゐる。教育は内發する天與の活力を發せしめるものであり、隱微の間に生みつけられてゐる天理を發現させるのが本旨であつて、虚偽の行を強ひるものではない。

要するに小楠の教育は、人工的な作爲や規則儀文の末に捕はれず、あくまで小楠といふ人間そのものを教育に投げ出した眞實の教育であつた。従つて教へるところも、經學の章句の末に拘泥せず、活學問を尊重し、讀書よりも萬物の天理を讀みて天理を體得し、これを實踐するを目的とした。聖賢の書を読むのが目的ではなく、聖賢のやうに人間となること、即ち聖賢の教を身につけることが本旨であつた。今日のいはゆる知行合一の教育であり、實踐本位の教育である。もとより論語や大學の講義もあるが、その講義も通り一遍の字句の講釋ではない、小楠自身の心境を吐露し、自己の全生活をもつて體あたりて説くものであつた。講義と師の生活とは、また一體不離のものであり、これが人を教化し動かす所以であつた。師と子弟とは、ひとしく教育を通して

聖範の道を求める求道者であり、教育の行者であつた。そして寛嚴ともに、無私な愛情に出發してゐた。だから師弟は個人的にも深く結ばれて強い教育關係を形成した。

かうした方針のもとで行はれた小楠の塾教育は今日の學校教育とはおよそ違つたものであつて、子弟が一體となつた生活のなかでお互に鍊成されるといふやうな家族的な教育である。或る時は六七十人の塾生一同打揃つて塾生の私宅を訪ねて談じたり御馳走になつたりする間に、全生活をお互に協力し、しかも、それぞれの個性に應じて發展せしめた。従つて小楠の教育力はひとり子弟に及ぶばかりでなく、その家族にも及び、父兄からも師と仰がれ慕はれるのであつた。これらの門生のなかには竹崎順子、嘉悦勢代子といふ女性も加はつてゐた。

また小楠堂の教育の中心が、いはゆる皇國の道にあつたことはいふまでもない。學問の道は治國平天下の道であり、それは皇國の道の修練であつた。小楠が楠公父子の忠誠に對して特に敬慕の念を抱いてゐたのもそのためである。これについて注目すべきは、この當時、小楠は教育のかたはら「南朝史稿」の執筆をはじめたことである。これには末尾に、「楠正行論」があるが、本文は承久の役後から、延元元年十月までの史實を書いただけで中止してゐる。かく未完成の史稿であるが、しかし教授のかたはらかうした著述に着手したといふ事實は、小楠の教育がやはり皇

國の道を中心とし忠臣義士の忠誠の行爲を敬慕する生活實踐と結びついたものであることを推知するに足るであらう。

★「是より先き天下の學風大に文藝の末技に流れ治國の要に至りては殆ど措て問はず先生之を慨歎す、當時文學の士も亦先生の學術を忌憚す、時に藩中先生と志趣を一にする者、長岡是容、荻昌國、下津休也、元田永孚の輩有り、是容門地最も高し、而して藩主文武獎勵の事を委任す、是容爲めに書を作て藩士に示す、其文中實學黨と呼ぶ、是容故有て職を辭め、爾後實學黨を忌む者漸く多し、先生年少の子弟を論して云ふ、古人僞學と呼ばれて、以て擯斥責罰を受けし者有り、然るに我黨負ふに實學の美稱を以てし、又責罰を蒙らず、亦可ならずやと敢て意にせず。

嘗て家兄時明重病を受く、先生平日友愛太だ深し、晝夜看護す、是より先き先生既に漢法醫の治方に慊足せず、醫福間某なる者あり、曾て業を蘭人に受く、先生之れと交る、因て治療を托す、其治術の修理有るが爲めなり、後、醫生の門下に來往する者皆洋法に皈す、而して西洋醫術に志有る者爲めに大に力を得たり、是を以て漢法醫輩も亦實學派を忌むに至れり」(小傳)

ここに「小傳」にあるやうに、小楠は江戸から歸つてからの刻苦精進の數年間に、遂に天人一體の理想に到達したが、この超人的な精神生活の建直しを觀て、小楠の周圍にはかつての學友、米田是容、元田永孚、下津休也、荻昌國の四人の同志が集り、互に共鳴して思想的に團結した。さうして、この進歩的な青年同志は、ますます相切瑳して小楠の思想を中心にして當時の藩學時習館の學風と對立するやうになつた。當時の學風は「文藝の末技に流れ治國の要に至りては殆ど措て問はず」といふ状態であつたから、實踐躬行と治國平天下を重要視する小楠の學風とは相容れぬものである。ここに於て、小楠等は小楠の同志中でも家老として藩中に實權のある米田是容を通じて、實際的な革新意見を藩府に進言して時弊を是正しようとした。小楠等の實際的な革新派は、實學黨と呼ばれ、時習館の學校派と新舊思想の軋轢は日に激化した。實學派は、藩學の革新をはじめとして、進んで西洋文物の輸入し、西洋兵術を取り入れるといふ急進的な意見であり、小傳にもあるやうに、漢方醫術に満足せず、西洋醫術の長をとり、同志元田永孚などは嫡子總之助に手痘を實施した。かうした革新派の行動は、舊套を墨守してゐる學校派の非難するところとなつた。

しかるにかうした新舊兩派の思想争闘は、藩老としての米田家と松井家との勢力争ひと變じ、保守派の松井家では盛んに米田家を攻撃し、實學黨は藩學を虚學となす不穩の思想であると痛撃した。これのみならず、幕府の政治も、革新派たる水野忠邦が老中を辭職し、水戸齊昭等の勢力が失墜したので、これが藩政にも影響し、小楠等の實學黨にとつては形勢は不利となり、遂に實學黨の實際的中心たる米田是容も、家老の重職を辭するの止むなきに至つた。かうなると米田家の家來まで小楠を憎むやうになり、小楠を害せんとする者まで表はれた。しかし、小楠は周囲の形勢がいかに不利であつても、決して失望することもなく、またその信念や理想をそのために擯げることなく、小傳にある通り「實學の美稱」を敢て煮とせず、ますます子弟の教導に熱中したのである。藩の形勢は小楠等の革新派に不利であつたとは云へ、從來の机上の空論に終始した腐儒の俗論に反省を促した點に大きな効果があり、また西洋文化の長をとつて國防を強化しようとした實學派の主張は誤りではなかつた。そしてこの進歩的な精神は、小楠塾の教育を通して幾多有爲の人材を培つたのである。

かくて天保十一年江戸遊學から歸國してからはやくも十一年の歲月が過ぎ、嘉永四年、小楠四十三歳の年までは、小楠の更生期であり、精神的の獨立期といふべき時期であつた。

第六章 開國論

★「是時先生の聲望稍天下に顯る、書を寄せて其起んことを勸むる者あり、贊を執て門に来る者有り、嘉永二年越前福井藩士三寺三作藩主の命を得て眞儒を四方に求め諸國を漫遊す、未だ其人を得ず、偶梁川星巖に逢ひ始めて先生の名を聞く、乃ち遂に熊本に來り先生に見へ嘆して曰く、斯人なる哉と、留て師事す、居ること半年餘、粗其要領を得て皈る、時に天下漸く將に多事ならんとす、先生燕臥すること能はず、四年上國を巡遊せんとす、門生二名を従へ二月程を發し中國を経て畿内に入る、到る處各藩の士風民俗及藩政を審視し記して是容に贈る、遊歴見聞録是なり、是容見て深く其用意の精到なるを感嘆せり、此行海道は尾張に止まり轉じて越前に赴く、福井藩執政及藩士既に三作の言に依り久く先生を景慕す、到るに迫んで最も優待を極む、執政某の別墅遊仙樓に館す、留ること月餘、當時藩の儒員吉田東篁なるものあり、朱子學を以て名あり、忠愛人を導く、先生太だ東篁の志を善す、東篁門下の士と共に日に先生の旅館に來會す、先生爲めに大學を講ず、其文字章句の上に非ずして大に時務に適切なるを以て衆皆

嘆服す、由利公正氏の如き負笈隨行（故有て果さず）せんと欲するに至る、而して加賀に入り復越前に反る、歸途大阪に至り城代上屋采女正が用人大久保要に因て幕府に上書（遺稿無し）し時事を言ふ、漫遊中接する所の士多しと雖も特に結交せしは京師の梁川星巖、春日諶岐尾張の田宮如雲、長州の村田清風等なり、星巖時に帷を京師に下し詩を以て鳴る、自ら詩に隱ると云ふ、懇に先生を都下に留めんとす、先生笑て之れを辭し袂を拂て國に皈る、同年八月なり。先生既に歸り浩歎して曰く、天下人無しと慨然自任するの志あり、是より先生の體段識見共に高きを加ふ、蓋し封建時代の人心たるや着眼其限畫有りて封疆の外に出でず、天下の事は彼岸の火視するのみ、大槩皆然り、先生甚だ其弊習を厭ふ、大學の八條目に由りて子弟を諭して曰く、所謂欲明明徳於天下云々とは天下の人をして各其聰明を開發せしむるの規模にして區々一方一隅に止る可らず、其規模大にして任重く國家の治齊し身心を修正する愈々切にして識意格致の學始めて着實なり云々。」（小傳）

小楠が熊本にあつて實學黨の中心として活躍し、一方小楠堂で青年を教育してゐる間に、その名聲は漸く藩外にも喧傳されるやうになつた。その名聲は、肥後藩の小楠として藩内に止まるこ

とをゆるさず、時勢の動向とともに天下の小楠として活躍を勧めるものも少くなかつた。元來小楠は肥後藩士であるが、彼の眞の活動舞臺は福井藩である。その福井藩との最初の使者ともいふべきは、越前藩の士三寺三作である。三寺は藩主松平春嶽公に、廣く天下に大儒を求めて藩の政教の振興を圖るべきことを進言したが、藩主はこれを容れて三寺をして天下を遊歴して適當の人物を求めさせた。それで三寺は京都に出て梁川星巖、梅田雲濱に逢つて、始めて小楠の學識聲名をきき、梅田から肥後藩家老米田是容（長岡監物）の臣笠準人への紹介狀を得て、嘉永二年熊本に入つた。そこで笠は三寺を小楠に紹介しそれより三寺は小楠堂に寓して、師事したのである。小傳には「居ること半年餘」とあるが、實際は二旬であつたといふが、この間に師弟は堅く結ばれこれが後に小楠を福井藩に活躍せしめる端緒となつた。

なほ小楠堂へ入塾當時の三寺の日記には食費の事など次のやうに記してある。

十月十九日、此日より横井平四郎塾中に寄宿、伊勢屋え禮式貳朱遣す。旅人方えの達し色々世話に相成り候故。メ（袖付夜具、袴）壹兩。一ふとん壹步貳朱、丁錢三百十一匁、一綿入り、熊本札但し壹匁は七拾文五拾貳文目五分、

廿九日、算用、夜具二ツ綿入れ一ツ、膳椀なぞ買ひ候、後に八兩之内金壹步貳朱残る、横井塾中賄

壹百文 丁錢 七拾匁、

壹月の増し 丁錢 百四拾匁、

壹年に貳枚出銀、

壹度分 貳百四拾五文、

會入用也。

年中雜用打込み 三兩貳朱斗り也。

この頃、天下の形勢は漸く一變し、内外の問題は頻發した。小楠が江戸遊學から歸國した天保十一年には隣國支那に阿片戦争があり、英佛米露の船艦は東洋に出沒して我が國の海邊を脅かし、小楠が相模町に居を移した弘化三年には佛國の軍艦が琉球に開港を迫り、米艦は浦賀に来て通商を求めるなどの事件があり、嘉永三年には憂國の志士高野長英が幕府の迫害のもとに自殺するなどの事件があつた。かうした天下の形勢を觀て、治國平天下を學問の道とし實學を本旨とす

る小楠が、ちつと故山に蟄伏する筈はなかつた。嘉永三年五月福井にある三寺三作に與へた書翰には、小楠の當時の心境をかう述べてゐる。

「洋夷來寇之沙汰紛々之れ有り、彼が情勢既に顯然に御座候へば干戈に及び候事も遠くは御座あるまじく、仰下され候通り天下之憂に任じ候人は、實に寢食を安んじ申さず候時節に候へば、學世總て安安二字之深坑に落入り、天下之士氣此くの如に衰弱に至り候は眞に痛心大念に存じ奉り候、去冬江戸に於て閣老より策問之れあり對策も百通餘も上り候由、弊藩にも少々傳寫流布仕一覽仕候處、大抵軍器防禦之手當之末を説き候のみにして曾以て天下の大勢之係る所大根本を痛論仕候ものは之れ無く、無下に不見識の臣と存ぜられ候。佐藤一齋杯は和議通商の説を立て候様に承り申候（和議之説は一齋に限り申さず、餘程多く御座候由、就中學者の説に出候と承り學術之不正、人心之邪なるとは申しながら、誠に以て沙汰の限なり）只今より既に和議之説行れ候は實に南宋衰弱の時勢に少しも替り申さず候。後來の成行甚だ以て氣遣仕候。神州は百王一代三千年來天地の間に獨立し世界萬國に比類之れ無き事に候へば、譬へ人民は死にはて、土地は總て盡き果て候ても決して醜虜と和を致し候道理之れ無く候。天下當路之諸公は申上るにも及ばず、列藩の諸公、苟も社稷人民之責在らせられ候御方は、此の道理を眞實御

合點遊ばされ候へば一切の利害心忽に消えはて申すべく（是即孟子勝文公に告給ふ眞殺之道理也）此利害心一度去り候はば必斷然たる剛明之勇氣發仕るべく、是に於て臥苦枕乾之御心に成らせられ一切安因修之舊弊を改め身を以て天下之憂に先立せられ候へば號令を出すに及ばず天下列藩の士氣憤興致すべきは必然の勢なり、況や又大號令を出し大賞罰を行はれ候へば、神州固有の正氣一旦に舊復し六大洲中をふみ付け候意氣に罷成り候事は何の疑か御座有る可し。是に於て軍艦火器凡百の攻戰之術必ず宜敷を究め本末並び舉り、武備嚴重に相成り候へば威光八荒に輝き醜虜膽落魂褫れ窺視之心自絶て天下益々泰平に相成申すべく候、是朱子孝宗に上る之書深意肝要之大義現にして眞に是二つなき道と存ぜられ候。如何々々。」

この頃の小楠は猛烈なる攘夷論者であり、大いに世の微温的な和議論者を痛撃してゐたことがわかる。そしてこの書翰によつて知られる通り天下の士氣の衰弱を歎いてゐる小楠は、遂に足を藩外に踏み出して、天下の實情を視察し廣く各地の志士と談ずる機會が到來した。

即ち嘉永四年天下遊歴の志を立て三百日間の上國遊歴の許可を得て、二月、門生、徳富熊太郎と笠左一右衛門の二人を従へ二月十八日熊本を發足した。この遊歴は下の關から山陽道を東へ進

んで大阪に出て近畿を巡歴、東は名古屋に止めて北陸道に廻り、かねて期待した福井に滞在し金澤地方を遊歴して、八月二十一日歸國した。その遊歴地を路順にあげると、次の通りである。

柳河、久留米、秋月、下關、長府、徳山、岩國、廣島、福山、岡山、姫路、兵庫、大阪、岸和田、和歌山、大和、河内、奈良、宇治、京都、大阪、大津、津、山田、桑名、神戸、名古屋、大垣、彦根、府中、鯖江、福井、大聖寺、金澤、福井、敦賀、大阪、中ノ關、三田尻、山口、萩、赤間關、大里、赤間、小倉、福岡、博多、太宰府、久留米、柳河、

この中で柳河から紀州までの見聞を隨行の徳富一義に口授筆記させたのが「遊歴聞見書」であるが、これによると、遊歴中、各地の地理、風俗を詳細に視察し、各藩の士風の弛張に對して小楠流の批判をなしてゐる。また各地の學風や人物批評、政策批評などを詳記してゐる。その中から學校に關するもの、をあげて見よう。

岩國

一、一昨年始て學校建立に相成り玉乃小太郎（五十四歳）二宮元輔（四十七八歳）此兩人主として世話いたし出來仕候、寮生も之れ有り、中々盛なる事に御座候。小太郎案内にて學校に参り學職以下寮生に寛話致し申候。靈像は大内家の舊物にて元春公の手に入、是迄寶庫に藏し之

れ有り候を此節聖堂に安置奉り候、元來は足利學校の舊物と申傳候由、則ち拜上奉り候處御眼光人を射候御様子にて自然に敬畏の心を生じ申し候。學意は小太郎列先は程朱と申す事に御座候へどもかたはら堀川、龜井など取用ひ候咄にて、一體正學にて甚だ惜むべき事に御座候。唯其人物は樸實に之れ有り、至て虚心平氣にて深く益を求め候意旨に相見え申し候。

岡山

一、學校は芳烈公御建方にて當時迄火災之れ無く拜見仕り候處、全體規模廣大にて禮樂より化を成候思召にて御座候、御作事は至つて龜略に相見え美麗成る事は聊かも之れ無く候。獨り聖堂講堂のみ結構に御座候。

一、閑谷學校に参り拜見仕候、御城下より八里東に當り候深山之内に御建方に相成申候。是は烈公御廻在之節、此地に御出成され候處、深山幽谷誠に澄心至極の地にて御家中若物共學業無類の處と御見立成され、學校御建方成され閑谷と名をも御付に相成申候。烈公御建方の節は至つて龜略の制作にて屋根は茅ぶき位にて御座候處、御子伊豫守様御代津田重次郎引請け無類之美麗なる御作事に相成り、江戸聖堂之外は天下に此の如く壯麗の學校は御座ある間敷存ぜられ候。其内講堂の側に三疊二間、四疊半の間之れ有り、是は君侯御出の節は御休息の所に御座

候。殊之外龜略なる普請にて柱はふしある末木之様に先き細りを其儘荒かなにて用ひ、天井は矢篠竹にて御座候。是は烈公御代のもの由に御座候。美麗限りなき學校に御居間は右之通に之れ有り候は誠に感じ入り申し候。別圖形別紙の通に御座候。烈公思召にて以前は岡山より諸生参り詰め居り候得共、當時は左様の事御座無く候。近村の郷士、醫生又は他國のもの十輩計りも寮詰めいたし居候。尤岡山より教官一人外に諸役人参り居り申候て彼是の世話仕り候。外に月に六度近村の百姓講堂に罷り出で講釋を聽問仕候。此講釋は烈公御代よりの事にて白鹿洞掲示を繰返し仕り今以て相替り申さず候。元祿の頃に候哉一ツもの餘り繰り返し候も宜しかるまじく、論語などに替へ候も然る可きかと岡山にて詮議之れ有り候處、市浦穀齋と申す人確論御座候て前條通り掲示の一書に限り二百年來替り申さず候。

姫路

一、學校は林門、崎門の二派之れ有り、崎門の學は其弊甚だ固陋に陥り、林門派は専ら其弊を矯め詩文多識を務め、各一偏に相成り、必竟識見有る人之れなきよりの事と相見え申し候。右の通にて當時は林門、崎門之學官隔日に出席いたし、公然と兩途に相分申し候。

一、仁壽山と申す學校城下より一里計り南に之れ有り候。惣體此の學校は已前河合隼之助國政

を取候時分一藩崎門之學風固陋に之れ有る處より、此弊を矯め修爲に諸方の學士を招き講學いたし候。則ち猪飼敬所、頼山陽など其の人物にて歴史的詩文を専ら唱え殊の外盛に御座候由、今日に至り候ては御家中の子弟も總て城門學校に引取候故、殊の外淋しく相成り候。

一、松平孫三郎（廿七八）文武御委任にて専ら學校を引立て寮生百人餘に及び申し候由、大夫已下諸有司の面々も學校に出席會讀等之れ有り候由、學館殊の外繁勤、朝五ツ時出席、夜四ツ過に引取候て出會の餘暇も之れ無く、委しき話承り候埒に至り兼申し候故士風現實相分らず候。

この外にも各地の學風について細心の觀察と適確な批判を下して居り、さすが教育家だけに、教育の弛緩には深い關心を拂つてゐる。就中、岩國の藩學養老館で拜した聖像には「自然に敬畏の心を生じ申し候」とあるが、歸國後その寫を贈つて貰つた時の返書には、「聖像の御寫被贈下、御多情之至り、誠に以不淺忝仕合に奉存候。御疵にて不思議成る御像拜戴仕、終身之大慶此事に奉存候」と感謝してゐる。

この聖像の寫しを贈つて貰つた事などと關聯して小楠の遊歴で注目すべき點は、これほど強烈

た精神家である小楠が、決して観念的な遊歴家とならず、格物致知を重んじ、常に物を現象的に具體的に觀てゐることである。右の學校視察記についても學校の場の觀察が極めて周到である。殊に閑谷學校が澄心の環境に建設されたことなどは、今日の場をはなれた日本精神の教育論者にとつては参考とすべき點である。強烈な精神は豊富な環境から生れる。そこに天人一體の世界觀があり實學の本旨がある。小楠はこの遊歴中にも、或は吉野に南朝の遺跡をたづねた記念に、その石塊を持ち歸り、如意輪寺に參つては「かへらじとかねて思へば」の和歌の拓本を受けて歸り、楠木正成と菊池武光の畫像の奉納を約して二年後に實行し、千早城址から石や竹を持ち歸つてゐる。

なほこの遊歴中に、各地の土民の物質生活について特に注意を拂ひ、服裝は木綿であるか絹物であるか、日用品や菓子その他の食物は節儉であるか否か、酒や米價に到るまで細かに視察してゐることである。さうして、それらの風俗を觀察してこれを國家的見地から鋭く批判してゐる。殊に廣島などは「土風傾廢限りなく文武の衰微山陽道第一に御座候」と斷じ、その暴政の一例をあげてから述べてゐる。

「去冬、在中極めて難澁にて御救恤願ひ奉り候處、極至貧の者吟味致し差出候様にとの事故、

何れ御救ひ下され候事と存じ、村々孤貧無告の者差出し候處、官府より此分は御入用に之れ無し、早々何方えぞ立除候様にとの沙汰に及び候間、何れも甚だ悲號仕り候由、之に依つて御隣國所々に廣島領の百姓飢民夥しく御座候。誠に暴政甚だしと申すべく、近來は飢民のものに川堀さらへ仰付られ男子幼弱に限らず一人前に麥五合宛下され候故日々朝飯後引きもきらず其場へ參り申候を見受け申候」

幕末暴政の地方版が小楠の目と口を通して痛烈に描き出されてゐる。また土風の頽廢についても、この廣島の見聞にも「町家にて聊か美婦と唱し申すものは御家中の面々争候て妾に抱へ申候。心有る人は甚以て慨歎仕候」とある。また武士道は名のみとなつた當時の驚くべき弊風について更に、岡山の見聞には次のやうに述べてゐる。

「御城下より二里板倉と申すは公領にて賣女樓盛にこれ有り、此のあたりの歌吹海にて御座候。士人馬上行にて五騎十騎登樓いたし公然たる事に御座候。中々文武の道は程遠く相見え、武藝は弓馬盛に行はれ劍槍は微々たる様子に御座候。平常宴會盛に之れ有り、町家などにも少しく美婦の唱之れ有る者は相争ふて妾に抱へ、其の末申分と相成り打果し候事も御座候由、誠

に傾廢の甚しきと申すべく候。此の如き酒色の世界にて候へども流石に烈公の餘澤之れ有り御城下に賣女と申すもの之れ無く、且つ芝居、三味線停止にて御家中衣服丈夫より以下總て綿服にて袴の裏にも帛を着け申さず候。士人家内はつむぎ位着用いたし候。」

これらの見聞録によつてすでに封建制度の支柱は内部的に士道の頹廢となつて崩壊しつつあることが看取される。そして小楠の政治は倫理であるといふ革新的主張を裏書きする事實ばかりである。

遊歴中、横井家發祥の地たる名古屋には、半ヶ月間滞在して、宗家横井次郎吉、總本家横井伊折介の宅を訪問して、祖先傳來の寶物を拜觀し横井家の系圖を寫し取り、まだ十五歳の宗家の當主には、別れに臨んで祖先の名を耻づかしめず、夷狄を攘つて皇國を護れと勵ましてゐる。

北陸に出てはかねて藩士三寺三作をはじめ多くの小楠崇拜家の居る福井に足を入れ、非常な優待を受けた。到着すると家老稻葉家の別墅遊仙樓に迎へられ藩の貴賓として遇せられた。

徳富の「東遊日録」にも、「滞留中一切上より御賄付られ御手厚き御模様、實に賢を御尊びなさるる御主意有難く身に餘る。」といふ意味が記されてゐるが。ここには藩儒吉田東篁及びそ

の實弟岡田準介、三寺三作、由利公正などをはじめ數十人の青年學徒が小楠の旅館に押寄せて時事を談じ、また小楠の卓拔で魅力ある講義を聴き、諸生みなその豊富な活學に鼓舞された。小楠は福井に前後二十日餘り滞在した。ともすれば故郷に容れられず郷黨から白眼視された小楠が福井で受けた知遇は彼に深い感銘を與へたであらう。彼が後に岩國にある坂本格等に與へた前掲の書簡の中には、「奉別以來中國筋列藩所々到留、大坂に出で紀に參り大和、河内より京師に出、夫より勢州津、桑名、尾張、彦根、福井、金澤に參り、夫より引返し大坂に出で乗船にて抵廿一藩にわたり國々風俗士氣之相替り且は政治之盛衰、人物之有無誠に様々にて一々言上出來申さず候。就中當時甚だ盛大なるは福井にしく所御座無く候。御政事向はいまだ夫々御手付き申さず候へ共、全體之士氣之……君公……上程の賢明にて當時之所は君臣上下共に此學事に必至に志し修行最中にて、上程然るべき人物も出來いたし、何れ五七年も經候へば君臣共に丈夫に御成り成さるべく」等と他藩のものにまで吹聴してゐる事實でも知ることができる。

この遊歴の收穫としては、各地に於て知名の志士や學者と面談して親交し大いに天下に横井小楠の名を高からしめた。今遊歴中、會見した諸名士をあげると次の通りである。

大 阪 大久保要、橋本左内

京都 〓 梅田雲濱、春日潜庵、梁川星巖

津 〓 平松喜藏、齋藤拙堂

山 〓 田 〓 足代權太夫

名古屋 〓 田宮如雲

福井 〓 吉田東篤、由利公正、岡田準介、三寺三作

金澤 〓 上田作之丞

萩 〓 山田亦助、山縣半七、村田清風

久留米 〓 眞木田和泉守保臣

柳河 〓 立花登岐

この中、萩では吉田松陰に逢ふ積りであつたが、松陰が江戸遊學中で目的をはたし得なかつた。小傳にも出てゐる大久保要は、大坂城代上屋采女正の公用人であるが、藤田東湖と往來して尊攘の志厚く、水戸齊昭の解憤運動に努力し、天保山砲臺の築造や海防に盡力した進歩的な志士であるが、小楠が京都から米田是容への書翰の中で大久保の人物を推稱し、「此人温然たる人物にて才識も有之中々底強き氣象にて愛す可き人物に御座候。學問はさして、深くは相見え申さ

ず、例の水戸學にて大道は甚だ以て明白に御座候。」と云つてゐる。この時、大久保は水戸齊昭や會澤正志齋、藤田東湖などの人物について談じたが、大久保は別れに臨んで小楠に、千早城に於ける楠公を詠じた詩を書いた會澤の書幅を贈つてゐる。

京都で逢つた梁川星巖は天下の詩人として名聲が高かつたが、小楠は「道學中の姦雄」と評した位であまり重くは見なかつたらしく、星巖が小楠を學習院に推舉しようとしてもこれを辭して別れてゐる。京都では梅田雲濱（梅次郎）とも連日會談した。梅田は小楠の人物を畏敬したが、小楠は後に「迷惑なる人物」とか「此種の人程致しにくきは御座無く」とか「陽に正直をかざり陰に利心をさしはさみ」と他の人に語つてゐるやうに輕視してゐた。しかし梅田は後に安政の大獄に斃れた志士であつたから大いに時事を談じたり學問上の問答をしたのは勿論である。なほやはり梅田とともに安政の大獄に連坐した志士であり西郷隆盛もこれを欽慕したことのある春日潜庵にも逢つた。

京都にある間に小楠は、再び大阪に行つて滞在し、志士橋本左内と會見して、互に意氣投合したと見えて、小楠は左内に熊本への遊學を勧めてゐる。しかし左内は事情あつて小楠の勧めには従はなかつたが、小楠の遊歴はかうして有爲の志士と肝膽相照らし同志の結束を堅くする勤皇運

動であつた。

名古屋で會つた田宮如雲（彌太郎）は、文武兩道に秀でた陽明學者で、後に維新の新政府の參與となつた人であるが、當時は名古屋の町奉行を勤めてゐた。年も五十歳位で小楠よりは年長であつた田宮が、親しく小楠を訪ねて教を受けたのは、もとより勤皇の赤誠からであつた。

萩で長州の人傑村田清風翁を訪ねたことも注目に値する。小楠は宮部鼎藏の添書をもつて吉田松陰と會見の目的で行つたが、松陰が江戸遊學のため不在であつたので、儒者山縣半七、志士山田彌助等と會見した後、中風のため山莊に籠つてゐる村田清風翁を三度も訪問して會談した。小楠がこの清風をいかに觀たかは、小楠が歸國後、福井の吉田東篁に與へた書翰に「村田にはゆる／＼と話し申候。前廉中風にて家内の行歩も漸く仕る位にて誠に六十九歳の老翁に候へども、中々の人傑にて其精神も氣魄も旺んなる人を壓し候處は驚き入り申候。只惜むべきは學術純正ならず遂には一個の私見に陥り申候。右之次第故之よりは一切親切も仕らず候。」とあるに依つて知ることが出来る。

かうしてこの度の遊歷によつて各地の志士人傑を歴訪したが、小楠の目から觀れば、やはり「天下人無しと慨然自任する志有り」と小傳あるやうに歎ぜざるを得なかつた。遊歷中に、京都

から米田に送つた書翰にも、「天下人才は誠に大拂底にて、是迄敬服仕候程之人一人も出會申さず、學意は勿論申すに及ばず正學にても何學にても一向に御座無く候。」とある如く既に失望してゐる。かく諸國を遊歷して歸つて觀れば、小楠の自負自信はいよいよ強くなり、周圍の人物拂底が著しく感ぜられたことであらう。されば小楠の氣位も識見もますます高まり、封建時代の人物がいづれも一藩の狭い限界内に着眼して、天下國家の事はまるで對岸の火災を視る弊風を排撃した。そして子弟には大學の、格物、致知、誠意、正心、修身、治國、平天下の八條目をあげて區々たる一隅の小人物に止まらず規模の大きな天下の人材たれと説いた。上國遊歷以後の小楠は、天下の小楠として志士の中に廣く知られたと同時に、自らまた肥後の小楠から天下の小楠として爲すあるべきを自覺したのである。

しかしながら小楠のかかる主觀的矜持にもかかはらず、藩に於ける白眼と警戒の眼は、かならずしも好轉したものではなかつた。藩府の彼に對する迫害の手はひそかに蠢動してゐた。小楠の上國遊歷中は、別にかつての江戸遊學の時のやうな酒の上の失敗もなく、眞面目な修養の旅であり精神の武者修業のやうなものであつた。彼が遊歷中、米田に送つた書翰には「最早次第に暑に向ひ申候間、私共も愈々以て慎戒を加へ養生仕り候。勿論海乘は堅く禁制仕候。將又御示教の酒

は大禁制仕り何方にても聊にても醉申す様には給申さず、三杯に相限り斷り申候。彼是御安心下さる可く候。」とあるやうに、自戒自肅の旅をつづけて、一路、勤皇の大義の實現に心掛けてゐたのである。

しかるに、小楠が、遊歴出發の後、嘉永四年四月晦日付で、藩主細川齊護は、江戸から國家老にあてて次のやうな書を送つてゐる。

「別紙内密に申入候扱て横井平四郎事、監持家來同道にて越前の國へ罷越候哉に承候。尤外にも兩三人之れ有る由も聞込候。全く風評のみの事哉、實に打立に相成候哉。何時頃の事にて之れ有るべく候哉、學問志の爲とは考へ候へども委細の儀、且つ實否尋分り兼ね候間、委しく申越さる様に存候。我等出發後も實學連中、何ぞ相變たる義も之れ無く候哉。序故に此段も申入候。得と咄合ひ返事申越候様待入り候也。」

しかしかうした内情を知る由もなく、小楠は却つて實學黨への壓迫は緩和されたかに思ひ、盛んに米田その他の同志と往復して遊歴による新しい體驗や見聞を語つて勵まし合つた。遊歴以後の小楠は、もはや一藩一國の小天地に跼蹐し、封建的鐵鎖に束縛されてはゐなかつた。いはゆる「明德を天下に明かにする」とは天下の人をして各其聰明を開發させて國家的活動に進動せしめ

ることであると信じた小楠は、同志とともに勤皇の大義を談じます相切嗟し、また幕外の同志とも氣脈を通じて他日天下に活躍すべき大望に備へた。當時、肥後藩には、實學黨のほか、學校黨と勤皇黨があり、この三派が鼎立してゐたが、實學黨は水戸に、學校黨は會津に、勤皇黨は長州に、それぞれ藩外の同志を結託してゐた。小楠の實學黨も尊皇攘夷を主張してゐるので勤皇黨と接近し、小楠も勤皇黨の宮部鼎藏などは親交があつた。遊歴中、小楠が萩に廻り宮部の紹介状をもつて吉田松陰を訪ねたのもそのためである。後に極端にまでの開國論者となつた小楠が、この當時は、徹底的な尊皇攘夷論者であつたといふことは注目さるべきであり、彼がいかに急進的な開國論者になつたとしても、あくまで勤皇の大義から出てゐることを知るべきである。時に勤皇のための攘夷であり、勤皇のための開國であつた。そこに彼の活學の強味がある。

もとより實學黨ともつとも親近したのは水戸であつた。小楠が江戸遊學以來の盟友ともいふべき藤田東湖に宛て、上國遊歴前、嘉永四年二月十五日付の書翰には、「尊藩御盛運之時節、御新政赫々海隅邊地まで相響、列國廢衰實に憤興之勢にて竊に天下興運の時運と存じ奉り月日に刮目罷り在候と水戸藩の盛運を述べてゐるが、その書翰に「同藩宮部鼎藏列、今度、遊歴として罷り出、尊藩の御事は別て迂生嚮慕仕り、此節主として拜趨仕り候間、憚ながら萬端御教示成し下さ

る様頼み奉り候。右鼎藏は兵學を主として仕り候間其の節の事別て拜聞仕り度き心願に御座候、小生萬端是より御承知成し下さるべく候」と述べてゐる。宮部鼎藏はいふまでもなく吉田松陰の盟友であり、江戸で松陰はこの宮部との盟約を重しとして遂に脱藩さへした程であるが、かうして小楠は東湖に宮部を紹介し、宮部は松陰に小楠の紹介し、當時の勤皇運動は生きた人間を通じて天下の同志が堅く結ばれて、一大勢力をなしたのである。いはゆる遊歴とは志士が志士を遊歴することであつて、名勝舊蹟を遊覽するのが本旨ではなかつた。聖賢の書を読むことと、名士と交ることとの二つが、當時の志士の修養であつたが、小楠のやうに書物の上の講學よりも實踐的な格物致知を重視する實學黨にとつては、特に天下の志士と親しく交はる實踐運動を重く視た。されば小楠は、上國遊歴にも、藤田東湖に「此節は江戸にも罷出、尊藩に拜趨、自來の心情相述べ御安否伺ひ奉たく御座候へ共、出來申さず、甚だ以て遺憾千萬に存じ奉り候。尾、紀、越前、加賀、因州、藝州、長州等の國には打廻り申候筈に付歸郷後は見聞差出し申すべく」とあつて、同志は互にその見聞を報告し合つて、皇國の現状を適確に認識することができた。いづれにしても小楠が將來活躍の天地を、廣く天下に想望してゐた事は事實である。彼はもはや一肥後藩の裡に閉ぢ籠るべき人物ではなかつた。そして遊歴後、小楠の心胸に描かれてゐる藩

外の天地は、やはり最も優遇された福井であつた。十月朔日、福井の吉田悌藏に宛てた書翰には、「拙藩一體無事、相替り申儀御座無く候。此節罷歸り承り候處、例の黨禁も存外相寛みの勢にて一向に波立申さず、大に安心仕り候」と歸國後、藩内の實學黨への迫害が緩和されたのに満足の意を述べた後、かう書いてゐる。

「尊藩盛大の筋、監物（米田）列に委細に咄申候。最早歸郷後、七八度の出會毎に其儀に及び、甚だ以て大慶仕り候事に御座候。誠に當世の勢、此の道の衰廢限りなく、平生監物憤慨歎いたし罷り在り候處、尊藩此の如く御盛運の儀拜承仕り候ては、ならずながら一臂の力にても御助力仕りたしと眞以て躍喜仕候」

福井の青年志士の潑刺たる勤皇運動と微温的な肥後藩の現状とを比較して慨歎し、及ばずながら一臂の助力をしたいものと躍喜してゐるといふのは單に書翰の上の御世辭ではなかつた。

「五年、松平春嶼公曩きに先生漫遊の日面接せざるを憾み人をして學校の制を問はしむ、先生乃ち學校問答録を草して之れに應ず、春嶼公見て大に悦ぶ、遂に躬待の意有り」（小傳）

小楠が躍喜して一臂の助力をしようとしてまで云つてゐた福井であるが、その福井の藩主春嶽公から學校の制について意見を求められ小楠がこれに應へたのが有名な「學校問答書」である。これはわが小楠の學校論として極めて意義あるものであり、元來、實學黨と呼ばれ書物の上の學問よりは、あくまで事實の上の修練を重要視する小楠の教育論として、特に今日の時局下の學校教育、政治教育にとつても参考とすべきものがある。今その全文を次に示さう。

學校問答書 嘉永五年三月

問云、政事の根本は人材を生育し願俗を教するに有之候へば、學校を興し候は第一の政にて候哉。

答云、和漢古今明君出給ひては必先學校を興し玉ふことにて候。然るに其跡に就て見候に、學校にて出類の人材出候ためし無之、況哉是より教化行はれ風俗敦く相成候事見へ不申。先づ漢土にて見候に、漢・唐・宋・明の賢人君子と稱せられ候人、大學生より被出候は無之候。唐太宗大學を興し生徒八千人の夥しきを被集候へ共、此八千人の中より一人の人材出不申、徒に盛なる虚名

に歸し申候。且當今天下列藩何方も無之所は無之候。然るに章句文字をもてはやし候迄の學校にて、是又一同人材の出候勢無之候。是其跡かたちを以て見候事にて、其然る所以は嚴斗有之候事にて、深く考へずんばあるべからず候。

和漢古今學校の跡かたちは然る事に候。然るに是は學問と政事と二に離れ候より、學校は讀書所に相成無用の俗物に歸し候。今明君出玉ひて、此弊習を深くしらしめし、學政一致の道に心を置き給ひて學校を興し人材を生育風俗を教せんと思し玉はば、可然事にて無之候哉。

此の了簡一通り聞え候へ共、深く其本を考へざる事と存候。先考へて御覽候へ。大和にても漢土にても古も今も學校を興し玉ふは其國其天下の明君の時にては無之候哉。此明君の興し給ふ學校にて候へば初より章句文字無用の學問に成り行候は深く恐れ戒められ、必學政一致に志し人材生育に心を留め玉ふ事に候。然るに其學政一致と申す心は人材を生育し政事の有用に用ひんとの心にて候。此政事の有用に用ひんとの心直様一統の心にとおり候て、諸生孰れも有用の人材にならんと競立、着實爲己の本を忘れ政事運用の末に馳込、其弊互に忌諱媚疾を生じ、甚しきは學校は誼譚場所に相成候。是即人材の利政と申ものにて、人材を生育せんとして却て人材を害ひ、風化を致せんとして却て風俗を壞り、其末あつものにこり、人材をいやがり候心に相成り、果は章句

文字の俗儒の學校に成り行候は勢の止むべからざる所にて候。

然ば學政一致の心は非なることに候哉。

秦・漢以來此道明かなり不申。天下古今賢知も愚夫も押しならし心得候は、學問と申は脩己の事のみにて、書を読み其義を講じ篤實謹行にして心を世事に留めず、獨り自ら修養するを以て眞の儒者と稱し、經を講じ史を談じ文詩を達する人を學者と唱へ申候。扱又才識器量有之人情に達し世務に通じ候人を經濟有用の人材と云ひ、簿書に習熟し貨財に通じ巧者にて文筆達者なるを能き役人と心得候。是學者は經濟の用に達せず。經濟者は脩身の本を失ひ、本末休用相兼ること不能候。漢の宣帝の漢家自ら王霸を雜へ用るの説も、其世の儒者體ありて用無きより政事は覇者功利の人被用候。今日の人心誰に承り候ても此心得にて分明に學政二に離れ申候。此二ツに離れ候學政を一致にせんと欲し候は一通尤に聞え候へ共、元來其本無くして治を求むるの心急に有之、前に申通り人材を生育し有用に立んと欲す心主に成り候て、其實は一致にて無之候。是即人材の利政に相成候所以にして古今明君の通稱にて有之候。

學政一致ならざるのくるひ承り候。然ば其一致なる所以の筋は如何に候哉。

事あたらしき申事ながら天地の間唯是一理にて候へば、人間の有用千差萬變限り無く候へ共、其

歸宿は心の一にて候。去れば此の心を本として推して人に及し萬事の政に相成、本末體用彼是のかわりは候へ共二ツに離れ候筋にては無之候。此二ツに離れざるが、一本より萬殊にわたり、萬殊より一本に歸し候道理にて候へば政事と申せば直に脩己に歸し、脩己は即政事に推し及し、脩己治人の一治に行われ候所は唯是學問にて有之候。其故に三代の際道行われ候時は君よりは臣を戒め、臣よりは君を敬め、君臣互に其非心を正し、夫より萬事の政に推し及し朝庭の間欽哉戒哉念哉懋哉都俞吁咎の聲のみ有之候。是唯朝廷の間のみにて無之父子兄弟夫婦の間互に善を勧め過を救ひ、天下政事の得失にも及び候は是又講學の道一のみにて無之父子兄弟夫婦の間互に善を勧め過を救ひ、天下政事の得失にも及び候は是又講學の道一家閨門の内に行われ候。上如此講學行われ、其勢下に移り、國天下を擧て人々家々に講學被行、其至りは比屋可封に相成候。是其分を申せば君臣父子夫婦にて候へ共、道の行われ候所は朋友講學の情誼にて、所謂學政一致二本なきと申は此にて有之候。後世は明君と被稱候人も父子兄弟夫婦の間種々彝倫の亂を生じ候のみならず、君臣敬戒の學行われず朝庭は唯政事の得失を議する所と相成り候。是即其本なくして政事の末を以て國天下を治んとする霸術功利の政にて候。此心にて學校を起し候故前條の通に弊害を生し候は必然の勢にて怪むにして足らず候。

然らば學校は起さされ共宜しき事に候哉。

學校は政事の根本にて候へば元より興さざれば叶わさる事に候。國天下に學校無之ときは藝倫綱常何を以て立可申哉、人才志氣何を以て養ひ可申哉、風教致化何を以て行われ可申哉、人々各見る所を是とし候へば君子小人の争のみならず、君子の人にして、互に相容れず朋黨を立流脈を分ち、終には國天下の大患と相成候ためし和漢古今歴々として不少候。況哉後世は種々の異端邪說有之、天資の高き人と云へ共其教習に惑わされ身心をあやまり人道を害ひ候もの不少、是皆天理自然學術一定の學校無之故に候。然れば道を知り玉ふ明君出給ひては必先一家閨門の内より講學行われ、朝廷の間君臣敬戒の道相立、政事はより出で、所謂學政一致の根本既に相立候上は必ず學校を興し、君臣是にて講學致すべき事に候。抑此學校と申は藝倫綱常を明にし、脩己治人天理自然學術一定の學校にて候へば、此に出で學ふものは重き大夫の身を云ふべからず、年老ひ身の衰へたるを云ふべからず、有司職務の繁多を云ふべからず、武人不文の暗を云ふべからず、上は君公を始として大夫士の子弟に至る迄暇まあれば打まじわりて學を講じ、或は人々身心の病痛を儆戒し、或は當時の人情政事の得失を討論し、或は異端邪說詞章記誦の非を辨明し、或は讀書會業經史の義を講習し、徳義を養ひ知識を明かにするを本意といたし朝廷の講學と本より二途に

て無之候。唯朝廷は職掌ある人に限り、學校は貴賤老少を分たず學を講ずる所にて候へば、學校は朝廷の出會所と申心にて是則學政一致なる所以にて有之候。

教官の撰如何なる人にて可然候哉。

學校の風習善と成るも悪しくなるも教官の身に有之候へば、其人の撰み尤以大切に候。此に二りの人有之候、一人は知識明に心術正しく候へ共經學文詩の藝に達し不申候。一人は篤實謹行に候へ共知識明ならず、乍然經學文詩の藝は格別に有之候。大凡の心にては前の人は側用人、奉行等の役人の撰びに入り、後の人を能き教授先生と申候。是即體ありて用無きを儒者と心得候後世人心のくるひにて、其勢記誦詞章の學校に成らざること不能候。一藩教授先生と被仰候人知識明に心術正しく無之候て、何を以て人の神智を開き人の徳義を磨き風俗の正しきを得せしめ可申哉。譬へ文藝は無之候とも、前の人にて無之候ては教養の道は行れ不申、況や知識明に心術正しく此道の大旨を會得いたし候人聖賢の書一通り讀み得ざるは有之間敷候。然るに此の人物は一國第一等の人にて一兩人の外は有之間敷學職に用ひ候へば御用人、奉行の要路に人の缺の憂有之候。夫側用人、奉行、教授の三職は元來一體にて、人一人をして總べ司らしむれば宮中府中學政一致に相成、情義能通じ隔絶の憂ひ無之のみならず、學校の勢自然に重相成可申候。

學校の設は如何にして可宜哉。

學校の設、聖堂有り、講堂あり居寮あり、句讀所、習書所あり、算學天文所あり、武藝所あり、國中の士人朝より暮に至り此學校に集り、文武の道を講ぜしむ。教官の設は惣教有り、教授あり、訓導あり、寮長あり、習書師、句讀師あり、大抵此等の設にて委しき事は列藩學校の制度を斟酌して行ふべきことに候、唯場所の撰は朝廷に引續き設けされば便利ならず候。君公も左右の人迄被召具て日々に出給ひ、大夫以下の人も暫の暇にも出席し講學いたし候が大學校の本意に有之候。

右問答の本意は歸宿は人君の一心に關係いたし、君となり師となり玉ふの御身に於て無之候ては、如何に制度の宜しきを得候共忽後世の學校に相成其益無御座候。然れば學校の盛衰は君上の一心に有之其他は論に不及候。

これを一言にすれば、學校無用論ともいふことができる。小楠は、これについて、他の書翰の中にも「尊藩學校御建方は是非共御止方に相成り」とか「只々、君臣御講學のみ彌以盛に罷成り、朝廷之間警戒講習朋友之道行はれ候處、實に國家の大根本と存じ奉り候。是さへ盛に相成候

へば余の事柄は次第に漸く舉り申すべく」とか云つてゐる通り、眞に學校を建てることを思ひ止まらせることが、この問答書の本旨であつた。この最後に「人君の一心に關係致し君となり師となり給ふの御身に於て無之候ては如何に制度の宜きを得候も忽ち後世の學校に相成り其益御座無候、然れば學校の盛衰は君上の一心に之れ有り其他は論に及ばず候」といふのが、結論である。したがつて學校無用論は、もとより眞の學校有用論で、當世のやうな學校は眞の學校ではないといふ意見である。

「學校問答書」は、最初に、和漢古今の名君が出ると必ず第一に學校を興し給ふが例であるが、その結果を見るに學校のために風俗がよくなつたといふ事は見えないと斷じたのは辛辣である。小楠が指摘する學校とは、「章句文字をもてはやし候迄の學校」を意味する。

次に學問と政事とが分離しはゐるために學校が讀書所となり無用の俗學に陥るから、明君が出て學政一致に心掛ければ、人材を生育できるかの間に對しても、小楠はやはり、かかる學政一致觀は、人材を育てて政事の用に用ひようとする利政の學校となり、學問の根本を忘れて、政事運用の末に陥り、やはり章句文字の學校になるであらうと答へてゐる。元來、學政一致と云つても、學者は經濟の用に達せず、經濟者は修身の本を失ひ、本末體用を兼ねることが出來ず、世人

も一般にそれを當然と考へてゐる。世の學者は體があつて用がないので政事は覇者か功利の人を用ひる様になる。これがため、學校を設けても眞に本末體用を兼ねた眞の人材を育成することをせず、徒に利政の人を作らうとするのが通弊である。即ち小楠の學政一體觀は、政治と道德との一體化を根本としてゐる。そこで眞の學政一致の理を述べて、人間の用は千差萬別であるが、その根本は心であり、體である。學問とは體を養ひ心の根本に培ひ、これを本として人に推し及ぼし萬事の政となるものであつて、己を修め人を治むることの一致が眞の學政一致である。

この意味の學校は必要であつて、眞に學政一致の學校があつてこそ、はじめて治國平天下の道が確立される。學校とは人倫を明かにし己を修め人を治め天理自然學術一體の學校である。上は君公を始め大夫士の子弟に至るまで、暇あればお互に學を講じ人情政事の得失を討論し、徳を養ひ知識を明かにすることが必要であり、朝廷と學校とは根本に於て一致せねばならない。ここに小楠の政教一致の理念がある。ここで朝廷とは藩の役所である。

それとともに、側用人、奉行、教授の三職は元來一體で、此の三職は必ず一人をして總べ司らしめるがよいと述べ、設備も聖堂、講堂、居寮、句讀所、習書所、算學天文所、武藝所、を設けて國中の人士は君公もともに朝から暮まで集つて講學のできるやうにし、教官としては、惣教、

教授、訓導、寮長、習書師、句讀師などがあるが、要するに制度がいかに立派であつても、學校の盛衰は君上の一心にあると結んでゐる。

かかる小楠の學校觀はその學問觀から來てゐるのである。

「古人の所謂る學なるもの果して如何と見れば全く吾が方寸の修行なり。良心を擴充し、日用事物の上にて功を用ゆれば總て學に非ざるはなし。父子兄弟夫婦の間より、君に仕へ友に交はり、賢に親つき衆を愛するより、百工技藝農商の者と咄し合ひ、山河草木鳥獸に至るまで、其事に即いて其記を解し、其上に書を読みて古人の事態成法を考へ、義理の究まりなきを知り、致々として止まず、吾心をして日々靈活ならしむる是則ち學問にして修行なり。堯舜も一生修行し給ひしなり。古來聖賢の學なるもの、是に舍いて何に有らんや」

この小楠の學問觀は、同時に彼の政治觀であり、いはば政治は人をして學問せしめる道であり、學問は自らをして政治せしめる道である。今日、政治觀念が大政翼賛の大道に復しつつある時、また教學一體觀の提示される時、この小楠の學政一體觀は、教育の日本的性格を探求するた

めに示唆するところが少くない。

なほ、この學政一體觀とともに注目すべきは、やはり越前藩のために起草した「文武一途之

説」である。これは「和漢古今儒者と武人と全く域を別にし人心の聰明で盡ざるの通弊を醒悟したる書なり」と云はれて、當時の偏武と偏文の弊風を排し、文武は一途でなければならぬ所以を述べたものである。修文練武の教育が主張される現代にも、また大いに傾聽さるべき論旨である。そして「學校問答」と同様の趣旨に立つて「道は體用本末文武一途に行はるるに非ざれば眞の道とは云ふ可からず」を基調としてゐる。一方には、「當今天下の勢を見るに太平殆ど三百年に垂として綱紀の陵夷民族の傾廢は申も愚かなれ士氣の衰弊に至りては我邦往古以來、今日より甚しきは之れ無く」と偏文の弊を指摘するとともに、また「一切學者を以て迂濶無用と押片付け専ら武の一途を以て國を起さんと欲する」の弊をも戒め、文武一途の道を説いてゐる。これはもとより小楠が當時の内外の情勢に即して主張したものであるが、教育の功利觀を排し、眞の學政一體の見地から文武兩全の説を立てたものであらう。

小楠の教學觀を知るには、なほ「士道」といふ論説もあるが、「文武一途の説」の實踐として進んで西洋の兵法を取入れ門生にこれを學ばせるやうになつた。これに關しては「陸兵問答」の書がある。

★「先生嘗て兵制は武器の發明に従つて變ずることを論じ、陸兵問答を著す。而して當今西洋の炮術火技の巧妙なるを聞けども未だ其の詳悉を得ず、是より先き藩の炮術家池邊啓太、長崎人高島秋帆（高敦と云町年寄なり）に従ひ蘭人に就て火術を研究す。幕府の大監察鳥井耀（林大學の實弟なり）が爲めに陥いられ幕府秋帆を囚ふるに及て池邊も亦江戸に拘致せらる、後鳥井譴責せられ秋帆免る、而して幕士を訓練し兵制を改むるに至り池邊も亦國に皈り、専ら西洋火術及練練等を以て藩士を教導す、然るに古流の炮術家及兵家者等相共に之れを誹謗し恰も敵視するが如し、獨り先生大に悦ぶ、門生をして池邊に就て火技兵法を學ばしむ、是より舊炮術家、兵家者等の學者は漢法醫輩相共に實學派を疾視すること益々甚し」（小傳）

ここにも亦、小楠は時勢の進運に關らず、昔流の陣形を墨守する軍學者の反省を促すために、「陸兵問答」を著し、西洋の兵器を輸入するとともにその隊形も一變せねばならぬ所以を明かにしたのであるが、當時まだ舊思想にとらはれた保守派からは、ますます實學派が非難されることとなつた。かうして小楠の思想は、單なる保守的な攘夷思想に止らず、次第に進歩的立場をとるやうになつた。

★「嘉永六年癸丑、米國使節水師提督波理軍艦を率ひて浦賀に來り國書を呈し、通信互市を乞ふ、天下騒然朝野を論ぜず、紛々鎖攘の説を争ふ、是より先き先生も亦云ふ、鎖國の令出て既に久し、民心之れに安んず、已むことを得ざれば開戦も辭せざる所なりと雖ども戦端を開くが如きは應答其の當を失ふに因る、故に其の應答の辭理精詳ならざるべからずと云々。時に幕府方さに窮迫水戸烈公を起して政事の大議に參せしむ、先生之れを聞き意見を述べて書を藤田東湖に贈る、藤田氏答書有り。

七年甲寅（六年癸丑の誤りか）九月魯國の使節、國書を携へて長崎に來る。幕吏川路某其の應接の爲めに來崎の事を聞き、川路嘗て先生と舊知あるを以て是容主に薦めて内使を命ず、十月下浣長崎に赴く小河一敏（豊後岡藩の人、素より先生を信ず、偶熊本に來る、依て相伴ふ後、先生斷然開國の論を明言するに至りて疎絶す）隨行す、然るに魯艦は再來の期を約して出港し川路西下せず、因て先生港尹水野某に面せんと請ふ、聽かず、乃ち已むを止す夷虜應接大意を著し、大要外人に對する義理禮節を失ふ可らず、鎖國は我國祖宗の意に非ず、今日の事開鎖共に正理公道を以て事に従ふべきを言ふ、其論正大堂々當る可らざるの勢有り、長崎港尹に因て川路に送致せん事を請ふ、港尹之れを受く、其送致せしや如何を知らず、是れ蓋し開國の

論を唱へんとするの端始なり。熊本に皈り再び藤田氏に贈る、藤田氏答へず。

先生の崎陽行中、長州吉田松陰、熊本に來る、先生に面接を得ざるを憾む、乃ち書を遺して去る、數千言、幾はくも無くして松陰洋行の志を達するを得ず、罪を幕府に獲たり、故に先生之れに答へず。

此年二月小川氏を娶る、明年家兄時明病没、嗣子幼なり、因て家を承け祿百五十石を襲受す。家益貧なり。

此時、先生既に粗宇内形勢の實況を察知す、曰く天地の氣運、萬國の大勢は人爲を以て私す可からざるなりと、蓋し其の識見の發する宇内の眞理公道と天下の大勢上とに因て斷然開國の論を唱ふるものなり、是れより門人交友の中、鎖攘に拘泥して往々分離する者有り、先生顧みず。

安政二年（月）居を城東沼山津村に移し閑居自ら樂む、依て沼山と號す。其の書齋を四時軒と云ふ、門生各土を擔ひ木を運び塾舎を建設す、沼山の居城を距る二里許、曠原を背にし大澤を面にす、山水清適、風光頗る佳なり、而して過客も亦稀少なり、或は釣を水畔に垂れ、或は筍を郊村に曳く。當世に意無き者の如く、優遊閑雅、以て日を竟ふ、此月、肥前の人田中虎六

來り、連日談話、深く先生の卓識に服す、目して涓濱の翁と云ふ（田中記する所の四時軒の文中に明かなり）虎六西洋大小銃砲の製造及兵制を説く稍詳明なり、又泰西各國の政治を辨する略其綱槩を得たり、先生甚だ喜ぶ、後、海國圖誌を得て之を読み、其平生蘊蓄する所を徴し、益自ら信す、時に勝義邦氏長崎に在て海軍術を修む、偶々先生の門生某、長崎に遊ぶ者あり、勝氏之れに自家意見の書を付して贈る、是勝氏先生と交るの始なり」（小傳）

「小楠遺稿」に收められた「小傳」の記事には、山崎博士も立證されたやうに、事實や年月などに多少の誤謬があるやうで、ここに引用した記事にも、例へば露國の使節が長崎に來たのを「七年甲寅」としたり、吉田松陰が小楠と三回も會見してゐるのを、面接せざるが如く書いたりしてゐるが、この時代に小楠が、いはゆる攘夷論者から開國論者へと進動して行つた道程はよく表現してゐるやうである。

何事に對しても積極的政策を持たず、ただ崩壊してゆく封建勢力の消極的な現状維持にのみ吸々たる徳川幕府の首脳部は、内には洋學者や海防論者の愛國の言論を斷壓して耳を借さず、外は和蘭の豫告に對しても何等の策を講じなかつた。かかる時にあたつて、嘉永六年六月の米艦四隻

を率ゐたペリーの浦賀來航は、まづたく驚天動地の大事件であり、今日の大東亞戰爭にまでの米英の脅迫的東亞侵略の第一歩であつた。思へば當時から彼等の日本に對する暴慢な恫喝外交には一步の前進もなかつた。もとより米國水師提督ペリーには、滅亡に瀕した徳川幕府の弱體外交などは眼中になかつた。もし要求を容れなければ江戸城を砲撃しよう、和を乞ふ時はこの白旗を立てて來いといふ強硬態度であつた。

ここに於て幕府は、狼狽の極、とにかく直答を延ばして一時を糊塗し、ペリーを浦賀から退去させたが、事の重大に幕府自らこれを處斷する自信がなく、前例をやぶつて、朝廷に奏上し、更に諸侯に對して「假令忌諱に觸候とも聊か心底を残さず十分に申聞らるべく」と意見上申させたのである。しかるに諸侯がこの時とばかり「聊かも心底を残さず」具申することとなれば、甲論乙駁、開港か攘夷か、却つて幕府の英斷を混亂させる結果となり、これに加へて、米艦退去の後、半月もたたぬうち、將軍家慶は薨去し、一ヶ月後には露國使節ブーチアチンが、やはり軍艦四隻を率ゐて長崎に入航して通商を迫つた。かくして幕府は浦賀と長崎の東西から二大強國の強硬要求をつきつけられ、しかも國論は、尊皇と佐幕、攘夷と開國、軟弱と強硬の兩端が入り亂れて歸一するところを知らない。

これに對して肥後藩の藩論ももとより微弱的なものであつた。しかし、幕府から意見上申の命を受けた肥後藩も、今は藩内の野にあると應にあるとの別なく、あらゆる知謀を集めて國家的立場から意見を具申すべきである。かかる天下の形勢の急變は、遂に既に家老の職を去つてゐた實學黨の巨頭たる米田是容の出馬を必要とするに至つた。どちらかと云へば肥後藩の意見は、微温的な御都合主義のものであつたので、米田は進んで藩主に對して憂國の上書を差出し、斷然、藩論を統一し、必戰攘夷の立場から、水戸齊昭を陣頭に立つて神州防禦の軍備を充實せよといふ意見を述べたが、これはもとより實學黨の意見である。今や肥後藩にも、實學黨、勤皇黨の活躍する時機となつた。かうして小楠その他の同志の運動と、それと相結んでゐた水戸派の運動によつて、今まで七年の長い間、野にあつて悠々自適してゐた米田是容は、肥後藩の浦賀警備の總帥に任ぜられ、嘉永六年十一月熊本を出發して江戸に向つたのである。

この米田の出陣を送つた元田永孚は、その威風堂々たる風貌を次のやうに描いてゐる。
「當時二百餘年來の承平、上下復兵戰あることを思はず。江府の往還皆輿に乗り裝を美にして揚々たる得色あり。今日始めて大夫（米田のこと）の軍行を見るに、兵士皆茅鞋を穿て長槍、帶刀或は弓矢を持し、銃器隊前後を擁して大夫は騎馬、勇氣中に沈みて滿面和氣あり。優にし

て且莊也、一藩の總帥として誰か其の右に出る者あらん。天下の會に列して肯て恥る所に非ずと感歎せざる者は之なきなり。大夫實學の忌嫉に罹りて身國政に預からざること七年、一藩俗吏の疎斥する所たりと雖も、一旦天下の事變起るに遇ふや君公の聰明忽に大夫を拔擢せらるる此の如し、至誠の天地を動かし公道の天下に享るゝ決して疑ふべからずして一時の通塞は雲霧の開閉するに異ならず、何ぞ之を患ふるに足らんや。」

ひとり米田の得意といふよりは、實學黨一派の再登場として會心の時局が來たのである。

かくて米田は米艦再來の直前、嘉永七年正月九日江戸に着き浦賀警備の任務を果し、五月七日江戸を出發して歸藩したが、その間、水戸齊昭、藤田東湖などと交つてこの天下未曾有の非常時に、大いに諸侯の間にその名を高めた。

しかるに、同じ實學黨の指導者であつたが、横井小楠は、米田と同じやうに天下國家のために活躍したにも關らず、どういふ理由か表面に浮び出る機會がなかつた。小楠が福井の吉田悌藏に送つた米田の出府を報じた書翰に「小生も出府之心得に御座候處さし障り勝にて、此節は留守罷在申候、賢丈如何に候哉、今に御出府申さずや」とあるは、少々失意の態でもある。

この當時、江戸でも小楠はじめ、荻、下津など實學黨の人々は、米田と同様、出府するやうになつてゐたと傳へられてゐるが、それがいづれも實行されなかつたのは、何か理由があつたであらう。

この時期は、中央には水戸齊昭が再登場し、従つて肥後では實學黨が輿を並べて進出すべき機運にあつた時であるが、しかし小楠にとつては必ずしも表面的には進出の機會とならなかつた。或はかつての酒失や、どこまでも小楠を危険視する藩の一部のものの策動によつたものかも知れない。

小楠にとつては、この時期が、まさに生涯に於ける最も大きな思想的轉換期となつた。「小傳」にもある通り、米艦渡來當時、小楠も實學黨の米田等と同様の攘夷論者であつた。即ち嘉永六年八月十五日、江戸にある藤田東湖に送つた書翰には、「天命人心尊藩に屬し、老公様（齊昭）御後見、眞に天下中の大機會到來仕り、何の悦か之に過ぎん、此時に於て列藩總て老公様の尊意を奉じ二百年太平因循の弊政を一時に挽回し鼓動作新大に士氣を振興し、江戸を必死の戦場と定め夷賊を齧粉に致し、我が神州の正氣を天地の間に明に示さずんばあるべからず、是今日大に馮河を用候の機會誰か疑を容べけんや、然ば小生輩一番に馳参り聊かの御力とも相成るべきの處、我

が國體是迄敬上の事共、何ともかとも言語に述べられ申さず候、俗論頑固有志者少しも動かされ申さず、眞に恥心限りなき事に御座候。夫故同志中津田山三郎と申すもの罷出、國體事情内實御相談仕り、小子輩念願の事共委細御聞取成下され度千々萬々願上奉り候」とあるに見ても、その強硬な論調をうかがひ知ることができる。これは、米田是容が藩主への上書の論旨と同じものである。

けれども、小楠は後には佐久間象山とともに、開國日本の兩眼球であると云はれたほどの進歩的な思想家であつて、彼が攘夷論者であつた時にもその底意は必ずしも鎖國的な攘夷論ではなかつた。前掲の東湖への手紙にもある通り、根本は國體觀にあり、國體への自覺を鼓吹するための攘夷論であつた。従つて「我が國體是迄敬上の事共何とも言語に述べられ申さず候、俗論頑固有志者少しも動かされ申さず」といふ現狀に於ける封建的な俗論の束縛を解放せねばならなかつた。

この天下國家の一大事にあつて、藩内に閉ぢ籠つてゐなければならぬ現狀を打破することの必要が、時局とともにますます明かになつて來た。小楠は自分の意見を述べる時に、明日になつたらどう變るかかわからないが、今日の意見はかうだといふことを附加へるのが常であつた。勝海舟はこれを非常に推服したと云ふことであるが、思想はただ變らぬといふだけでは堅實とは云は

れない。殊に國家的立場に立つて國論を指導するものは、その時代に何がもつとも國家の前進に有意義であるかといふことを第一義とせねばならない。いはゆる昨是今非といふことも、政治家や思想家にはゆるされなければならない。更にことが對外問題である時は、たとへば何年立つても、日露開戦論一本槍では、決して進歩的であるとは云はれない。

「小傳」にもある通り、小楠は早くからここに着眼し、「戦端を開くが如きは應答其當を失ふに因る、故に其應答の辭理精詳ならざる可らず」といふやうな意見を述べたが、後に、露艦が長崎に來航の時、「夷虜應接大意」を著して「小傳」のいはゆる、「其論正大堂々當る可からざるの勢」を示した。これは、憂國の志士にして進歩的な小楠の對外態度を述べ、しかもわが國體の本義を明かにしたものととして轉換期の思想動向を知るには、最も注目すべきものである。次にその全文を掲げて見よう。

夷虜應接大意

嘉永七年著

時ニ天下鎖攘ノ論紛々勞イ其止ル處ヲ知ラス、吏吏川路某魯國使節應接ノ爲メニ來崎ノ報有リ、先生川路ト舊知タルヲ以テ藩主内使ヲ命ス、先生因テ其所思ヲ談セント欲セシモ魯艦再

來ヲ期シテ出港シ川路モ亦來ラス、已ム事ヲ得ス、長崎客舎ニ於テ其綱概ヲ記シテ川路ニ贈リシモノナリ

我國の萬國に勝れ世界にて君子國と稱せらるるは天地の心を體し、仁義を重んずるを以て也、されは亞墨利加魯西亞の使節に應接するも、只天地仁義の大道を貫くの條理を得るに有り、此條理貫かざれば和すれば國體を損ひ戰は破れ、二ツのものの勢眞に顯然たるは更に又云に不及事也、凡我國の外夷に處するの國是たるや有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二ツ也、有道無道を分たす實現一切皆拒絶するは天地公共の實理に暗して、遂に信義を萬國に失ふに至るもの必然の理也。然るに其有道と云ふは唯我國に信義を失はざる國のみを言ふことにあらずして、自余の國に於るも又信義を守り侵狂暴雲の所行なく天地の心に背かざるの國を云ふことにして、此等の國ありて我に通信交易を望むに我是を絶て拒絶するの道理あるべきや。我祖宗此理を明らめ玉ひ唐・蘭の二國既に交易を許さると云へ共、萬國此理に暗くして、アメリカの書翰にも鎖國を以我國是の道也と述たるは全く我國是の大道を知らざる故也。只外國のみならず我邦人も又鎖國を以て國躰也とのみをもひ信義の萬國に貫くと貫さるとの天地仁義を宗とする國是の大道を知らざるよりして我の信義を失ひ彼が忿怒の心を起さしめ大に國躰を誤る

に到て、又如何んぞ是を救ふの術あるべきや。然ば今彼の渡米のさま通信通商の望を許さざれば、軍艦を以て來り迫るの由を述。且は妄に浦賀に乘入様々の無禮を働き一切我法度を守らざるの無禮無道を責、如此の國は痛く禁絶するの大法なる事を諭し聞せんに、彼國叩頭して是を陳謝し前非を改め通信通商を乞ふこと必然也。是朝に無禮をなし夕に改ると云へども、其實なくして其辭のみなるよしを以て又是を拒絶し、果して我信義に服し罪を改めんとならば從來其信義世界萬國に貫徹する時を待て通信通商を議せんとならば、彼何の言葉ありてか兵事を發ずることを得んや。是に於ても彼罪に不服強て兵事を起ときは彼曲我直、必死を以て戦わんに百勝既に顯然たり、何の懼るる事が是あらんや。魯西亞の陳する處未知と云へ共、察する處アメリカとは情を異にすべし。如何に異にするといへども是に容んに先我アメリカを拒絶するの大義理を述、若我を援けん杯との詞ありとも深く力を他國に借るの道あらざる事を論す時は、彼必其國の有道信義アメリカの類にあらざる事をのべて通信を乞ふべし、於是我又彼に答へんには我國既にアメリカに事有て彼或は軍艦を以て來らば痛く血戦し其罪惡を懲さんとするの時なり。然るに今魯西亞と通せば世界萬國我國を不勇と唱ん事必然の勢なり。是我國の深く恥る處なれば今に至りて通信通商共に許すべきの日にあらず、是を求めんとならば後年其時ありて是

を議する事あるべしと答んに、彼又其の辭ありて再陳する事あるべきや、凡天地の間は只是道理を以て論さんには夷狄禽獸といへども服せざる事不能也。今の世にあたり、外虜に接する事を談するもの大抵四等あり。我宴安に溺れ彼威強に屈し、和議を唱ふるものを最下等とす。鎖國の舊習に泥み、理非を分たず一切に外國を拒絶して必戦とするは宴安に溺るるの徒に増るといへども、天地自然の道理を不知して必敗を取るの徒也。又彼が無禮を惡み彼と戦んと欲すれども、我國貳百五十年の泰平に天下の士氣頹廢して皆驕兵たるを憂て、暫く屈して彼と和し其間暇を以て士氣を張り國を強して後彼と戦わんとのみ思ふは、彼是の國情を詳かにし利害の實を得たるに似たりと云へども、其實は天地の大義に暗きのみならず利害に於ても亦決して其見る處の如くなる事不能なり。廟堂假初にも彼と和する心ある時は天下の人心彌益惰弛に趣、士氣何れの日か振起すべき。器械に到りても決して整の日あるべからず、三令五申其益無きのみならず天下遂に瓦解土崩の勢をなす事必然なり。然れば今日に當りて必戦の計を決して幕府列國材傑の人を擧用るの道第一の緊要とす。其人擧る時は其政改り、天下の人心大義の百事を知り士氣一新するも瞬息の間に有て、今日の驕兵忽變じて精兵となる事猶手を復すに異ならず。戦の勝敗は炮熗器械のみにあらずして正義の天地と貫と不貫と人心の振と不振とにあり。況や

人心振時は器械砲煩も亦隨て實備するに於てをや。百夷千蠻何の恐れがあらん、是利害得失の見易きもの也。故に我は戰鬪必死を宗とし天地の大義を奉じて彼に應接するの道今日の一義にあらずや。我國毫も彼が強梁を恐れず大義を明かにして、彼を拒絶せば夷虜不戦して長服せざる事能はざる也。内を治め外を固くし軍艦守備を整へ或は通信通商のさまの事は別に論ずる旨ありて爰に混ぜず、今只彼に應接するの大義を述るのみ也。其述る所といへども偏に應接の大綱領にして其條目に到りては機に臨み變に應じ綱領を擴充して其節に當るは全く其人に有り。爰に於て應接の人材尤選ばざるべからず。夫天地有生の仁心を宗とする國は我も又是をいれ、不信不義の國は天地神明と共に是を威罰するの大義を海外萬國に示し、内天下の志氣を振起して器械砲艦漸を以全く備るに至りては萬國醜膚我正義に服従せざる事能はざるもの何の疑かあるべきぞや。聊鄙意を述て見る人に見せんと云ふ。

當時の小楠の思想はまだ開國論としては徹底的なものではなかつたけれども、「小傳」にある通りこれが小楠の「開國論を唱へんとするの端始」であつて、この頃から小楠の思想は攘夷から開港へと轉換して行つた。更に開港論への轉換過程にとつて注目すべきものに、安政元年九

月、越前の吉田東篁に與へたる書翰にあらはれた和戰論がある。それには、次のやうな一節がある。

「惣じて和と云ひ戰と云ひ遂に是一偏の見にて時に應じ勢に隨ひ其宜敷を得候道理が眞道理と奉存候。既に墨夷に和を許候へば英夷にも何にも許さねば成り不申候へば墨夷に許さるる時に一決するが戰之道理なり。最早墨夷に許し大計を誤たるなれば今日之勢必ず和を絶之論は事勢を不和と可申か。然れば墨英等之夷に處するは應接之人其人物を撰び道理之已れざる自然之筋を以て打明け咄合、聊たり共彼が無理成る筋は論破いたし、又聞へたるは又用ひ、信義を主として應接する時は彼又人也理に服せざる事不能、扱此上にも無理を申立なれば、不得已戰に及候に我義也彼不義也。決して萬國を敵に取るの道理無之、是我が道を四海に立る國是に決し候へば今日に至り和戰之二ツを争事とは存不申、定て、尊藩之思召此所に落着と奉存候、如何、拜聞仕度奉存候」

これも前の「夷虜應接大意」と同傾向のものではあるが、既に天下の大勢が、開國と決定せる上は事勢に應じて和戰の構が必要であると觀たものであらう。

この小楠の思想の轉換期には、小楠の一身上にもいろいろの変化があり、家族や友人との間にも離合があつた。そしてそれ等の一身上の変化はやはり思想傾向に關聯するものが多い。これよりさき長崎に露艦來航の頃、吉田松陰と三回も會見して、その後兩志士の交友はいよいよ深くなつたが、吉田松陰は尊皇開國論者たる佐久間象山の弟子であり、彼の長崎行も師の指導による海外脱出のためであつた。かうした世界に進取せんとする志士松陰との會見は、小楠の世界觀の方向を決定するのに無關係である筈はない。吉田松陰はまた小楠に逢はない時は、小楠の門弟、津田山三郎その他の實學派の人々や、勤皇黨の宮部鼎藏などと會見してゐるので、海外脱出の初志ははたさなかつたが、長州藩と肥後藩との勤皇志士の連繫には大きな役割を遂行した。後に松陰は小楠が長州へ來て藩士の勤皇心を鼓舞して貰ひたいといふやうな書翰を小楠等に寄せてゐる。

一身上の變化としては、松陰等と會見した嘉永六年の二月、小川ひさ子との結婚である。四五歳まで獨身を通して來た小楠が、僅か二十四才の若妻とめでたく新婚生活に入つたことは、またその思想の轉換に無關係とは云はれないであらう。しかも、その翌年七月には横井家の當主、兄時明が四十八歳をもつて病死し、嗣子はまだ僅十歳であつたので、小楠は順養子として家を繼ぐこととなつた。「小傳」に「祿百五十石を襲受す、家益貧なり」とあるやうに、多くの家族を

持つて貧弱な經濟生活を切りもりしなければならなくなつたのである。

かかる間にも小楠の對外思想は、宇宙の眞理公道と天下の大勢とを根據として本格的に開國論をとるやうになり、それがため「是より門人交友の中、鎖攘に拘泥して往々分離する者有り、先生顧みず」といふ境地にあつた。家庭的にも社會的にも、時勢の喧騒とは反對にむしろ孤獨の環境である。さうしてこれとともに、小楠にとつても最も大きな痛手は、二十年來の盟友、米田是容との絶交である。藩學時習館時代から一心同體ともいふべき、實學黨の双壁と呼ばれた米田と横井との分裂は、個人的な感情の對立激化もあつたであらうが、やはりその思想上、學問上の衝突であつて、實學黨そのものにとつても重大な危機である。しかし細川家三家老の一人で一萬五千石の米田と、僅かその百分の一の百五十石の横井とが、今まで盟友の關係を續けたことが、當時としては不思議な位であつた。その點からはやはり來るべきものが來たとも云ふべきであらう。二人が絶交した時、米田は、「あげつらふ學びの道はかはれども 心はおなし 君が世のため」といふ歌を小楠に送り、美しい友情をもつて、理論のために別れたのである。

また後に小楠が越前に行く時にも米田は次の二首を餞として送つた。
名に高き越のしら山峰も尾も赤き心に染めつくしてよ

中垣のへだてはあれとへだてなく、祈るは同じ道の行末

小楠もまた別れても米田のことを忘れることはできなかつた。小楠が安政六年、米田の物故を聞いた時は、さすがに二十年の盟友を追憶して悲歎にくれ、福井から熊本にある下津、萩の兩人にその心情を書き送つた。その中にかう述べてゐる。

「八月十日に候哉監物殿被致死去候段申參り誠に驚絶仕候。扱々人事不定吉凶變態總て意外に出申候。於御兩君別て御痛情之程奉察入候。小生事御案内之通り近年間違に相成候儀は唯々意見之相違にて其末は色々行き違に相成、時としては何やらん不平之心も起り候へ共於全體、舊相識之情態相替申候も無之、平生之心は依然たる舊交したはしき思を起し候事は於彼方も同然たるべきかと被存候。況哉千里之客居にて此凶事承り、不覺舊情滿懷いたし、是迄間違之事共總て消亡、唯々昔なつかしく、思はれざる心地に相成落涙感歎仕候。誰之歌にて候哉。

あるときはありのすさみにくかりきなくてぞ人は戀しかりける

心情御推察可被下候。本より絶交之事に候へば二ノ丸に弔詞申進候子細無之、御兩君迄心濟拜呈仕候。過ぎ去りし人は呼べども不可返、休也様へは別て御自愛專一に奉存候。」

絶交したとは云へかうした絶ちきれぬ友情のなかにあつた兩人が、斷然袂を別つた當時は、小楠にとつてもいかに大きな打撃であつたことであらう。

小楠は米田と絶交後、程なく熊本市外の沼山津に轉居した。この轉居は經濟的な理由もあつたが、米田との絶交もやはり一つの動機であつた。

それより號を沼山と稱し、その書齋を四時軒と名づけ、自然を友として風塵を避け「當世に意無き者の如く優遊閑雅以て日を竟ふ」といふ、逃避生活に入つた。この「四時軒」の名は「朝暮陰晴の迭に變じ烟雲雪月の奇を馳せ、鳴禽時に換り草木代る代る榮え、春夏秋冬四時の景見はりて乃ち盡く吾が一軒の内に呈せり。因りて吾が軒に題して四時軒と曰ふ」と「四時軒記」にある通りである。しかし、小楠が沼山津に移轉したのは決して世を捨てて隱遁したのではなかつた。時を得て天下に事をなさうといふ霸氣は失はず、思想的にもこの閑居時代が却つて飛躍期であり、俗論に超然として思ふさま天理の聲を聞いたのである。この安政二年から小楠の開國論は、いよいよ積極的となり世界的立場から皇國の前途を展望するやうになつた。これは沼山津への轉居によつて更に迫車をかけられた形であつた。

沼山津に轉居した翌月から、肥前の人田中虎六郎が時々、四時軒を訪問するやうになつた。こ

の田中虎六郎は佐賀藩士で藩學弘道館中にも屈指の人物であるが、進歩的な學者で舊來の學風に懐らず、進んで西洋文物を取り銃砲器械の新しい技術にも通じてゐたといふ、この田中が四時軒記の筆者であり、小楠とは二晝夜も續けて時事を論じたといふ程である。小傳によれば西洋各國の政治についても小楠は田中に學ぶ所があつたとある。田中はたしかに小楠の開國論への轉換に重要な役割を受持つた人物である。

またやはりこの安政二年に小楠は、米人ブリヂメンがシンガポールで著した萬國地理書の漢譯「海國圖誌」を得た。これも開國論への一步前進の機縁となつた。

當時の小楠の開國論について元田東野の記すところによれば、荻昌國は「開國の論は八十二斤の青龍刀、之を振ふ者は横井子の外有るべからず」と云つたといふことである。また元田の聞いた小楠の開國論は次のやうなものであつた。

「一日横井先生の説を聞くに開國の大見識にして天地宇内の道理國を開くに在りて外國風に見あり、其の經論措置早く茲に一定せば天下の衰を興して富國強兵、萬國の上に出んことを反すが如く、其設施先づ米國と交親するより始むべし。若し我を用ゐる者あらば先づ米國に至り誠信を投じて大に協議し以て財政の運用、殖産交易振興する所ある可し。殊に米國の開國

華盛頓なる者は常に世界の戰爭を止むるを以て志と爲す。今各國戰爭の慘憺實に生民の不幸之を聞くに忍びず。故に米國と協議して以て戰爭の害を除く可きなり。華盛頓は堯舜以來の聖人或は優る所あるとも知るべからず。近來の巴爾理士ハルリスが説く所も亦理あり。天下有志の論は外國の實に達せず皆生硬見なりと。」

これを読めば小楠の開國論は、あくまで開國論を天地宇内の道理の上に立て、そして積極的、進取的である。この點は、海外脱出を企圖した吉田松陰の志と同じく、急進的、實踐的で、荻昌國が「八十二斤の青龍刀」と評したのは適評であらう。

安政二年、小楠四十七歳といふ年は、彼の思想轉換期であつたが、この年はまた彼にとつて多事多難、不運の年でもあつた。

盟友米田との絶交も大きな打撃であつたが、十月二日の關東大震災のため彼が尊敬してゐた藤田東湖が壓死した。すると間もなく初孫のやうな長男が僅か三ヶ月ばかりで夭折しついで結婚後二年半の新妻ひさ子を失つた。小楠は亡妻の法要の時、門弟達に、「自分は結婚後妻に對しては人道の講義をなし、而して夫婦互に誓書を取交はしたるが、余の妻に與へたのは妻の遺骸に持た

せて九泉に送り、妻の余に與へたのは妻の死後酒に浸して之を呑んだ」と語つたといふ。かほどまでに熱愛した妻を失つた小楠が、いかに悲歎にくれたかは想像される。沼山津に移つたこの年はまさに不幸不運の連続であつた。

しかし、翌安政三年、小楠四十八歳には、門人矢島源助の妹つせ子(二十六歳)と再婚した。いつも「先生、先生」と呼んでゐて親子のやうな小楠の妻となつたつせ子は、妾といふ格で結婚式も擧げなかつたが、小楠の生涯の好伴侶として良妻賢母の名を全うした。やがて翌四年十一月には長男が生れ、沼山津の閑居にも好運が訪れるやうになつた。

第七章 賓 師

★「先生沼山に閑居すと雖も、名聲隠然朝野を動かし沼山の名天下に重し、而して越前春獄公最も先生を知る。四年其臣村田氏壽を遣して起居を問はしめ贈るに國歌一章を以てす。亦聘待の意を言ふ、先生起んと欲す。或は其二君に仕ふるの嫌有るを識る。先生笑つて曰く、今日の事豈此陋習に拘はる可んやと。翌年三月藩主の命を奉じて越前に赴く、時會き春獄公、幕府の

譴責を受け府下に籠居す、遠く命を藩地に傳へて待つに上賓の禮を以てし、班執政老職の上に在り、常に機務の顧問に當る。執政重臣以下藩士皆弟子の禮を執る、繼嗣茂昭侯亦先生を尊信す。

六年正月國に叛る。爾來由利氏、青山氏、其他諸子、交々沼山に來る。而して先生も亦是より屢々越前に來往す。越前の俗、形容を重んじ着實の風に乏し、故に表飾備具するも仁愛の實を缺くの病を免れず、施設も亦其憾無きこと能はず。先生到るに迫んで情勢頓に轉し一藩翕然として針路を着實に取り上下公平に向ふ。

文久元年正月、荻昌國、元田永孚等に與へし書あり。以て當時の事情を悉くせり。是時國是三論を議定す(中根雪江之を記す)曰く富國、曰く強兵、曰く士道、其富國論の大要は人生交易の理を擴めて、萬國通商の利を説き、遊民を減じて農工の業を振起するの道を辨し、天下公共の大道に從て開國の大謨を立るに在るを論ず。其強兵論の大要は銅鑛を開き鐵山を起し、其利を以て軍艦及器械を購入し以て海軍を興す可きを論ず、其士道論の大要は文武二致無きを論ず。是に於て越前の國是始めて定る。(小傳)

小楠四十七歳の時、沼山津に居を移した安政二年は、前に述べた通り、偶然にもあらゆる不幸不運を取り集めたやうな年であつたが、その翌年、矢島せつ子と結婚してからは漸く運命も好轉した観がある。その翌安政四年は長男時雄が生れて家庭生活にも新しい光がさしてきたやうに、小楠の一身にも曙光を見出した年である。

小楠が沼山津に閑居したのは、決して天下國家を忘れんがためではなかつた。いろいろな事情から熊本藩には重要な地位を得ず、殊に米田と絶交したため、暫く藩政の外に逃れてやがて來るべき時機を待つてゐたのである。沼山津の寓居の玄關には、孔明三顧の額を掲げてあつたが、これによつても小楠の志を知ることが出来る。この間に天下の開國の大勢もほぼ定まり、小楠の思想も百八十の轉換を遂げたのである。表面は閑居ではあるがその内面には、捲土重來に備へての新世界觀への飛躍があつた。

觀方によつては一身上に於ても、絶つべきものは絶ち、別れるべきものは別れた。新しい世界への飛躍には却つて身輕になつたとも云ひ得るであらう。そして三顧の使者は、遠く越前から來た。それが具體化したのは安政四年のことである。

安政元年の神奈川條約、つづいて安政二年には米國總領事ハリスに迫られて通商條約に調印、

その後は天下の形勢はいよいよ重大化するばかりであつて、幕府はもとより各藩とも、この渾沌たる政局をいかに指導すべきか、明日の道標をどこに置くべきかについて確たる見透しを持たなかつた。かかる重大時局下には、天下いたるところに、一世を指導すべき進歩的思想家をもとめて止まない。佐久間象山とともに開國日本の兩眼球といはれる横井小楠を、いつまでも、南陽の草廬に隱遁させるわけはなかつた。

かねてかかる指導者を物色してゐた越前藩主松平春嶽は、安政四年いよいよ小楠招聘の運動を起したのである。小楠と越前藩とはすでに、小楠堂に入塾した三寺三作等によつて結ばれ、數年前には遊歴中、小楠は二十日餘も福井に止まつて、越前藩の志士に面接し、或は春嶽公のために「學校問答録」を著すなど、決して一朝一夕の關係ではなかつた。なほ春嶽夫人は細川家の出であるといふやうな藩と藩とも近親の間柄でもあつた。

春嶽の小楠招聘もまた長い間の宿望であつたが、特に安政四年になつてこれが具體化した直接の動機は、その前年十二月末、小楠から越前の明道館訓導村田巳三郎に與へた書翰であつた。

村田巳三郎は名は氏壽といひ、福井藩に仕へて嘉永六年の米艦渡來には五十人の精銳を率ゐて銃砲隊の訓練に従ひ、米艦の再來には米艦探偵役を命ぜられ、安政三年に藩學明道館訓導の要職

に任せられたものである。

春嶽が小楠招聘の動機となつた書翰は、村田巳三郎が四年七月小楠に寄せたものへの返書であり、村田が後に記するところによると「春嶽公精圖治興學校修海備一切に邊警を憂ひ専ら國事に盡力せられしかば、達識俊豪の人を求め共に謀らんとせらるるに急なりき。公は前に先生を欣慕し玉ひしが、此書を一讀せらるるやこれ余が大に望む所なりと、遂に翌四年三月氏壽に命じ先生を招聘せらるるに及べたり。されば此書は偶然にも公と先生が尋常ならぬ知遇の媒介者と爲り、先生の名望も一層盛大に至りたりし」といふ歴史的書翰である。

この書翰はかなり長文のものであるが、その内容は、今日の國家非常時に處するには「前日の處置を以て議すべき事とも存じ申さず、今日は今日の所置大に之れある事に存じ奉り候」と述べてやはり皇國の大道に基き、西洋の進歩も東洋思想の根源たる聖人の道にしかず、當今の急務は堯舜孔子の大道を講明するのが第一であるといふにある。その一部を示すと次の通りである。

「今日に當りて尤以第一義と奉存候は此道之講明に有之、所願は上下人心此道を信じ、他岐旁蹊に迷ひ不申、愚夫愚婦之佛を信じ候程に相成候へば萬弊萬害憂に不足事に奉存候。然處我皇國是迄大道之教拂地無之、一國三教之形御座候へ共聖人之道は例の學者の弄びものと相

成、□□は全く荒唐無經此之條理無之、佛は愚夫愚婦を欺のみにして、其實は貴賤上下に通じ信心之大道聊以無之、一國を學全宗旨之國體にて候へば何を以て人心を一致せしめ治教を施し可申哉、方今第一義之可憂所は、萬弊百害何も扱置此所にて可有之候。惣じて西洋諸國之事情彼是に付て及吟味候へば、彼之天主教なるもの本より巨細之筋は知れ不申候へ共我天文之頃渡候吉支丹とは雲泥之相違にて、其宗意たる天意に本き彝倫を主とし扱教法を戒律と致し候。上は國主より下庶人に至る迄眞實に其戒律を採取いたし、政教一途にて行候教法と相開申候。大抵其學の法則は經義を講明するを第一とし、其國の法律を明辨し、其國之古今之事歴より天下萬國之事情物産を究、天文、地理、航海之術及海陸之戰法、器械之得失を講究し、天地間之知識を集合するを以て學術といたし候。魯西亞國を以て申候へば比達王申興より當時迄殆二百年餘に至り其邦内政令能行治平相續き申候。國王年中之三之二は邦内を巡見し民間と利害政事之得失を察し、供人僅八十人に不遇別段に行在所と申も無之、行懸りに官舎或は民屋に止宿いたし候て手輕事と承申候。其學校之法は一村の童男女より教を入、其内之俊秀を一郷之學に學、其より一郡其より一部々々よりペートルヒユルクの都城之大學校に入候由、當時學校生員一萬に餘り、政事何ぞ變動之事總て學校に下し衆諸一決之上にあらざれば決して

國王政官の所存にて行候義は相成不_レ申、將又執政大臣等要路之役人は又一國之公論にて黜陟いたし候由、是等之事總て其宗旨之戒律第一義と承申候。將又民に取之年貢は十之一分にて有_レ之、此外は聊も取り不_レ申、其故民間殷富いたし候、扱經濟之道は第一土地より掘出する金・銀・銅・鐵等之諸物、將又工職を集工作場を立其地々々之產物にて諸物を送り是以天下に交易致し、是等之利を以て國用と致し申候。是を要するに其政事全教法に本き來り候故上下人心趣向一致致し邦内を舉異論無_レ之由に承申候。是等の政事西洋諸國小異は有_レ之候へ共大抵皆同じ筋に相聞、魯西亞に次ではアメリカ新造之國にて別て盛大之由承り申候。(近代翻刻之海國圖志、アメリカ之部は其國志に因て著し候間余程明白に有_レ之候へ共、魯西亞拓は殊の外大略にて事情を得不_レ申事かと被_レ存候事。)魯西亞漢土に通じ候は康熙以前より之事に候へ共、夫迄は陸路之通信迄にて海路未だ開け不_レ申候故アジア洲中二宗旨有_レ之之聖人之道、佛氏之道と申迄にて未だ其道之全體は承知いたし不_レ申我寬政之頃より海路開、漢土、天竺杯に使節を遣し國體事情を察し、先天竺に遊學生を遣し數年留在せしめ其地之學問、政事之情實を見申候處、當時天竺はモゴル一統之政事衰廢致し一として見る所無_レ之、將又佛氏之學を研究致候へば其宗旨些之條理無_レ之誠に荒唐無經にして一切人道に關係致し不_レ申甚に驚駭いたし、如_レ此之宗

意にては其政事之道なきは當然と存候間、隨て漢土に遊學に遣し燕京に留在委細國體を見申候處、其折極乾隆之末年にて是又政道衰運に傾、進士及第擧も賄賂を以舉候位にて其政事之無道を驚申候。又學者之所_レ學は經書を見文詩を作候迄にて、其道たる何の趣意たる事不_レ相知、聖人之道とは箇様之筋にて候哉、全佛氏之道と人道に關係不_レ致は聊も相違無_レ之、アジアの二宗旨愚昧之甚しき、其故其國總て政道を失ひ世々内亂止不_レ申追々他國より取られ候も必竟人道之明なり不_レ申故にて深く痛心に存候由。其後尙又燕京に遊學に遣し(距今三十五六年前後之由)此度は專聖經を研究致し書經、詩經、論語之三部を其國之文字に翻譯致し國都に持歸、其大學校之詮議に懸け候處第一規模之廣大なる經綸之明齊なる修己治人政教一致なる所に深く驚駭致し、三千年之古如_レ此之明なる堯舜之聖德に於ては誠に奇異の思をなし、其奉る所之天主之教と全く符節を合候と論決致候。然所後世之漢人如何成故に如_レ此之大道之本意を誤り唯々書を読み文詩を作候を學問と心得候哉、後世治道衰廢人道亂候は全堯舜、孔子之大道を失ひ候故にて有_レ之候へば當今漢人深く此處を省察致し、無用之大學を相止三代の大道再び其土に明なるに於ては其國之中興掌を返すが如し、若又此大道を明にすること不_レ能して其私智に任じて國を治めんと欲せば是獸を海に獵し魚を山に漁に同じ何ぞ其愚昧之甚しきやと、右之經書

を開板し此趣向之序を致し漢土に送遣候處、林則徐杯取り傳深感致し候由。右之序中我聖人之道を彼が天主教と符節を合すると申候へ共此には大に論ずる旨も候へ共此節はさし置、先彼等が道は一國無_三貴賤、一統其道を奉じ實地に被_レ行宗門を以て治道と成し二に分れ不_レ申候へば、彼より日本漢土杯を見候ては序中に申候通り實に道なき國體に相違無_レ之、於_レ是深可_レ憂之第一は西洋通信次第に盛に相成、諸夷陸續入り來り候へば彼等教法政事自然と明に相知れ候に就ては、我邦人中聰明奇傑之人物是迄聖人之大道を知り不_レ申彼我道之得失盛衰の現實を見候ては不_レ知不_レ覺邪教に落入候は十年廿年之間には鏡に懸て見るが如し、佐久間修理杯は既に邪教に落入たるにて相分り申候。(修理は邪教を唱ふるにては無_レ之候へ共政事戦法一切西洋之道明なりと唱、聖人之道は獨り易の一部のみ道理あると云と承る。是彼邪教に落たるの實境なり)總て事之善惡共に世に行候は必ず人傑之唱へ立る故にて候へば三代之道明ならず三代之治に熟せる人は必ず西洋に流瀾するは必然の勢にて候へば、今日之大に憂所は何も擬置此道之外は無_三御座一事と奉_レ存候。」

小楠はよく西洋崇拜家のやうに云はれ勝ちであるが、彼が進歩的であり開國的であると云つても、それはどこまでもわが皇國の道に根本を置いたのであつて、それはこの書翰のなかにも明白に證明されるところである。この書翰の中で、佐久間象山を目して「既に邪教に落入たる」と評してゐるが、その評の適不適は別として彼がいかにいはゆる西洋崇拜家と趣を異にしてゐたか推察される。

この書翰によつていよいよ、小楠招聘を決意した春嶽は、その内意を小楠に傳へるため村田を九州に派遣することとした。村田は安政四年三月末福井を出發し、途中、京阪、中國の諸藩をも調査して五月熊本に入つた。村田が出發にあつて春嶽は、「愚かなるところにそそげひらけたる君が誠を春雨にして」といふ歌を書いた短冊を小楠にとて送つた。この一首の和歌によつても、春嶽が、小楠への待望のいかに深いものであつたかを知ることができる。

春嶽の重臣村田巳三郎が特使として熊本に遣はされたばかりでなく、越前藩の碩儒吉田東篁、柳河藩家老立花壹岐、その他、橋本左内、中根雪枝なども、盛んに小楠の出馬のために運動した。いふまでもなく三家につぐ天下の名藩、越前藩からの破格の招聘である。偉材郷間に容れられずといふのか、不遇をかこつてゐた小楠にとつては、まさに登龍の機會である。或は二君に仕へる嫌があるといふものもあつたが、そこは何事にも進歩的である小楠は、これを陋習として一

笑に附し、ただちに招聘を應諾して越前行きを決意した。

しかるに好事は魔多く、この小楠の越前行に對しては、肥後藩の猛烈な反對があつた。肥後藩としては、小楠を一種の危険人物であるとして自藩でさへも登用しないものを近親關係の越前藩に推薦することはできないといふのである。

當時、肥後藩の要職にある人達が、あらゆる手段をもつて小楠の越前行に反對したのは、小楠の人物を危険視し越前藩の將來のために反對するといふ表面の理由のほか、自藩で登用しない人物が、他藩に招聘された後、自藩のことを悪様に宣傳することはあるまいかといふ利己的な理由もあつた。さうして越前藩をしてその招聘の志を中止せしめるには小楠の人物を中傷するにしくはなしと思つてか、盛にいはいゆるデマを飛ばして小楠の飛躍を妨害した。やはり封建鎖國の陋習に囚はれた老廢層の妄動といふべきであらうか。

當時、肥後藩老臣達の意見は、次のやうなものであつた。

「横井平四郎儀越前守様より御所望之一條御不安心之筋被_レ爲_レ在、於_二御家老共_一も御同様に付、御斷被_二仰進_一夫にて被_レ爲_レ濟候得ば御宜被_レ爲_レ在候得共(略)此度福井表學問所御取立付て教官之思召にて御所望との儀に候得ば、往々御國家之御爲に可_二相成_一程之人體にも候はば折

角御貸被_レ遣候詮も可_レ有_レ之候處、平四郎儀素より夫程之見識可_レ有_レ之様も無_レ之第一學流之内には弊害を生じ候躰之儀も有_レ之、御政事筋に付ても不安意之筋有_レ之處より於_二國許_一すら選用不_レ仕人物強て御所望に被_レ應候儀は於_二御家老共_一御請難_二申上_一段申上、上にも御同様之、思召に被_レ爲_レ在候(略)」

また江戸にある肥後藩家老溝口藏人も小楠の招聘に反對したが、その小楠評は次のやうなものである。

「先達ても粗得_二御意_一候通、土臺の人物は安心難_レ致候得ども相應に才氣有_レ之、壯年之書生相集様々之論説いたし候内には、何れ致_二感激_一相信候之儀も有_レ之、夫等之處は先づ長所とも可_レ申哉。しかし其長所に付て大に弊害有_レ之、根元熊本には寶曆年間時習館と申學問所御取建に相成、御家中之面々日々致_二出席_一、其砌よりの學意致_二變化_一不_レ申様御代々專御世話有_レ之當時迄相貫居候事にて、倭漢之古聖賢且治亂興亡等經史に因り致_二講習_一之儀は勿論之事に候處、平四郎儀は別に一見を立候哉、門人時習館にも出席いたし不_レ申、土臺之學問は山崎家と唱候様子に候得ども實學抔とも申、純粹之山崎家とは相見不_レ申、兎角何事も當今之有様に引付、乍_レ恐將軍家はケ様、列侯列藩之内何方にてはケ様、自國之政事人物ケ様と申形にて相倡候處より

門下之諸生自然と黨を結候様成行、其末先は子共喧嘩とも可_レ申候得共、右學意之論より昨年大勢及_二争鬪_一其内刃傷にもいたり、且又長岡監物とは無_二之莫逆_一に候處學意之譯より近來は致_二義絶_一候由にて極々速々敷、當時は在中に引籠門人と申候ても昨年の争論よりは段々相減候由。先は車中之者程にて稀に旅生杯も參候間。右之通之人物にて是まで熊本にてさへ御選用無_レ之候を、御頼談とは乍_レ申其儘御貸被_レ進、追て重疊御迷惑之筋にも至候ては御間柄別て難_二相濟_一、止を不_レ得御斷に相成候由。(略)

しかしこれらの中傷的な招聘妨害運動は、越前侯の小楠に對する待望を高めこそすれ、決して斷念させることはできなかつた。のみならず、かうした肥後藩の拒絕理由は、松平侯にとつては却つて再び懇望の好條件とさへなつた。即ち越前藩主春嶽より肥後藩主細川齊護に與へた再び熱願の書翰は次のやうに、條理をつくして如何にしても拒絕することのできない到れり盡せりのものである。

「陳啓、扱て其御家來横井平四郎儀弊國學館子弟輩教訓筋世話相頼度に付、來冬迄拜借之儀先鴻以_二野廣_一及_二懇願_一候處、逐一承知被_レ下速に御許容被_レ下候筈に候得共、同人事は教官の場に至り兼候故、尙又厚御家老共へも評議被_二仰付_一候處是以同様之趣申上、折角弊國へ罷越候ても

用に相立不_レ申御見込者を被_レ遣候ては重疊御不本意に付不_レ得_レ止御斷之趣被_レ仰下、猶又奥へも被_レ遣候御書面も拜見、藏人も屋敷へ罷出錦地巨細之事情申達是亦委縷承知、段々不_二一通_一御評議有_レ之御厚志之至千萬奉_二感謝_一候。右様事を分け被_二仰下_一候儀を押て及_二再願_一候も如何に候得共、當今弊國學館生員先達て呈書之折よりは余程相増、教官盡繁劇に堪兼、其上是迄教授申付候高野半右衛門儀古稀餘之高年にて迎も勤續出來兼候段頻に申立候に付、右平四郎儀も必御許容是非北行可_二相成_一儀と相心得、半右衛門先達て遂に願に任せ隠居申付候。爾來は兼て乏敷教職に候得ば彌増繁務に候得共、平四郎北行而已を心樂みに待居候折柄、御斷之趣段々無_二御據_一義とは乍_レ申當惑之次第、國許家老共へも申越候處愕然失望之至、且館中子弟迄も、平四郎拜借之儀略傳承相待居候趣に候處、今般之義是切に相成候ては教訓之世話行届兼候は勿論、自ら子弟輩嗜方も薄く相成館中之衰微國家之基業に關り、至重之儀と憂勞之至に御座候、今度無_レ據御斷且御垂示之趣致_二承知_一候ては最早此上に強て可_二相願_一筋も無_レ之哉には候得共、前顯之通弊國にても實に無_レ據次第何分此儘相止候ては不_二相濟_一譯柄に付、被_二仰下_一候旨趣は篤と相心得居候條、平四郎儀御借し被_レ下候ても學館子弟之引立方而已委任仕候積にて、學政向之儀は總教之家老共始夫々役人共爲_二取懸_一置候事故決て朋黨分れ學論致_二蜂起_一候様之儀には

至り不_レ申、此儀は小子始惣教邊にて深く相心得見も有_レ之事に御座候。其上にも萬々一御懸念之筋へも可_二相運_一兆候も有_レ之候得ば其儀は兼て十分心得居候得ば、未發之處にて平四郎の職務如何様にも一轉仕候て其筋へ關係不_レ仕様之所置も萬々有_レ之、其折能及_二返上_一候得ば自然教職之見込致_二相違_一候ても、平四郎令名を墜候様之儀にて決て及せ申間敷、尤國家之妨害可_二相成_一候様には可_二相運_一様も無_レ之候得ば此邊之儀は小子へ爲_二御任_一御降心可_レ被_下候。何卒素願之趣御聞届被_下候様伏て奉_レ希候。且又平四郎在留之爲學館近邊士屋一軒爲_レ明待受之支度迄も相調候位故、今と相成無_二御據_一譯とは乍_レ申御斷にて願意不_二相違_一候ては、卒爾に相願候小子之不明も相著れ殆迷惑之次第、前書之通り關係も不_レ輕候間右等之邊野子心中御亮察被_下、申上兼候得共猶又御再考被_下平四郎北行之儀御許容之程一向に相願候。則先日白金へ參上之節世子君へも委曲御咄申候。定て被_二御越_一御承知と存候。右は再應勝手ケ間敷自由之議相願候哉に御承知も可_レ有_レ之かに候得共實に不_レ得_レ止事情に候間、渴望之願意幾重にも御汲察被_下、枉て御容諾偏奉_二伏希_一候。右御願如_レ斯に御座候。謹言。

十二月廿五日

越中守様御直披

越前守

水も洩さぬ修理をつくした春獄のこの書翰には、遂に肥後藩主も拒絶するによしなく、安政五年三月十七日、いよいよ小楠招聘を承諾する旨越前藩に通告したのである。もとより事をこまきで漕ぎつけさせるためには、越前藩の参政中根雪江や、橋本左内などの内面的な運動があつたが、それにしてもこの書翰を読むもの、一城の主たるものが、教學振興のために、いかに熱意をこめて師を求めてゐたかを知ることが出来るであらう。人は口を開けば、現代の教育の進歩を云々するけれども、現代にはたしてかくの如く、教育に於ける師の重要性を認識し、師を求めるために一城を傾けるほどの苦心を拂ふものがあるであらうか。小楠の越前に於ける教育は、その出發點に於てすでに半ば成功してゐるのだ。かくの如き熱望に迎へられてこそ、眞に人間鍊成の教育ができるのである。小楠がいよいよ赴任するといふ報を得た越前藩の得意はさこそと思はれる。越前藩が小楠招聘の運動を起してから丸一ヶ年がかりの難問題がここに解決したのである。當時、中根雪江が京都にある橋本左内に送つた手紙には、「ケ様にもろくは參るまじくと存じ候

處思ひの外速に御承引」とか、「付釣に大鯰かかり候心地にて御國表へも早速可ニ申遣こと奉存候」とか、述べて同志の衷情を披瀝してゐる。

沼山津の閑居にあつて、慌しい内外の風雲を観察してゐた小楠にも、再びめぐり来る好機、かつて青年秀才として江戸遊學に出發した時のやうに、またしても郷間の羨望に送られて、福井三十二萬石、大藩の賓師として北行する日がきた。安政五年三月中旬のことである。門下生河瀬典次、安嶋一平を連れて熊本を出發、柳河で、更に門下生池邊龜三郎を伴ひ、海路をとつて福井に向つた。大阪から京都に入り、京都の越前邸で數日間滞在したが、京都では、鶴首して小楠の上洛を待つてゐた橋本左内に會見した。

小楠がかつて遊歷の途次、大阪で會見した七年前の左内は、まだ十八歳の青年であつたが、今はすでに二十五歳の青年志士となり、天下國家のために活躍してゐた。いふまでもなく左内は越前藩きつての進歩的志士である。激烈な攘夷論者であつた藩主春嶽をして開國論者たらしめたのも、彼の進言によるものであつた。左内は二十一、三歳にしてすでに「西洋事情書」「外國貿易說」などを書いて居り、はやくから大阪や江戸にあつて蘭學、論學、兵學などを學んでゐたので、開國論者としては、むしろ象山や小楠よりも進歩的であつた。しかし左内は西洋の文物は進

取すべきであるが、決してそれを主とするものではなく、わが建國以來の傳統たる忠義の精神と尙武の氣象とを根本にすべきことを主張した進歩的日本主義者であつた。さうして藩學明道館の蘭學科掛から幹事となり、更に洋學習學所を新設するなど、藩學のために盡力した。またあまり財政もゆたかではなかつた越前藩が、兵器や火藥の製造など驚異的な成績をあげ、小楠の招かれた安政五年には職工一千二百人を使役して約七千餘挺の銃砲を製造するまでに發展させたのもまた左内のやうな傑物があつたからである。要するに多くの青年人材を擢用して藩政に參與させ開國進取の藩是を確立した藩主の人格の然らしめるところであるが、藩主と小楠との思想的共鳴を中繼したものは橋本左内であつた。この小楠を京都に迎へた左内の歡びは想像にあまりがある。夜を徹して國家の前途を談じたことであらう。しかし當時の小楠は、蘭學修業のため大阪にあつたかつての書生ではなく、藩主の命を受け桃井亮太郎の變名をとつて重大國事に暗躍してゐたのである。當時、京都には日米假通商條約の勅許を仰ぐため老中首席堀田正睦が上洛中であつたが、左内はこの勅許問題とともに一橋慶喜擁立の運動に奔走してゐた。そしてその計畫が着々功を奏し今一息のところでは奸臣のために妨げられ恨をのんで退京せざるを得なくなつた。左内が小楠と會見したのは、その退京直前の危機であり、四月三日、小楠は福井へ、左内は江戸へと發足

した。しかも左内は江戸に歸ると幕吏に捕はれて謹慎の身となり、翌安政六年十月にはいはゆる大獄にあつて刑場の露と消えたので、小楠とは京都の會見が最後であつた。そこにはまた小楠の福井行きが、かならずしも順調ならざるもののあるのを暗示してゐるやうである。

殊に、福井の藩士のなかにも、小楠招聘に反對のものもあり、不穩の行動さへ懸念されたが、かかる際、これを把へつけるには橋本左内の手腕に待つところが多く、今後、藩學や藩政の振興についても左内と小楠とは車の兩輪にも譬へらるべきものであつた。

すべての事が順調に進めば、藩主もこの年は歸國することになつて居たが、幕府からの國家の重大時であるからとて滯府を命ぜられ、やがて左内は謹慎の身となつたのである。

しかし、小楠の福井入りは、案外順調に進んだ。途中、村田巳三郎、吉田東篁などに迎へられて、熊本出發以來一ヶ月、四月七日福井城下に入つた。その颯爽たる風格は藩内各方面の好評を博し不平分子まで好感を以て迎へ、その後の講學振りも極めて謹直勵精であつたため忽ち藩中の心服するところとなつた。小楠はもとより、小楠招聘のために盡力した藩士や、更に郷里沼山津にある老母をはじめ熊本の下生まで、この福井入り後の小楠の順境は、何よりも大きな喜びであつた。しかし、更に更に小楠を喜ばせたのは、四月二十五日の飛脚便によつてもたらされた江

戸にある藩主春嶽からの直書であつた。

「短箋陳啓、先以賢師勳定戩殺忻慰不斜、然ば過日於京師屋敷左内面晤之由、其節持論之趣逐一左内歸東之上承之彌増加景仰、福城御卸鞍後定て書生輩頻に訪問冗勞之義と奉致想像候。元來封中學流固陋狹隘之習氣有之人材生育之路壅鋼いたし居、何分にも今後賢者之力に頼右宿弊所掃蕩深企望之事に候。抑風化之根元は小子一身に止り居、殊更方此澆世光明正大之至道を推明致度懇願に候へば第一於我詳明可講究は實に緊要之義、殊に不肖之學無師傳未レ知適從候へば賢達之啓沃誘導を偏俟候情願魚水に俾しく、不遠歸封接聲款可預明教中心喜悅之處、今般滯府被命心算齟齬遺憾不替候。依之速に賢者之東行を乞旦暮親灸卓論承度存候得共、此儀は無據嫌疑も有之候に付斷決致兼候。尙再三熟慮之上他日再所懷陳告可申上候。時々鴻鯉不疎新得遙授御頼申候。遙望北雲不堪欽慕之至候。時下迎梅自珍懇禱、書不盡意早々擱筆。不具。

一城の主たる藩主であつてかくも師に對して禮を盡したものは恐らく古今を通じて稀なものであらう。「北雲を遊望して欽慕之至に堪えず」とは單なる形式的な儀禮から出た言葉ではなく、地位や格式を超越した眞實の美辭であり、また難局日本の針路を探索せんとする精神の共鳴から生れた言葉であつた。この心境は小楠が常に老いざる青年教師であり、また春獄が常に將來に大きく生きんとする青年大名であることを物語るもの、今日の知事と師範學校長や中學校長との間が多くは徒に形式的、格式的な關係と思ひ較べるときはまさに雲泥の差といふべきであらう。知事に縣下の學校長を自ら師と仰ぐ位の熱情がなければ、眞に皇民鍊成の教育はできないのである。教育に於ける同志となつて、はじめてその地方の教育は進動する。かかる熱情に觸れてこそ小楠も、まさに生命を賭して福井藩の教育のため盡すべき決意を倍化したのである。かくして藩主は小楠に面接の日を待ち、小楠は藩主の歸藩の一日も早かれと祈つたであらう。

しかし、意外な事件の突發によつて、その待望は遮斷された。それは春獄が幕府から隱居謹慎を命ぜられたことである。この飛報は七月十五日國許に達し、越前藩をして驚倒せしめた。

かねて開港條約の違勅調印や將軍繼嗣の問題について意見を異にしてゐた水戸の齊昭、慶福父子、尾張の慶恕、そして越前の春獄は、六月二十四日突如、幕府問責のため不時登城に及んだ。

勿論、將軍家定への謁見はできなかつたが大老や老中に逢ひ、勅許を待たずして條約調印の罪を責め、慶喜繼嗣のことを述べ、同時に齊昭は春獄を老中にと推舉した。しかし大老井伊直弼は悉くこの改革意見を退け、七月五日には將軍の命を以て、齊昭、慶恕、春獄には隱居謹慎して邸内に執居させ、一橋、水戸の兩侯は登城停止となつたのである。

この突發事件のために、藩中の驚愕はいふまでもないが、小楠もこれがため一時は去就に迷つた。しかし藩に對して春獄からも、輕擧を誡めてきてゐるし、藩の重臣の希望もあつたので、小楠は、藩内の人心不安を鎮めるために福井藩に留まることとなつた。しかし、この形勢では春獄の歸國も何時になるかもわからないので、春獄の需めに應じて寫眞をとつて江戸へ贈つた。しかるにまたも熊本にある弟永嶺仁十郎の計報に接したので、十月末遂に歸國を願ひ出、十二月中旬再聘を條件として歸郷することとなつた。そして安政六年正月三日、懐しの沼山津に歸つた。

この歸郷を待つてゐた元田永孚が三日二晩に亘つて小楠の土産話を聞き、この大要を記したものに「北越土産」がある。これによつて、福井に於ける小楠の生活の様様を知ることができる。次にその一部を掲げて見よう。

北越土産

一、今度詰中措置之次第は此元にて是迄講習之通りに聊相違致し候儀無之、唯致し講習候儀を實地に體驗致候事にて、其實驗之上には聊會得致し候儀有之、是を此節之土産と存候との事に御座候。惣じて識見も第二之事にて、天下之事は唯徳の一つに歸着致し候段明白に實驗致し候由。其徳と云は心中一點之私を不_レ容公平和順にして能人之情を盡_スに有_レ之候事にて、此徳あれば此道行れ、此徳なければ此道塞がり申候事、其感應實に影響のごとし、一日克己復禮天下歸_ニ于仁_一と申事初て歴然と相分申候故、詰中千差萬別之措置只此心術の一つを苦心會得致候との事に御座候て、其實驗之模様辭氣之上に顯れ、實に上達之様子相見へ玉位之才と益感服仕候事に御座候。

一、天地間之理惣て無用の中に寓し申候と覺へ申候由。有用と存候より早や功名之一念胸中に生じ候て、人情を盡し不_レ申理の自在を得不_レ申候。左候へば町人には町之事を問、在中之者は在之事を問など、惣て有用と思ふ心より其心内に有_レ之候へば所向之人其情を盡し得不_レ申物に御座候。唯我に一念なく、人々之所_レ欲_レ言之言を盡さしめて其内に開發之機有_レ之候處より話合候へば開き申ものに有_レ之候との事にて、能人情を盡し申たる體驗之迹と相見へ申候。

一、詰中一度も論談に亘り候儀無之、唯々熟談にて相濟候由。惣じて論談に亘り候儀は己が功名之私心冥々之中に有_レ之候故終に論談に及び候ものにて、一度論談に亘り候ては天地間の道決して被_レ行申ものに無_レ之處得と致_ニ了解_一候由に御座候。長谷部甚平杯彼國第一之人才にて、才力敏銳論談壓_レ人中々六ヶ敷男に御座候處一度も論談に及不_レ申、毎度異論申述候節は取合不_レ申、直に酒など振舞候て其説には同意出來兼候に付先酒など飽候へと申て雑談に轉じ、再三左様に致し候へば毎々甚平より了簡を替へ候て参り候故、其上にて同意致候話合調候由に御座候。

一、君子俗流之辨別一切致し不_レ申、双方共話合にて其人々々其筋々々に其情を盡し申候由。俗流よりは初めの程は追々落業杯も致し候由に御座候へ共聊片乘致し不_レ申、公平に其話合を聽き候故、後には人心一致いたし候由に御座候。

一、江戸變故已前は越前一國之順境にて同子には逆境に有_レ之、變故已後は越前之逆境にて同子之順境に有_レ之候由。變故已前は人心之歸向未だ一定致さず候故、實に千辛萬苦居多之心性を苦しめ候由之處、變故後斷然として處_レ之而不_レ疑、人心之歸向初て一致致し候由に御座候。右に付今度歸着之様子も天下に於て一毫不足之意思相見へ不_レ申感服仕候。

一、初め越前町、在之様子を致見聞候處、君德にて感向致し居候て政令には歸服致し不申由にて、全く文武節儉之風習より徳政二つに相分れ候源本を早く見抜き申候故、第一此根本より手を付話合候て弊政一二條改り申候由。夫より徳政一致に運び候て町、在共に難有がり、人心益歸向致し候由に御座候。

一、江戸出府無之儀深き思慮有之候ての事に御座候由。江戸大變之儀もはや六月前に同子は一見致し居候故、迎も同子之力にては救ひ留め難成勢に御座候に付、東行は初めより辭し申候由。當時天下之勢と云、越公之御様子と云、其上橋本左内少年之人材帷幄に在て順風を得候へば、却て同子に相抗する勢にて迎も眞之君臣合躰難成機微を眞知いたし候故、東行には意を絶申候由。岩瀬肥後なども種々建議も有之候て強て呼登せの手段も付候由に付、此間には實に甚敷苦心にて、萬一岩瀬周旋も行れ候様に相成候て龍ノ口よりの下命も有之候節は、早速心疾を構え西歸之覺悟致し居候由之處、無程大變却にて相止み申候由に御座候。

一、變故前後江戸之往返時事之變轉誠に無限事にて實に踏薄氷之思をなし、前後三十日程は晝夜眠を著申候事無之由。江戸への取遣初めは書通にて有之候處、江戸之着申候節はもはや事情打替り居候様に有之候に付人使に相成候へ共、夫にても間違候に付後は江戸、國許は國

許限りにて取計ひ、双方より一切異議申まじくと相談に相成候由。其節之話に人才甚難き事にて、一度之變に應じ候迄之人才は有之候へ共、再度之變に應じ候人才は難得と申候て嘆息致し候事に御座候。

一、彼許にて集義和書之會讀力を得申候由。論語之會讀首章より三省之章迄發明之説も承り申候。大要には和順底之道理と申すに深き意味合甚だ明かに聞へ申候。此節全く仁之意思に餘程得力相見へ、言々活潑致候事に御座候。

一、修身之様子餘程地歩を占め候模様相見へ申候。彼許にては一言も出せば忽一國天下に係り候故實に戦々兢々之形に相成候由に御座候。非常の招命に應じ候て非常の變亂に逢候事に、其砌は實に心性を苦め候てため意氣衝き候時も有之、或は一杯を把てほほ笑み致し候節も有之候由に御座候。右に付餘程心徳之修行に相成候て一階之上達と見及申候儀に御座候。

一、酒は一切大酒不致、少しく飲過候へば慟悸にさし障候由にて寢酒一二杯迄に相成候由。しかし此節一ヶ年振りの出會にて三日之間は餘程之快飲にて御賢察可被成候。

一、容貌は少しく肉合減じ候方にて老て見へ申候へ共、肥太りよりも却て相應と大慶仕候。元氣は彌宜敷相見へ候。

小楠は安政六年四月下旬、再び約束通り、福井に向つたが、そこには不在中に處断すべき數々の問題が、小楠の歸りを待つてゐたので、「唯々晝夜寸暇無御座誠にも多用多客にて困入候」といふ状態であつた。そして再度の福井行で注目すべきは、小楠が單に教學の師としてのみではなく、これからは、いはゆる實學精神に立脚して、殖産貿易の振興策に盡力したことである。この小楠の經濟策を實行したものが愛弟子、三岡石五郎（由利公正）であつた。三岡は小楠が熊本に歸る時も隨行して長崎にゆき、海外貿易の實情を視察してゐるが、福井へ歸つた後、藩當局に説いて切手を發行し、いよいよ封建經濟の行詰りを打開するため、他藩に率先して外國貿易を開始した。これがため藩の財政は俄に豊富となり、三年目には藩には正貨五十萬兩も貯蓄するに至つた。これはもとより三岡の財政的手腕と實行力によるものではあるが、やはり小楠の指導宜しきを得た結果である。

しかし、安政六年は、小楠にとつて再びめぐつてきた不幸の年であり、米田是容の病死、橋本左内の刑死、ついで十二月には郷里にある老母の病氣危篤の急報に接した。急ぎ歸郷してみればすでに母は逝去のあとであつた。小楠が歸郷の後、越前藩からは、肥後藩に對して、三度小楠招聘の願ひがあつたので、翌年三月、母の葬式その他の後始末が終ると福井に向つた。これからは

新藩主茂昭が前藩主同様、小楠を賓師として更に福井藩の教育、文化、經濟の振興に盡すこととなつた。此度もやはり「唯々日夜多用の上來客およびただしく中々困入申候」といふ繁忙であつたが、當時、藩内には保守、進歩の兩黨が反目して藩政の統制が困難であるのに着眼し、藩の主義方針を明かにするため、富國、強兵、士道の「國是三論」を説いた。

「小楠遺稿」の「國是三論」の註には「先生越前に在るの日、一藩の上下大に爲さんとするの志有て着眼一定ならず、故に廣く執政諸有司を會し大綱三事に在る事を議定し、以て一藩の國是とし中根雪江をして其旨趣を記せしめたるものなり」とある。

まづ「富國論」に於ては、開國の害と鎖國の害とを説いた後、「天地の氣運と萬國の形勢は人爲を以て稱する事を得されば日本一國の私を以て鎖閉する事は勿論、たとひ交易を開きても鎖國の見を以て開く故、開閉共に形の如き弊害ありて長久の安全を得がたし、されば天地の氣運に乗し萬國の事情に隨ひ、公共の道を以て天下を経論せば萬方無碍にして今日の憂る所は惣て憂るに足らざるに至るべきなり」と方今の經濟の大道を述べ、「萬國を説談するの器量ありて始めて日本國を治むべく日本國を統攝する器量有て始めて一國を治むべく、一國を管轄する器量ありて、一職を治むべきは道理の當然なり。」との見地から「方今交易の道開けたれば外國を目的として信

を守り義を固して通商の利を興し財用を通せば君仁政を施す事を得て臣民賊たる事を免るべし」と説き、士民の別なく徒食の徒なからしめ、「今や民間に無量多數の生産あり共是を海外に運輸すれば價を減ぜず且壅滯の憂なし、されば勉めて産を制するが爲に民を富し産を生ずるによつて國を富し士を富すべし」とし「官府此利を私することなし、公に衆に示し悉く是を散して救恤し其他出て反らざるの所用に給す、仍之利を得る事多ければ所用益足るべし」と開國貿易の大方針と具體策を示してゐる。そして「通商交易の事は近年外國より申立たる故俗人は是より始りたる如く心得れども決して左にあらず、素より外國との通商は交易の大なるものなれ共其道は天地間固有の定理にして彼人を治る者は人に食はれ人を食ふ者は人に治らるといへるも則交易の道にて政事といへるも別事ならず」と述べ、萬國の有無相通するは三代の治教に符合するとし、「今や天徳に則り聖教に據り萬國の情狀を察し、我用厚生大に經倫の道を開いて政教を一新し富國強兵、偏に外國の侮を禦んと欲す、敢て洋風を尙ふにあらず、聞く人其の原頭を愆り譯る事なかれ」と結んで、日本的立場からの開國論であり、倫理的な經濟觀であることを強調してゐる。小楠の教育觀は、たんに教育學の研究から生れたものではなく、實にかかる經濟觀と一體として生れたものであることに注目すべきである。

國是三論の二は「強兵論」である。小楠の云ふ強兵とは舊式の兵法學者の如き我が國個有の短兵接戦に固執するものではなく、ひろく世界の大勢に活眼を開いての海軍強兵論である。「日本孤島の防守は海軍に過ぎたる強兵はなし」と斷じ、英、魯、佛等歐洲諸國のアジア侵略の實情を述べ「海外の形勢、如此此日新月盛なるに日本獨り太平の安を偷んで驕兵を驅て兒戯に等しき練を事とするとも何ぞ敵愾の用をかなすべき、海軍を捨て防禦の策なき所以なり」といふ。しかし幕府の命に據らねば海軍を興すことはできないから、「先づ士分の分當勤は勿論、子弟の航海に志あるものには其才によつて多少の月俸を興へ衣食の急を免かれしめ海濱に居住せしめ、初めは手寄能き漁船に乗て獵業をなし、或は商船に乗組で他國に航し海上の風波に馴しむべし」といひ「士人常に他邦に往來して見聞を廣め襟懷を宏にし或は颱風怒濤に逢ひ一船心力を合せて、相救ふの艱險に習ひ勇義自ら奮發して海を視ること平地の如くなるに到らば、幕府新令の日を待て必海軍の用に供すべきなり」と述べてゐるのは卓見である。次には武士道を實事に練磨するは海軍より善きはなく「凡人は貴賤賢愚によらず一心決定して動かざるより強きはなし、即ち志の奪ふべからざるものや、人必死の地に入れば心必決す、古の兵を善くする者舟を沈め水を背にす、皆是必死の地に置きて必勝の策を定るなり」として「驕兵をして強兵と變ずるも亦海軍に如くべか

らす」と述べ、幕府が今に航海を開くであらうから列藩に先んじて人を海外に派し志氣を奮勵せしめねばならぬといふのである。この小楠の海軍強兵論は、大東亞戦争下の今日、更にわれわれを鞭つものがある。今、その中から、「外國の形勢聞くが如くなれば此時に當つて、日本國の所置は如何すべきや」に對する答として記された一節を次に擧げてみよう。

「日本は亞細亞に屬する東海中の一孤島なること猶英吉利の歐羅巴に於けるが如し、其國の環海險惡、且颶風暴發の恐れあつて、航海頗る艱險なる故、自ら外寇の侵襲を免れ四國九州を分つて運輸を便にし物産を富足し外國に求ずして缺ることなし、造化の主宰何の好意を以て如是なる善美の邦域を造り日本人何の幸あつて如此樂國に生ずるやと魯西亞の堅布爾が鎖國論に讚美せるが如し、天險自然の國勢にして割判已來外國の侮りを受たることなし、雖然前にもいへる如く外國の形勢大に變して航海の術盛に開け洋裡の通航は平陸よりも便捷にして火輪船を發明せし以來は千萬里亦比隣の如し、地球上氷海を除くの外は至らぬ限もなし、天險も持みがたき時勢となれる中に、日本のみ獨立鎖國してあるべき様なければ魯西亞は數十年前より通商を乞へとも准されず、英吉利の乞へるも准されざるにより、米利堅深く謀り遠く慮り、嘉永癸巳に到つて軍艦を引て浦賀に航し、兵威を耀し、虚喝を示し漸く其鎖鑰を開きたれば魯英佛の諸

國も相繼で來航し、各和親貿易の章程を立たり、仍之日本稍海外の情狀を審にすることを得たるに猶舊見を固執して短兵陸戰を本邦の長技と頼み、或は俄に銃陣を學んで侮を禦かんとする、實に可憐の陋習なり、今となりては日本孤島譬へば大船の如し、四海は陸地の如し、我陸軍を以て彼の海軍を待つは船に乗て陸上に戰ふが如し、彼主にして我客なり、我は進んで撃に難く退て守るに處なし、彼は利を見て進み不利を知て退く進退自在なれば致さることあつて致すべからず、且二三艘の軍艦を以東浮西出せば日本沿海悉く守らざることを得ず、徒らに奔命に疲れて戰はずして斃れんとす、又近海に横行して海運を妨げ奮はば全國彼是の通路を絶て困難いふべからず、江府の如きは數日を出ずして飢餓に至るべし。是等淺近の數件によつて考察すとも陸軍の用なくして海軍を興さずんばあるべからざるを知るべし、英國を按ずるに禦外侮治屬地不_レ得_レ不_レ籍_二兵力_一以壯國威。一千七百九十六年内外歩騎五萬七千二百五十人、一千八百十五年二十五萬人、一千八百四十八年歩騎十二萬二千八百人、小校九千九百人中校五千九百九十五人、馬一萬一千匹、一千八百五十二年十萬二千人、外二萬五千人屬東印度公司、印度土人隸軍籍者三十餘萬人、此外如造鉛丸、控地洞等匠役一萬五千人、大英兵船最爲著名、一千八百四十八年兵船六百七十三號、常用者四百二十號、火輪船亦在其數。礮一萬五千

位、水手二萬九千五百人、駐防水陸軍士一萬三千五百人將校九百人、與^三法蘭西^二戰時兵船一千號、水手十八萬四千人、至^三今日^二而火輪兵船計七百號餘甚多、船中軍士水手八萬八千人、軍裝火器船二百四十號云々。軍士較^レ前多至^三二倍^一、一千八百五十六年共二十餘萬騎云々と見えたり。文祿中豊臣氏朝鮮の役に日本の兵數三十五萬騎といへるを、英國に比較するに餘りなきにあらず。且日本と英國とは國勢相似たれば強兵を務むるも英に則り、假に英國の常用に擁して四百二十號の軍艦一萬五千位を備へ水手二萬九千五百人、軍士一萬三千五百人、將校九百人計を海軍となし、開港の諸地に於て兵營を設け兵艦を繋ぎ、不虞に備へ變に應じ互に相救はば略大方の侮りを禦ぐに足るべし。英國は西北に偏し地勢宜きを得ざれども、環海の便宜あるを以て克く遠略を擅にすることを得て強大今日の如きに至れり。況や本邦は地球の中央に位し、環海の便四通八達英に勝ること萬々なれば、幕府もし維新の令を下し固有の銳勇を鼓舞し全國の人心を固結し其軍制を定め其威令を明かにせば、外國の恐るるに足らざるのみならず、時あつて海外の諸州に渡航し我義勇を以て彼が兵争を釋かば、數年ならずして外國却て我仁風を仰ぐに到らん。」

この一節だけを讀んでみても、小楠の世界觀が、鎖國の島國に踞するものではなくて今日のいはゆる東亞共榮圈はおろか、全世界を八紘一字の仁風に靡かせるにあつたことが知られる。その後、百年、皇國日本の針路は、着々として先輩國士の築きなした歴史的方向に進んでゐることを知らねばならない。

第三は「士道」を論じてゐる。この士道觀もまた、今日の時勢を教ふところが多い。即ち當時、文と武とは徒に藝術の末技に流れて根本精神を忘れ、その名も文藝といひ武術と稱し「學者は武人の迂濶龐暴にして用ふるに足らざるを鄙しめ、武人は學者の高慢柔弱にして事に堪へざるを嘲り互に相容れず、治具却て争端を啓き矛盾を事とするは、日本國中の通弊にして其道の原頭明らかならざるによれり。」の現状にあるを歎き、文武ともにその根本は天下の治教を修めるにあることを明かにし、空文偏武を排して眞文眞武の大道を教育の中心とすべきことを説いたものである。これは、ひとり封建時代の病弊であるのみならず、現にわれわれの目前に横たはつてゐる生きた教學の重要問題であつて、日本教育の再建は、「修文練武」の根源にかへるにある。

この「國是三論」を草したのは萬延元年、小楠五十二歳の時である。この年には、七月には病氣のため衰弱したが、十月には江戸と福井との間に重大な行違ひ事件があり、病後の小楠はこれ

を見事に解決したので、いよいよその政治的手腕を發揮することができた。これがため藩内の暗流も一掃せられ、且つ天下の形勢も、井伊大老なき後は漸く幕府の權威は失墜し再び春獄などの活動を要する時ともなつたので、春獄も待望久しき小楠との面會を實現しようとして肥後藩の許可を得て小楠を江戸に招くこととなつた。

そして小楠は、翌文久元年三月下旬、いよいよ福井を發して四月中旬江戸に到着、はじめて春獄公に對面し、これからは、江戸にある春獄父子に進講することとなつた。春獄はよろこびのあまり、「道しある國となりしうれしさは君がまさしき功なりけり」といふ一首を小楠に送つて、今回の江戸と國許との間に起つた難問題を解決した小楠の苦心を感謝した。

小楠がはじめて江戸に遊學してから二十二年振りであるが、江戸の形勢はまつたく一變してゐた。すでに米・露・英・佛等の歐米諸國との間には、とにかく通商條約が締結せられ、横濱、長崎、函館などは開港場として外國との交易が開始されてゐる。しかし一方には、今なほ幕府に、條約調印の違勅を責め、鎖國攘夷の決行を迫る攘夷論者の猛運動があり、井伊大老の暗殺について、米國通譯官ヒュースケンの暗殺、高輪東福寺にある英國公使館の襲撃事件などがあつて、天下の風雲はいよいよ急を告げるものがあつた。小楠はこれらの事件についての感想を諸友に書

き送つてゐる。

文久元年八月には、小楠は春獄父子に對して歸國を願ひ、一旦福井に歸つて用向をすませると、十月福井を出發して熊本に向つた。その時は福井から七人の書生を同道したが、彼等は熊本では小楠堂に滞在して小楠の講義を聴き、また九州各地を見學した。小楠が熊本に歸つてゐる間に、或る一日、小楠は銃獵に出かけたが、その歸途、禁獵區とは知らず發砲した。折悪しく巡警に見つけられたため、遂に進退伺を出し謹慎せねばならなくなつた。何かにつけ肥後藩にとつて危険視されてゐる小楠にとつては、この小さい事件も決して看過されぬ瑕瑾であつた。

第八章 幕 政

★「文久二年六月、四たび越前に赴く、未だ至らず、遂に春獄公の命を得轉して直ちに江戸に之く、此時春獄公、幕府の總裁職の命を受くるに際す、是を以て先生國是十二條を條聞す、其中に將軍上洛諸侯の室家を封土に還す等の條項あり、大久保一翁（時に越中守と云ふ將軍の側衆頭取たり）之を聞き大に驚き力を極めて其議を拒む、先生之を聞き乃ち大久保氏の邸に往き

て面議す、氏領會の意無く顔色を變し議論澁滞す、先生曰く、若し諸侯告げずして室家を國に歸す者有らば幕府之れを禁止するの力有りや如何と、大久保氏渙然として悟る、此後深く先生を敬信せりと云ふ、而して幕府先生を登用せんと欲し春獄公をして意を致さしむ、先生笑て之を辭す幕府強る能はず。

此時浮浪暴激の徒、尤先生を指目す、一夜藩士某と一樓上に閑話す、兇徒有り、白刃を提げて階を上り來る、先生卒然立て賊の傍側より身を跳らして階を下る、賊擊刺に追まあらず、直に進て某を刺す、先生以て免ることを得たり、先生乃ち江戸を辭し越前に皈る（小傳）

小楠が、熊本にある間に、越前と肥後との間には、小楠の招聘を繼續するための交渉が成立し、かつての禁獵區の失策の問題も無罪放免となり、いよいよ文久二年六月、四度目の福井行となつた。しかるに小楠が北陸路に入らうとした時、江戸にある春獄から急使があり、小楠は途中から急いで江戸へ向ふこととなつた。

當時、江戸の形勢はまた變じて、春獄公の活躍を要する時となり、春獄は幕府の政事總裁の職につくこととなつてゐたが、小楠が春獄に進言して大いに幕政刷新に努力するやう勧めたので、

春獄もはじめて總裁就任を決意した。しかし正式に拜命する前に、小楠は中野雪江とともに大目付大久保忠寛に面會して、種々意見を述べた。その時、横井小楠の述べた意見のなかには、諸侯の參觀を中止して諸侯の財政窮乏を救ふべしといふかなり急進的な革新論があつたので、大久保は之に對して猛烈に反對した。そこで小楠は、然らば諸侯が若し勝手に國許へ妻子を歸したとすれば、幕府はこれを制するだけの實力があるかと反問したので、大久保もこれからは、小楠の改革論に敬服したと云はれてゐる。その後、大久保と小楠とは意氣相投し肝膽相照すといふ間柄となつたが、大久保忠寛こそ、勝海舟とともに幕臣中の傑物である。かの山内容堂の大政奉還論は後藤象二郎の發案のやうに云はれてゐるが、實はこれは坂本龍馬が文久三年四月、幕臣大久保忠寛から聞かされ、龍馬がこれを後藤に示したものであり、大政奉還論の眞の發案者は大久保であつた。大久保と勝とははやくから幕府の非力を識つてゐたので、大久保が小楠に幕府の實力を反問されてから、共鳴したのは當然であつた。

かくして文久二年七月、松平春獄が總裁職となり老中の上席にあつて、將軍家茂や後見の慶喜に對して、幕政改革について進言するやうになつたので、いよいよ、小楠の持論は、春獄を通して直接、幕政の上に實現されるやうになつた。小楠の持論といふのは、公武合體、舉國一致幕府

のための政治ではなくて、天下國家のための政治を實現するにあつた。しかも小楠の公武合體論は、單に幕府の存続のためではなく、尊皇的公武合體論である。これがため小楠は次の「國是七條」を建白した。

幕府に建言 七條

- 一、大將軍上洛して列世の無禮を謝せよ。
- 一、諸侯の參觀を止めて述職と爲せ。
- 一、諸侯の室家を歸せ。
- 一、外藩譜代に限らず賢を選びて政官と爲せ。
- 一、大いに言路を開き天下と共に公正の政を爲せ。
- 一、海軍を興し兵威を強くせよ。
- 一、相對交易を止めて官交易と爲せ。

なほこの七條の外に「金銀銅坐を廢し貨幣を公にす」「天下金鑛を開く」の二條があつたが、「小楠遺稿」によれば、小楠は「斯二條固より舉行せざる可らず、然れども幕吏急に舉行する能はざるの事情有るを以て併せて他の七條を妨遏するの恐れ有り、因て須叟二條を削り他日待つ

云々」とあるから、これらの小楠の改革意見の實現は、あらかじめ困難が豫想されたであらう。はたして春獄が、小楠の提唱した七條の改革方針をもつて幕政を刷新しようとする、老中はじめ幕議は、容易にこれを容れず、春獄は遂に憤然登營を止めて引籠つてしまった。ここに於て幕府の大目付岡部駿河守長常は、横井小楠を招いて改革意見を聴取した。その時の談話を中根雪江の「再夢紀事」によると次の通りである。

駿河殿 天下の形勢は如何。

小楠 實に危殆に相迫り候と相心得候。

駿 其子細は。

小 近年來幕府にて様々の御不都合有之に付人心更に服し不申、當來九州地杯已に騷亂之體にも相成候處、薩長等の一件も有之幕府も御心被爲附、橋、越兩公御出世等にて聊鎮定之姿候得共、決して眞治には無之暫く動靜を伺居候迄之儀にて、追々御悔改之御政跡無之候はば又々動亂に及ぶべきは眼前之事に付、此節一度亂世に相成候へば最早御挽回は不相叶恐乍御滅亡と相心得候。和漢古今の先蹤、亂世の内に創業之君には是非夫々之人材も有之、又非常の擧用も有

之故次第に強盛と相成候。又衰頽の世は治平之弊習門閥を重んじ候事故人材も無之舉用も格式有之委靡不振は素よりにて、種々の罪責を負ふ如くに成行候へば自然滅亡之道理にて候。一度亂れたるを中興の儀は中々出來候事には無之、後漢の光武も劉氏の血統迄にて民間より起候て創業も同然の義、唐の玄宗も一段失ひし天下自身にては難取返、肅宗によつて恢復は致候得共、祖宗之唐代には復し難く相濟、其他は治世より亂に入候を治世の君にて取返し候先例は無之候得ば、當時迎も一度亂世に相成候へばもはや御取戻しは難被成候得ば、唯今治世之内に御心付られ天下の人心に應じ候御政道有之候はゞ又々太平をも御保ち可被成か。夫迎も矢張創業の思召にて非常果斷之御所置に無之ては中々無覺束儀と答へらる。

駿 さらば如何にして當時之處にて挽回すべきにや。

小 幕府の御心得、當然之處靜謐致候得ば夫にて太平と思召候様之事にては回復之期は無之、眞に危亂に相迫候事を御會得有之舊見を去つて至誠の眞治を御求被成候思召興候へば夫則興復之基にて候。唯今危亂の説を御聞被成挽回之計を御求被成候處則安んじがたきの誠意にて、其誠を推て廣く治術を御探訪有之義挽回之道に有之候。當時幕府の力を以御恢復は難相適天下の力を以御挽回之外は無之候。

駿 天下の人心を治め一致に歸するの事務に手を下す處如何。

小 御上洛先務なるべく候。

駿 御上洛は迎も御出來難被成儀と相心得らる由にて種々難儀故障を被申出。

小 夫は出來ぬ方の御見込にて可有之、寛永之度杯は異朝の封禪巡狩の類は太平の餘光に候へば當時に用ゆべき儀にて無之、唯今の御上洛は神祖の一ケ年に兩度も御往來被爲在候程の易簡質素の次第ならでは難相適、諸大名の風呂桶迄も爲持旅行致候如き榮耀の流弊候へば御身を以て御改正之端にも可相成儀十分御輕便に可被爲は勿論候得共、又此節柄御警衛の爲に御旗本の若殿原二三千も被召連候も可然候。往來筋も老中の往來位の道普請にて可然候。右等之御趣向にて御取調御出來に相成候へば御打立之儀はいつ何時にても、御出來可被遊と被決候得ば、天下の人心も初て信服して被仰出も御食言ならざる事を信じ可申候。扱御期限之義は京都へ御伺も可然候。御指圖次第と相成候へば一年延候ても少しも御貪著無之候。近年御不都合之被仰譯、御降嫁之御禮、御親睦の爲何分御上洛と申事唯今にても御出來被成候様にさへ相成候へば夫にて天下は落付申候。必しも唯今ならでは不相適と申には無之候。然るを一番に指上候御勘定の筋より杯御調らべに相成候様にては出來ぬ方の被成方にて、不被遊して難適と申御趣意は

次と相成、被仰出候廉も難相立候は天下の服せざる所以に候。

駿 此條は如何にも敬服に候。其次は何事なるべき。

小 諸侯の困弊を釋き、妻子を國へ歸し、海軍を被興候はば兵力を強くすべき事に候。

駿 諸侯の參觀を弛め候義は是迄も評議有之候得とも未だ事情を得ず候。如何之振合に相成べき物か。

小 參觀を被止候ては重ねての參觀六ヶ敷可相成候へば述職に被代百日計も在府日々登城國政向等申談候様相成候はば公邊御趣意も貫通可致、右に付ては妻室も國住居御免に相成可申、且又無益之戍兵は解免可然候。

駿 海軍は中々失費難繼候。

小 是は幕府御一手にて相適ひ可申様にも無之諸侯と合體にて可被興義。當時海軍にあらずしては絶海孤島の日本國歩兵を以擁護出來可申譯は無之、士人も船に乗候へば心細く覺悟を不極しては不相成事故自ら士心を振ひ、外國に往來して見分を廣め候はば強兵是より先きなるは無之候。

駿 交易之道如何。

小 是も諸侯と組合外國へ渡海致候はば公平に其道開らけ可申、幕府に私有之候ては難被行次第なり。摠て金銀銅鐵等も官禁を被廢坐株を被停勝手次第に掘出候事に相成候はば諸侯も各力を盡し掘出候て海軍の備等は不足有間敷候。

駿 諸説何も感服之旨にて、それより公の當時御引入々次第如何之譯に可有之と被相尋に付。

小 越前一藩之定儀も有之次第にて、總裁被仰蒙候上は是非御議論も被鴨達度之處、今日之多端と申且閣老初各幕府從來之權柄を確持被致居左袒々向無之、多分は馬耳風に屬候故在職以來今日に至り一つとして事業相立不申、右様相成候も畢竟衆人を辨明論解して事を貫き候材力乏敷心許にて更に先き行き不致、此儘にては不本意は不及申天下之罪人とも可相成勢にて如何にとも致方無之故之事と被申。

駿 如何にも御趣意能々相分候間何分力を盡し今よりも、相辨じ可申、彌思召通り行はれ候事と相成候はば御出勤にも可相成哉。

小 其上にて出勤無之ては無禮と申物候へば是非出勤可相成。

と申候得ば、何分今よりは十分盡力相辨じ可申、御趣意能々分候間致安心候様吳々被申聞談濟と相成由。

これによつて見るに少くも岡部駿河守だけは小楠の幕政改革論を理解したもののやうである。なにしろ、小楠の國是七ヶ條のはじめの三ヶ條の如きは、徳川幕府の傳統的政策的根本的改變を要請する重大意見であつて、これに對して保守固陋な幕吏が反對するのは、むしろ當然であらう。しかるに、小楠と會見して親しく小楠の卓見明識に觸れた岡部駿河守が、これを幕府の有司に傳へたところ、諸有司も皆、小楠の幕政改革論の卓拔さに驚いたのである。

かくしてさしも難色を示した幕府側でも、岡部、大久保などの努力により、參觀交代の廢止をはじめ、將軍の上洛などの重大國策を斷行することに決したので、春獄も小楠や中根雪江の勸めに従ひ、いよいよ登營して所信に邁進することとなつた。一小楠の政見が着々、實行されるのはこれからである。沼山津の寒村から日本の政治の中心大江戸に出てから僅かに二ヶ月にして、牢乎たる幕府の政治的針路を、百八十度、轉廻せしめた小楠の政治力も偉大なものである。

ここに於て、幕府では、小楠を或は幕府の奥詰に登用せんとし、或は細川家から借受の形式で起用せんとしたが、小楠は二君に仕ふるの意なく主家に對する志操を堅持して固く辭退して動かなかつた。

かうして小楠は、直接、幕府の重職とはならなかつたが、總裁職春獄公の懐刀として、實質的に幕政を左右し、その理想實現の機會に遭遇したのであるが、好事魔多く、天下の形勢は複雑渾沌を極め、ひとたび衰運に傾きかけた徳川幕府の政治は、到底、一小楠の手腕によつて建直し得るものではなかつた。

また中には、參觀制度の改革、將軍上洛の實行などの重大問題が、小楠の献策によつて實現されるに對しては、もとより反對派の策動があり、また自信の強い江戸の儒者連中には、江戸にも學者も少くないのに田舎儒者小楠の意見に従つて、二百年來の幕府の政治を根本的に改革するといふのは何事であるかといふやうな反感や嫉視があり、事態は必ずしも樂觀はできなかつた。

當時、一方には生麥事件の發生によつて、薩摩と英國との外交問題が難關に乗りあげ、また京都の形勢は一變して、小楠等のいはゆる公武合體運動も、いよいよ難局に直面するに至つた。これがため、幕府の政治的立場もやうやく困難なものとなつてきた。これがため幕府内部でも、春獄と慶喜とが意見の對立から、ともに辭表を提出するやうな不統一の状態となつた。この間に小楠は常に春獄のために献策し、あくまで難局を打開して、幕政を改革し、尊皇の大義に基く公武

合體の理想を實現せんと努力した。かくしていよいよ、この年十二月中旬、春獄に従つて京都に入り、慶喜の同意を得て、山内容堂、島津久光などを迎へて、春獄と共に幕政改革を斷行させようと企圖したのである。

公武合體、諸政一新の年來の理想に一步前進するための入洛を前にして、小楠の身上には意外な蹉跌が生じた。文久二年十二月十九日、小楠は遂に刺客のために襲はれたのである。

當時は京都をはじめ江戸にも殺伐の氣が漲り、「天誅」と稱して暗殺の風が横行してゐた。小楠もまたかかる刺客の狙ふところとなつてゐた。かの坂本龍馬が岡本健三郎とともに勝海舟の開國論に憤激してこれを斬らうとし、春獄の紹介で海舟に面會したが、海舟の抱負をきかされ遂に門下生となつたのは、この年の七月のことであつた。その坂本龍馬はその後、やはり春獄の添書を持つて小楠とも會見して詰問したこともあつた。小楠もやはり海舟と同じやうに尊皇攘夷論者からは狙はれてゐたのだ。この年の九月、桂小五郎が中根雪江に會つた時、小楠のやうな尊皇の心の乏しい人物が、春獄の參謀となつてゐては天下を誤るから、暗殺せよといふ浪人や藩士が多いから、警戒してあまり外出せぬやうにと注意したことさへあつた。しかも小楠を取りまく險惡なこの空氣は、春獄や小楠の入洛を前にますます悪化してゐたのである。しかし小楠は例の通

り、一笑に附してゐたのかも知れない。

十二月十九日の夜、小楠は、肥後藩の江戸留守居役、吉田平之助が、近々京都にゆくので、同藩の都築四郎との三人で、お玉ヶ池の吉田の妾宅で送別の宴を張つた。初更を過ぎた頃、覆面抜刀の三人の怪漢に襲撃されたが、三人とも大小は床の間に置いて酒を飲んでゐたため不覺をとつた。梯子段の近くに居た小楠は、すばやく階下に降りたが、吉田、都築の二人は不意打を食ひながらも格闘して刺客を追拂つた。越前邸に駆けつけた小楠が、現場にとつて返した時は、賊の姿は見えず、吉田、都築の兩名は重傷で倒れて居た。しかし吉田は遂に死去した。

後に、刺客は肥後藩の足輕、堤松左衛門、黒瀬市郎助、安田喜助の三人であることが明かとなつたが、友を死地に残してひとり身を全うした小楠の行爲は、忽ち肥後藩の問題となつた。

事がなくてさへ小楠のことと云へば、あまり好からず思ひ勝ちな肥後藩側では、直ちに、小楠の身柄を引取つて國許へ送還することになり、これを越前藩に通告した。しかし春獄公としては、小楠を熊本に歸國させることは、非常な危険であるところから、中根雪江などを通して、肥後藩と交渉を重ねた結果、一時小楠を福井に送還することとした。

いよいよ、上洛して回天の大業をなさんとした春獄は、その直前に、參謀たる小楠を失ふこと

となつたのである。

なほ刺客に襲はれた小楠自身の心境は、次の書面に明かである。

宿許へ 文久二年十二月二十一日

一書奉呈仕候。益御機嫌克奉恐悦候。然ば私事不慮なる變事出来、誠に致方無御座痛心の至に御座候。右之一件之次第は来る廿五日吉田平之助京師へ被差立候に付其談之用向有之。一昨十九日之夕七ツ過より同人妾宅檜物町と申所に有之、二階にて都築四郎、谷内藏允参り、都築も廿三日に出立仕候間離杯之心得にて酒肴取はやし申候内、谷は先に歸り、夜五ツ過頃に至り何者にて候哉兩人拔身にて聲を懸二階に懸上り候を見受候間、私は上り口際に居候て大小取候間無之候に付兩人之者と行違ひ階子走り下り階下半にて又一人の者に行違ひ申候。無刀にて有之候間常盤橋御屋敷へ驅歸り(此道十丁位)差替追取、同所へ駆付候處狼籍者どもは退散致候跡に相成候。扱て承り候へば右之者ども吉田を目懸切懸り候間直に組合之内、一人之者吉田之股を切申候。夫より組合ながら落ち物分れに相成候。都築も一人切懸り刀鴨居に打込候間組合にて二階の縁より落物分れに相成、都築手疵天窓一ヶ所顔一ヶ所、吉田は顔に一ヶ所、股に一ヶ所、吉田は餘程重手にて候得共只今の模様にては命分には障り申間敷、都築は格別の

事にて無之候。誠に不慮の變難にて絶言語候次第に御座候。扱狼籍者ども何者なるかは相分り不申候得共、私家來忍び提灯(無紋にて御國の山形印有之)にて迎に参り候節怪敷者ども十二三人も其近邊に居候て一人は其跡に付來り候由申出候。私驅歸り候道にては見受不申、其夜龍ノ口詰足輕之者黒瀬市郎助、安田喜助と申者晚方より外出、直様致出奔候。此者外出之節長州之者一人誘引にて出候。近來取沙汰にて私開國談を唱へ申候逆意趣を含むもの御國者ども長州土州の者杯示合せ致閣討企有之由にて、長州藩桂小五郎と申人より密に心付候事も有之、外にも土州之藩よりも同様申聞せ候。又吉田は先年彦根大老擅權之節大老方に相成色々取計候由にて土州人杯憎居候唱専ら有之、近日は兩三度も吉田妾宅何とやらん見繕ひ等致候由、何れも私、吉田を目懸候に相違無之、右出奔人専吟味に相成、一人にても被捕候へば何も分り可申候。右之通りの次第にて誠に不思議之禍に逢申候。則別紙之通書付差出し申候。私其場之處置階子を懸下り候へ共、有合之物捧にても何にてもすつとり懸上り兩人を助け身命限り働候儀當然にて御座候處、無刀故駈歸り候て其機に後れ候處士道の處置を失ひ候て深恐入奉存候。依之病氣下之願書春獄様迄差出、龍ノ口へも内意申入置候。一日も罷下り候心得に御座候處、此許君臣にては別格之議論有之候。其立意は越前國中五ヶ年來種々之混雜

之所今日に至り上下一致治平に至り候も全く私致心配候儀故にて有之候。且御奉職以來今日迄御處置等私内々御助け申上候事様々にて實に杖柱と御依頼に相成、因て此度之變亂も起り候に相違無之候。然るに私此節之處置士道を失候故御國許に罷歸り相愼候儀私に於ては重疊尤之次第にて候得共、怨を懸候者様々有之道中は勿論御國許に歸り候後と申候ても如何成禍變致出來候儀も難斗事に候。若哉左様之變も出來致し候へば春獄様に於ては格別之功勳恩も有之而已ならず師弟之禮をも御取被成候御事に候へば一旦の禍誤を以御見捨被下候儀は天地神明に對し御濟不被成、此上此信義を御失被成候て何を以總裁職を奉ぜらるる哉、實に御一身之大事に關係仕候。尤是迄等閑に押移られるより此節大變も生じ候事にて夫は重疊之御誤に有之候。乍去夫は過去之事にて致方も無之事、是より後之事重疊御念被入、私事龍ノ口の様に引取せ度候、昨日懸合に相成候間、右之通之御主意にて禍亂治候迄は福井方へ御引取せ被成、福井に閉居罷在候へば御安心被成候との御主意にて、今暫く龍ノ口へ此次第被仰向候段、且太守様へは御上洛之上御直に御相談可被成との趣、昨夜執政より御達有之候。於私何とも可申上筋無之只々恐入奉存候。私一身はケ様之不束仕出申候上は如何成禍變も聊か厭い可申様も無御座候得共、春獄様御一身に關係仕候に付此上は龍ノ口との御相談

之落着致候處に處置可致相心得申候。右之次第にて誠に痛心之次第にて御座候。嗚々御驚可被成、何共申上様も無御座候。乍然人事變態如此事に候へば乍憚御氣強に被思召、家内之面々御引立被下度重疊奉希候。此節は他事差置此段迄申上候。縁家中心易き方々別に書狀も差出不申候間此紙面御見せ被下候様奉存候。是より後之儀は後便より可申上候。已上。

別紙届狀

私儀昨十九日夜都築四郎。吉田平之助近々此表出立に付檜物町々家に於て離杯相催候處、五時過狼籍者兩人白刃を提樓上之登候を見懸候得共、其節私儀腰刀側近く無之に付直様階下え走り下り候節又々一人に行違申候。夫より松平越前守様御屋敷え馳歸、兩刀追取、同所え駈着候得共事散候後に相成候。右に付尙又家來共之承糺候處、最初私迎に罷越候節檜物町河岸に致覆面候者十三四人罷居、迹を慕ひ罷越候様子に御座候、其節都築四郎、吉田平之助手疵を免申候。私儀狼籍者可打留處腰刀身近く不差置機に後れ奉恐入候。右之趣即夜不取敢御達申上置候得共、尙又篤と承糺候次第奉申上候。以上。

この文面によつて、小楠自身も、刺客に襲はれた當時の行爲を「士道の處置を失ひ候て深恐入奉存候」としてその不覺を認めてゐるが、しかし、肥後藩の非難するやうにはたして小楠は士道を忘却したものであらうか。場所が場所であり、また酒席に婦人も待つてゐたといふやうな不利な立場にあつた爲め、非難も大きくなつたが、小楠の心境に立入つてみれば、この國家の一大難關を突破して日頃の理想たる公武合體、舉國一致の新政治を實現しようとしてゐる小楠が、名も無き怪漢のために斃れるといふことは、國家的にも一大損失である如く、まだ死にたくないと思へたことは必ずしも士道忘却とは斷言できないであらう。「小楠遺稿」に「賊擊刺に追まあらず」とある如く、小楠の機敏なる行爲は、臆病者のなし得る處ではない。もしこれが小楠の豫想通り、小楠が大小を持つて現場に歸つた時にもなほ格闘中であつて、一刀のもとに賊を斬つたとすれば、問題はまた別である。しかし事態はさうした辯護の餘地もなく、肥後藩の態度はあくまで強硬なものがあつた。この間にあつて越前藩、殊に春獄公の痛心は非常なものがあつた。

その結果、一時、福井に歸還することとなつた小楠は、上洛の希望も水泡に期し、極秘裡に江戸を出發して、福井に屏居の身となつた。

一方、春獄は翌文久三年二月、山内容堂と相ついで京都に入り、公武合體策の實現に劃策した

が、天下の情勢はますます不利となり、生麥事件の英國の態度もいよいよ硬化してきたため幕府の立場は困難を極めた。春獄も今は懷刀たる小楠もなく、收拾すべからざる混亂の裡に遂に總裁職を辭職し、各方面の猛烈な留任勸告を退けて無斷退京を決意して三月下旬歸藩してしまつた。このため春獄の藩に於ける信望にはかに失墜した。

この間にあつて小楠は、藩内の動搖する人心を鎮め、更に天下の大義に立脚する藩議をまとめるなど活動したが、形勢はますます不利となるばかり、今となつては小楠の革新意見も藩内でも重要視されず、もはや福井にあつても爲すべきこともなくなつたので、文久三年八月、福井を去つて熊本に歸國した。小楠の福井に於ける活動も、滔々たる四圍の情勢には抗することができず、龍頭蛇尾に終らざるを得なかつた。

しかしこれを以て、小楠の政治的識見が、誤つてゐたと観ることはできない。小楠は時勢に敗けたのではなかつた。小楠の指導しようとするところまで、まだ時勢がついて來なかつたのである。それには一先づ退いて、時運の熟するを待つほかはない。小楠の思想は常に時勢に一步も數歩も先んじてゐた。世の非難を受けたのも、そのためである。いろいろの迂餘曲折はあつたにせよ、時勢の中心軸は、小楠の指呼する方向に動いてゆくのである。ただ今は、退いて時を待つ

ほかはなかつた。その間に小楠自身も自己の精神生活を内觀し、新しい世界を創造せねばならなかつた。かうして小楠の歸國は、必ずしも敗殘の一途ではなかつたが、しかしこの心境を識るものは、ただ小楠のみであつたであらう。

第九章 閑居

★「三年八月熊本に歸る。

元治元年、藩廳先生江戸に於て刺客に抗せざるを追討して世祿を沒收す、先生心を時事に留め、意に介せざる者の如し、時に天下の形勢愈切迫せり、薩の藩士某々又坂本龍馬等が如き往來中必ず沼山の閑居を訪ひ其の意見を請問する者多し。

先生嘗て云ふ、我邦海軍の經畫尤も緩くす可らずと、是に到りて乃ち海軍問答録を著し島津久光公の京都に在るに贈呈す、又先生一姪有り、一は左平太、一は太平と云ふ、始め勝氏に托して海軍を學ばしむ。後米國に遊ばしめんと欲す、然れども其國禁未だ解けざるを憚る、後藩主の許を得て乃ち姓名を伊勢と改め、長崎より米船に培乘し米國に赴かしむ、時慶應二年な

り。〔小傳〕

幕政改革のこと志の如くならず、ひいては福井藩政さへも、到底、建直しの希望を失つた小楠は、いよいよ文久三年八月十一日、反對派の妄動を警戒して夜陰に乘じ福井城下を出發して、歸國の途についた。しかし歸るべき熊本に待つてゐるものは冷酷な士道忘却の非難であつた。

にげだして横井いひ譯都築だし

いき恥よりも死ぬが吉田よ

當時、肥後藩内にはかの刺客事件の時の、横井、都築、吉田の三人の名を歌ひ込んだこんな狂歌さへ流行してゐた。これによつても當時の小楠に對する空氣を察することができるであらう。かかる空氣のなかへ敗殘失意の小楠が、歸國するのである。しかも、潜かに師の歸國を歡迎すべき苦の小楠の門下生さへ、今は世の非難や、嚴罰に處せられるであらうといふ噂をきいて、小楠に切腹を勸告しようといつてゐた。事實、門生等は、小楠の熊本城下にはいらないうちに之を迎へて西山方面に導き、そこで切腹させようといふことになり、城外まで出迎へた。そして門生

達は、今度こそ小楠も意氣消沈してゐるだらうと思つてゐたが、迎へて見れば、意氣軒昂、門生達の先頭になつて城下入りをするので、門生達もこの意外な師の態度に機先を制せられ、誰も切腹の事など口に出すものがなかつた。

小楠は歸宅と同時に、藩府に對して「私儀去る十一日越前福井表出立仕此元へ着仕申候、此段可然様被成御達可被下候との届書を提出した。これと同時に越前藩の使者からも、春獄から直書をはじめ小楠宥恕に關する數願の書面が届けられた。

しかしながら藩内の非難も高く、また藩としての前例もあるので、遂に肥後藩では、十二月に至つて、小楠及び都築四郎の罪を申渡し、兩人とも知行を沒收して士席を除かれるといふ嚴罰であつた。その罪案は次の通りである。

[182]

横井平四郎

其方儀榜示犯禁に付ては及_レ違候趣も有_レ之候付諸事謹慎を加、私之宴會等相憚可_レ申處去年十二月十九日之夜、都築四郎、吉田平之助申談、江戸町家に於て酒宴相催候席に狼籍者共拔刀にて罷越、見受候はば俱に力を合相當之處分も可_レ有_レ之處、四郎、平之助成行さも不_レ顧其場を立去未練之次第、士道致_三忘却_一御國恥にも係り、重疊不埒之至に付屹度被_二仰付_一候筋も有_レ之

候得共、御宥儀を以被_二下置_一候御知行被_二召上_一、士席被_二差放_一旨被_二仰出_一之。

都築四郎

其方儀江戸詰中去年十二月十九日之夜吉田平之助、横井平四郎申談於_二町家_一酒宴之席之狼籍者共拔刀にて罷越、手疵負候とは乍_レ申、平之助儀も深手を負候はば俱に力を合せ相當之所分も可_レ有_レ之處、其場を立去候様子に相聞未練之次第、士道致_三忘却_一御外聞にも係り不埒之至に付當御役被_二差除_一、被_二下置_一候御知行家屋敷被_二召上_一、士席被_二差放_一旨、被_二仰出_一之。

[183]

もとより小楠の行動がはたして士道忘却であるか、またこれに對する罪の妥當なりや否やについては、種々議論のあるところであるが、小楠は、この嚴罰を甘受してこれより沼山津の四時軒に謹慎することとなつた。かくして幕政の樞機に參劄して天下國家を動かしてゐた小楠は、今や一介の浪人となり、沼山津の閑居に風月を友として悠々自適の生活に入つた。當時の心境を歌つた詩には次のやうなものがある。

客稀に柴門鎖して開かず

閑園杖を曳いて幾吟回

日は仙岳に沈み暮霞紫なり

偶々西窓に坐して酒杯を呼ぶ

x

笑を含んで家人、酒を温めて來る

請ふ君一酌夕時の杯

初霜、白雪佳味と雖も

又是れ釀成新にして酷を發す

x

東海の波濤、北越の雪

飽くまで光景を看、百杯を傾く

十年限無し風塵の客

故山に歸臥して雨聲を聽く

これらの詩によつても、小楠が悠々自適、塵外に遁れて花鳥風月を友とする閑居の生活を想像することができる。かうした謹慎逃避の生活はこれから五年も続いたのである。この間には讀書、思索、散策が、そのあけくれの日課となつた。

しかし、元來、小楠はその性格として、まったく世俗と隔離した孤獨の生活を続けることはできなかつた。また世俗もまたそれをゆるさなかつた。殊に小楠の以て生れた教育者の性格は、ますます圓熟し、門人はもとより田夫野人にも道をきき教を垂れて倦むことを知らず、またいかなる進境にあつても思索と修學を忘れることはなかつた。勝海舟の編んだ「亡友帖」のなかに小楠について「先生は豪邁の質にあらず天姿濃厚、英敏起群。肥後に在る常に不得志、或は田野に逍遙し川潭に釣る。學士論客の其廬を訪ふ終日談笑毫も倦色なし、客觀を罄して去る。樵者、田夫に話す、皆先生の言を聞くを樂み、先生また倦色なく欣々然也。其胸襟以て思ふべし」とある。また自ら園藝や茶の栽培に努めるばかりでなく、その地方の産業の奨励に意を用ひ、製茶、養蠶などの業を勧めたのは、小楠のいはゆる實學精神の表はれであらう。

その他、西洋醫術の鼓吹に努めるなど、おそよ世の實利實益となることについては、常に進歩的な努力を惜しまなかつた。かつては幕政の中樞に参劃した身ではあるが、郷に歸つては過去の

經歷を誇つたり自ら高く居るやうな態度はなく、百姓商人の別なく、來るものは悉く同志として交り、郷に入れば郷に入りびたつた生活であつた。沼山津に開業してゐる貧しい眼科醫に蘭法の眼科機械を購入させようとして、その資金募集のため講を設ける世話までしてゐる。その時、次のやうな「講社記」を書いてゐるが、いかなる俗世間の些事に對してもやはり、全精神を打ち込んだものである。

「内外の科を合せたるは蘭醫の道にして、其術専ら器械に在り、眼科の如きは、其器無れば其術施す事を得ず。是桂氏の爲重く嘆ずる所以なり。僕等一策を生じ敢て乞ふ、同氏の知己病家の諸君一口三金を出し講社を結び、桂氏をして器械を求め崎陽傳習の術を盡さしめんと欲す。是唯桂氏の爲のみならず救民の一術にあらざらん哉。同氏清貧諸君の熟知する所なり。二番は來年歲除より之を始めん。三番以後治術盛行するに至ては貧弱歲除二會を行はんと欲す。諺云老少不定と。桂氏萬一の變あらば、元金何れの所より之を出さん。肯請諸君之を捨て以て冥禮を祈り講社は舊に依りて行はん。」

文章のなかに小楠の眞摯な友情と朗かな生活風情の躍如たるものがある。かうして郷間の俗事

にも没頭すれば田舎の閑居生活にも満ち足りるものがあつた。ここにも小楠の以て生れた教育者的な性格がある。

しかしながらかかる閑居にあつても忘れようとしても忘れる事のできないのは、天下國家の事であつた。憂國の心はまた小楠の精神生活の中核である。徳富蘆花の文章に「人間は白骨にならぬと事は出來ぬとは先生の常に云はれし言で、名利の關を早々越えてしまわれたれど、併し中々仙人の様ではなく、身は沼山津の小村に隠れても、日本と云ふ考は不斷先生の胸に蟠つて、憂國の念片時も心頭を去らなかつた。塵俗萬縁水流に付す、菰を種を草を拂つて憂を知らず。閑來總て老農の事に隨ふ、一種忘れ難し七道州。魚を釣つても、又王あらば太公望の事をやつてみようといふ抱負は、五尺の短身に溢れてゐた。」とあるのは、よく當時の小楠の心境を描いたものである。

また小楠自身が、殊更、天下國家の事を忘れようとしても、當時、天下の形勢がいよいよ切迫して徳川幕府の衰運が決定的となるにつれて、江戸から京都から、福井から水戸から、各地からの情報や密書が、四時軒に集つて來るのである。もとより肥後の同志も、足を四時軒に運んで小楠の意見を聴くのである。もはや國家的存在である小楠は到底、天下國家と離れることはできな

かつた。

かうなつては小楠も、拱手してはゐられず、時事に對して建白や著述を出して自己の意見を發表した。その中に、慶應三年に越前藩士松平正直に送り、松平から執政へ、執政から藩主春嶽公へ効した國是十二條がある。それは次のやうなものである。

國是十二條

一、不_レ關_二天下之治亂_一、一國以_二獨立_一爲_レ本。

自然の天理に則り自然の人事を盡し利害得喪一切度外に付す。此の大條理明なれば吉凶禍福凡そ外事の變態人心を動すに足らず。其理に隨て順應し信義をして天下に明かならん事を欲す。

一、尊_二天朝_一、敬_二幕府_一。

誠心奉戴非心を正し非政を匡し、必ず皇國をして治平ならんことを欲す。

一、正_二風俗_一。

風俗の正しからざる。法制禁令固より廢す可からずと雖も終に是れ末政數ふるに足らず。君臣一徳治教明なれば風俗自然に正に歸す、所謂民免而無_レ耻、有_レ耻且格、何等の道理ぞ、人をして感動せしむ。

一、擧_二資才_一、退_二不肯_一。

一、開_二言語_一、通_二上下之情_一。

一、興_二學校_一。

唐虞三代の大道を明にし推て西洋藝業の課に及ぼす。其要は人君躬行心得に發して觀感の化に本づく。

一、仁_二士民_一。

一、信賞必罰。

一、富國。

一、強兵。

一、親_二列藩_一。

凡彼に嫌疑あらば分明に正言し、理あれば止む。改むれば止む、或は欺に其の道を以てすれば止む、孟子葛伯仇餉の言其理甚分明なり。

一、交_二外國_一。

右十二條試に國是の目を定め、儘付するに愚意を以てす。以て君子の需に應ず、妄言の罪逃るる

所なし、幸に之を恕せよ。謹呈。

右によつて小楠の政治的立場は「尊王朝、敬幕府」といふにあることがわかる。他に年月不詳であるが「方今の勢四條」といふ建言がある。それにも次のやうにその點を明かにしてゐる。

- 一、方今の勢治亂に拘らず、方先一國獨立の基本を定むべし。
- 一、一國の獨立は國論を明にし好悪を定め人心を一致するに在り。
- 一、國論を明にするに内外の分あり。
- 一、王室幕府を尊奉す。所謂尊奉は其是非を問はず尊奉するにあらず。非心必ず匡し非政必ず正し、心力餘さず匡收。

ここに尊奉の意義を明かにしてゐる。

かうして時事に關して建言し建白し、或は著述をもつて意見を發表してゐたが、天下の形勢がいよいよ急迫するにつれて、遂には閑居を出て足を時勢のなかに一步踏み出さねばならなくなつた。即ち慶應二年の頃には、肥後藩主から國手に關する意見を尋ねられたが、小楠は白骨同様の身でいかでか御用に立つべきとて固く辭退したけれども許されず止むを得ず熊本に出て七日間返

留し、意見を述べて沼山津に歸つた。その後も召出されたが辭して出ない。遂には重臣がわざわざ沼山津に来て諮問しては小楠の意見を採用した。

また小楠は、江戸にあつた頃から勝海舟と交り海軍を興すべきことを唱へたが、沼山津にあつても、「海軍問答書」(元治元年)を著してこれを島津久光公に呈した。「海軍問答書」のはじめには、

「我國最モ急ニス可キハ海軍ニ在リ然ルニ海軍ハ費用ノ巨大ナルヲ憚リ自然遷延ニ付スルノ病ヲ免レサルガ爲メニ起草シテ島津之光公ニ呈センモノナリ時ニ久光公強藩ノ力ニ據リ朝廷ヲ戴キ幕府ヲ匡正シ天下ヲ一新セントスルノ志アリ」

とあるが、この起草の動機について、山崎博士は「小楠は本文を艸するや當時長崎に滞在中の勝海舟にこれを寄贈し、なほ其の後海舟に書面を寄せて本問答書中の海軍に要する費用支辨法に關して補説する所あつた」と述べてゐる。いづれにして内外の情勢緊迫するにつれて、年來の持論たる海軍興起の必要を痛感し諸侯協力して一大海軍國たらしめることの國家的重要性を説いたもので、憂國の至誠から發したものであることは明かである。これは單なる空論ではなく、問答體